
幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

++

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち?

【NZコード】

N4206Z

【作者名】

十十

【あらすじ】

大切なモノを守るためになんだって犠牲にする　それが俺の生き方だ。殺し屋である少年の日常と非常。大切なモノを守るためにとは言え、人を殺してしまってもいいのだろうか？　ダメなんじゃないか？　日々そんな感じで葛藤し苦悩する少年の行く末は。

プロローグ（前書き）

駄文ですが、どうか最後までお付き合っていただければと思います。

プロローグ

闇夜に浮かぶ幾多の摩天楼。

いま俺が視界に捉えているその光景は、夜空に瞬く星そのもののようだ。

逆に、夜空自体には星が一つたりとも存在していない。……温曖化とかフロンガスとかが関係してるのがもな。

結構どうでもいいことを考えながら、俺は腕時計を確認する。

午後一一時二六分。

予定時刻まであと少しうと迫り、俺の胸はだんだんと高鳴つてきた。時計のカチカチと動く針を見ていたらさらに緊張してきたため、俺は時計から摩天楼に目を戻す。

うん、やっぱいい眺めだ。俺がいるのは地上一〇〇メートルに位置する屋上で、ここから見える景色は俗に言つあれだよ、あれ……そう！一〇〇万ドルの夜景つて奴だ。見るからに金かかつてそうだもんな。……つてあれ？一〇〇万ドルの夜景の意味つて、金のかかつた夜景つてことでいいのか？……ま、どうでもいいや。

にしても寒つ！Tシャツと短パンなんかでこんな場所に来るもんじやないな。まだ九月の上旬だからつて甘く見てたぜ……。うう

……寒つ。

地上ゼロメートル地点とはまったく異なる突風吹きすさぶ中、俺はその場で駆け足をしながらもう一度時計に目を向けた。

午後一一時二九分。

「そろそろだな……」

俺がこんな寒空の下にいる理由は、一分後にやらなければならぬことがあるからだ。

そのことを考えると、また緊張が湧き上がつてくる。寒さと相まって、俺の体は小刻みに震えだした。あ……これはちょっとヤバイ。手元がブレるかも。

しかしそうも言つてられない。これは絶対にしくじれない仕事なんだ。もしも、もしもしくじれば、俺自身が危うくなるかもしい仕事なんだよ……。くそつ、また震えがきつくなつたぜ……。

「……落ち着け、落ち着くんだ、俺」

咳きながら、俺は仕事道具を掴む。三脚によつて固定されている狙撃銃を。

「大丈夫、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるように言葉を発し続けながら、俺はすでに倍率も標準も合わせてあるスコープを覗く。

スコープが映しているのは、とあるビルの会議室のお偉いさんが座る席だ。

さみい……くそつ、早く来いよ。これ以上体温が下がると精度が落ち 来た……っ！

心で愚痴をこぼしていると、裕福そうな強面老人がスコープの中央に現れた　と同時に毎度のことながら、俺の中に残る僅かな良心が津波のように押し寄せてくる。

こんなことしていいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことするの間違つてると思わないのか？

こんなことこんなことこんなこと……こんなこと……こんな

いや違う！……これは何不自由なく暮らすためなんだ！ 生きる

ためなんだ！……でもそんな自分勝手のために……俺は人をこう

違う！……違うんだ！……これは自分勝手じゃない！ こうしてくれつて頼む人がいるから、俺はそうして欲しい人のためにやつてる

んだ！……自分勝手じゃなくて誰かのためだ！

でも、それが自分勝手につながるんじゃないのか？

違う！……うるさい！ もう何回もやつてることだろ！ いい加減

にしないと……こんな感情はもう失くさないと……。非情になれ。

非情になるんだ！

俺は引き金を引いた。

刹那
乾いた破裂音が虚空にこだました。

「おれ」

ヌーリーを覗いていたが狙撃の結果をハッサリと捉えた結果

「ハハ、ハネ、はあ
はあ、あ、ア
昇ぐ、逃げなー」

ひとりしきり吐き終えた俺は、すぐさま銃の収納に取りかかる。は

ついでに今まで覚えていたことなんてまるで忘れた。一刻も早く

行動だから。

罪悪感に浸る墨れなし

銃を収納し終えた俺は、勢いよく非常階段を駆け下りる。カンツ
カンツカンツカンツと、俺の逃走ルートを向こうに誇示しているか
のような金属音を、立てたくないのだが立ててしまう。実際はそん
なに大きな音ではないんだろうが、俺には街中に響きまくっている
んじゃないかと思うほどに大きく聞こえる。そして、それがまた俺
の恐怖心をあおり、いつそう焦らせる。

卷之五

俺は下りるスピードを上げた。当然、音はよりいつそう早く大きくな聞こえるようになる。プロのドラマーのようなリズム。普段聞けば小気味よく聞こえるのかもしれないが、いまはこの音を聞いた者が報復にやつてくるのではないかと思つてしまつ。

俺は水浴び後の大きさには身震いをした
もちろん、言つまでもなく恐怖からだ。

「ハア、は、ハア、はあ、ハあ」

俺はとにかく走つて走つて駆け下りる。

そうして、途中何度かコケそうになりながらも無事に地上まで走りぬいた俺は、何事もなかつたかのように街へ溶け込む。ここには大都会。地上まで下りてしまえばこちらのものだ。もう次の日にならうかという時間帯だが、人はまったく減らない。むしろ増えているような気がしないでもない。ブロンド超絶美人にマッチヨな黒人、俺と同じ年ぐらいの少女が男と歩いていたりと、紛れ込むにはもつてこいだ。

ちなみに、銃はギターケースの中に入っているからバレはしない。俺はいま、どこからどう見てもバンドの練習帰りのガキだ。リズムでも刻むかのように頭を振りながら歩く。

しばらく進み非常階段から結構離れたところで、俺はギターケースの肩紐を気にかけるフリをしながらちよつとだけ振り返つてみて立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。

ふう……危なかつたあ、今回はマジでギリギリセーフだつたぜ。あと何十秒と遅かつたら俺はいま、蜂の巣で作ったオブジェみたいになつてただろうからな。

「はあ……」

顔をしかめにしかめた。

なんでかつて言つと、さつきまで潜伏してたビルの下にどう見ても一般の方ではない黒服の男たちが数人いらつしゃつて、獲物を探すハンターみたいに辺りをキョロキョロと見回していたからだ。直

立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。

俺は肺にためていた空気を全て押し出すように息をはいた。これはため息じゃない。心からの安堵を表現したんだ。

危険な仕事もこれでとりあえずは無事に終了つてわけだからな。

さてと、あとは帰るだけだ……。

愛しいあいつが待つてる家にな。

腕時計で時間を確かめると、すでに一時を過ぎていた。

俺は閑静な住宅街の中を歩いていた。まあ、一時を過ぎればどこも大抵は閑静なんだろうけどな。

と、そんなバカな事を考えていると我が家が見えてきた。いや、正確には家つていうか道路に出てる看板が見えてるだけだ。

『ストルス雑務店』っていう看板。

俺の家は自宅を店舗に自営業をやってるんだ。

雑務店っていうのは、要するに何でも屋。

本当は父さんと母さんが営んでたんだけど、その父さんと母さんは一年前に事故で死んでしまった。以来、俺が継いで営業している。あ、そうそう。言つておくけど、殺し屋つていう仕事は俺が勝手にやり始めたことで、父さんと母さんは人殺しなんかじゃないからな。

父さんと母さんは、ただ近所の人たちの助けになりたいっていう意志の下に何でも屋を始めただけなんだ。だから、父さんと母さんに変な思いを抱かないで欲しい。

蔑むなら俺だけを蔑んでくれ。父さんと母さんの店を汚してしまつたのは、紛れもなく俺だから。

だから、父さんと母さんに対して、心の底から申し訳なく思つてる。悪いこととして「ごめんなさい、人の道を踏み外して」「ごめんなさい、店を汚してしまって」「ごめんなさい」とつて。

悔いても悔いても悔やみきれないほどに申し訳なく思つてる。

だつたら殺し屋なんかやるんぢやねえよつて思うかもしれないけど……でも、そうしなければならなかつた。……でないと生きられなかつた。

父さんと母さんが生きている時、つまり、何でも屋を大人一人で切り盛りしている時ですら、家計がそれなりに厳しかつたんだ。

なのに、父さんと母さん、大人一人が死んで、俺一人でやり始めたらどうなったと思う？

生活できなかつたよ。

俺だけじゃできることも限られるし、そもそも当時中等部だった俺に依頼しようとする奴なんて一人もいなかつた。

かなり苦しい日々が続いた。……それが俺一人ならよかつたさ。でも、俺には妹のリールがいるんだ。だから、そのリールのためになんとかしないとつて俺は考えて、それであちこちから色々な情報をかき集めた。なんでもいいから金になるようなことを必死に探し始めたんだ。

そしたらあつた。この時代にも殺し屋つていう仕事が。

最初はやろうかやらないかでもの凄く葛藤したことを覚えている。けど、いま現在の俺を見てもらえば分かる通り、俺はその殺し屋つていう仕事をやることにしたわけだ。いまでも鮮明に思い出せる。

最初のターゲットをナイフで突き刺した時のことを。罪悪感で満ちたことを。でも、口座に結構な額が振り込まれているのを見て思わず笑つたことを。

ハハツ、俺はもう堕ちてるんだ。

ダメ人間なんてもんじやない。もう壊れに壊れて破綻しまくつてる。

こんな奴、ホントならリールのそばに居ていい人間じやない。でも、俺がいないとあいつはどうなる？

きっと、いや絶対に一人では暮らせない。だつてさ、リールはまだ小六なんだぞ？ 生活力なんていまはない。

だから俺は、自分が破綻していると分かりながらもあいつのそばにいる。あいつに何不自由ない生活をさせてやるために、俺はそばにいる。これからもそばに居続ける。

それにさ、リールは俺の原動力なんだ。リールがいるから、俺はなんだつてできるんだ。逆にリールがないなら、俺は何もしない

かもしだい。

と、色々考えながら歩いていると、家の玄関前まで到着した。
さあて、その原動力にもうすぐ会える。俺はほころぶ顔を抑えられない。

玄関の鍵を開けた俺は、もの凄い小声で「ただいま」と言いながら家に踏み込んだ。もちろん返事はない。といつよりあつたら困る。なるべく音を立てないようにしながら、俺は一階の自分の部屋へと向かう。

真っ暗な自室にたどり着いた俺は、ギターケースを隠し収納スペースにしまうべく棚をスライドさせる。……スライドって言つたけど、ホントは押してずらしただけだ。一冊の本をスイッチ代わりにしてウイーンって開くとかじやないからな。

まあそれはさておき、俺は眼前にお田見えしている隠し収納スペースにギターケースを立てかける。ギターケースを収納できるぐらいには大きな空間だ。おおよそロッカー二つ分ぐらいだ。

ここには他にも殺しの道具が隠してあつたりする。例えばスタンダードにサバイバルナイフとか、電圧を異常なまでに高めたスタンガンとか、あんまり使わないけど普通のハンドガンもある。武器だけじゃなくて睡眠薬なんかの薬物も揃えている。

俺も一応は殺し屋だからな。それなりに道具集めはしてるつてわけさ。けど、今後は特に増やす予定もない。大体は狙撃銃でカタがつくからな。

「んぐつ……」

ズズズツと、用が済んだので棚を元の位置に押し戻す。

隠し場所がそんなところで大丈夫なのかと思うかもしれないけど、心配には及ばない。この家には俺とリールしか住んでないし、そもそもリールにはこの棚をずらす力はないだろうし　つてそうだ、その華奢な体を拝みにいかないと。

俺は抜き足でリールの部屋へ向かう。

あんな汚い仕事をしたんだ。可愛い妹の顔を見て色々相殺しない

とやつてられないって話だ。

リールを起こさないと、俺は慎重にドアを開けて忍び足でベッドに近づき 目を見開く。

「……ああ、可愛い」

数時間ぶりに見たリールはとても、それはもう凄まじいほどに變らしい。

金色の艶やかな長い髪。いまは閉じてるから分かんないけど、開くとめちゃくちゃくりつとしてて猫みたいに大きな愛おしい目。小柄な身体は白を基調としたパジャマに包み込まれている。

外見だけ見ると、天使みたいでどこか大人しそうに見えるんだけど、それはまったく違うんだなあ。実際は凄く天真爛漫で、この姿とのギャップが最高だ。タオルケットを蹴飛ばしてるのがまた可愛いらしいじゃないか。

俺はそのタオルケットを腹にかけてやり、「おやすみ」と呴いてからリールの部屋を出た。あんまり長居して起こしても悪いからな。それに長居なんてする必要ないんだ。俺はリールの顔をチラッと見るだけで、それだけで何もかも忘れられるんだ。嫌なことでもなんでもな。それに、俺はそれだけで活力がもらえる。さつきも言ったけど、リールは俺の原動力。いや、原動力なんて表現じゃ收まりきらない。もう端的に言つてあれだ。

リールは俺の全てだ。

これは大げさでもなんでもなく、どうしようもないほどに本当のことだ。少し気持ち悪いかもしれないけど、俺としてはどこまでも大真面目な表現だ。

だつて、俺はあいつのためならなんでもする。なんだつてできる。それを証拠に、俺は人を殺してるだろ？ リールに不自由な思いをさせたくないから、頑張って人を殺してるだろ？ もちろん……これからも殺し続けるつもりだ。

俺は……俺はリールのためになるのなら、墮ちるとこまで墮ちてやる。俺一人おかしくなるだけでリールが救えるのなら、俺はどこまでだって墮ちてやる。

「……あっ！」

そこまで思考したところで、俺はいまリールの部屋の前にいると
いつことを思い出す。

くそっ！ バカか！ 何やってんだ俺は！ リールの部屋の前で
汚いことを考えるなって言つてんだろうが！ リールを穢すな！
自分に喝を入れながら、俺は急いでリールの部屋を離れる。
ふう……これで良し、と。

さて、俺は殺し屋である前に、ただの高校生でもある。当然ながら明日も学校だ。あーイヤだイヤだ。殺人休暇つて制度を導入してくれないもんかねえ。……冗談だから気にしないでくれ。

それはそうと、早いとこシャワー浴びて寝るとするか……。

そのあと俺は、いま言つた通りにシャワーを浴びてからベッドに
もぐり、あつとこう間に夢の中へと落ちていった。

人を殺す、ところ行為をした日は、いつも大体こうして終わる。

「「」お……っ！」

次の日の朝、俺は腹部にもの凄い衝撃を感じて眠りから覚める。だが、これがなんのか分かっているので、俺は焦りもせず目を開けるよりも先に声を発した。

「おはよう……リール……」

「おはよう…… フィー兄ちゃん！」

リールの弾むような無邪気な声。俺は毎朝毎朝いつもして起しあれる。「うらやましいだろ！ ちなみに、リールは俺のことをフィーと呼んでいるが、俺の名前はフィーニットだ。

「早く起きなきゃダメだよ。早く早くう～」

言いながら、リールは俺の腕を引っ張る。

……ああ、幸せだ。リールの力強い引っ張りのせいで俺はベッドから床に落ちたけど、そんなことは怒る材料になんてならない。むしろ微笑ましい限りで、俺の顔は自然とほころぶ。

と、なぜか分からないけど、リールが初等部の制服のスカートを急に押さえ始めた。

どうしたんだろう？ と思つてみると、リールが顔を赤くしながら言葉を発してくれる。

「ふい……フィー兄ちゃん……わ、私のスカートの中見て笑つた……」

ああ、なるほど。俺の微笑みをパンツを見て笑つたと捉えたのか。つたく、俺はそんなに変態じやないぞ。

「いいカリー！」

「い、言い訳なんか聞かないもん！ えつちえつち変態！ フィー兄ちゃんのバカアホ間抜けッ！」

可愛らしくふくうと頬を膨らませながら、リールが悪口の限りを

吐き出してきた。

「くつ……反抗期か！ だがしかし、俺にそんな罵倒は効かない。怒ったリールすらも愛しく感じるんだからな。

俺はますます顔をほころばせた。

「わ、私のスカートの中を思い出して笑ってるんだね！ ふい、フイー兄ちゃんなんかもう知らないもん！」

俺の笑顔は変態っぽいのだろうか。リールはそうはき捨てて、俺の部屋から出て行つた。その後ろ姿も可愛いらしい。

「……見てないんだけどな」

リールの背を見送りながら、俺は苦笑いを浮かべて立ち上がる。そもそもリールのパンツなんて、俺は洗濯物として干してあるのを散々見てるんだけどな。……やっぱり穿いている物を見られるのは恥ずかしいのだろうか？ ……そういえば、水着は見せるものだから恥ずかしくないが、下着はあくまで下着だから恥ずかしいとかなんとか誰かが言つてたような……。

俺があごに手を当てながら考えていると、開けっ放しの部屋の入り口からいい匂いが漂ってきた。

どうやら、すでにスリイナが来ているようだ。 あ、スリイナつていうのは、スリイナ・フォシルニクスつて言う俺の幼なじみのことだ。いいとこのお嬢さんで、俺の家のすぐ近くにある大きなお屋敷に住んでるんだ。

スリイナのお屋敷には、俺がまだ人殺しに手を出す前、父さんと母さんが死んだ直後に少しのあいだだけ世話になつたことがある。そうなつた経緯としては、俺とスリイナが幼なじみだからといつても当然あつたんだけど、もつと大きな理由として、俺の父さんとスリイナの親父さんが昔からの知り合いだつたつていう要因もあつたんだ。その頃は俺もリールも暗く沈んでた時でさ、正直な話、あの時スリイナのお屋敷に呼ばれなかつたら、俺たち兄妹はあと追い自殺でもしてたかもしれない。だって、父さんと母さんがいきなりこの世からいなくなつたんだぞ？ そうなるのも無理はないって思

わぬいか？

……ま、そんな辛氣臭い」と呟く。

とにかくだ、スリイナはいいとのお嬢さんで、俺の幼なじみでお嬢さんのくせに料理ができる、なんとも不思議なほんわか少女だ。で、そんなほんわか少女は今日も朝食を作りに来たらしい。別に頼んでるわけじゃないんだけど、やっぱ父さんと母さんがいないとを気遣つてくれるらしいんだよ。まあ、俺としては作ってくれてもくれなくても、どっちでもいいんだけどな。……いや、あれだぞ？ 作ってくれることに関してはありがたくは思つてゐるぞ？ 当たり前だけど。

それで話はちょっとじばかし変わるんだけど……スリイナも当然、俺が人殺しだということは知らない。

つまり、俺は自分が殺し屋だつてことを誰にも言つてないつてわけね。だからつて、理解者がいないから辛いとかつてわけではないけどな。どつちかつて言えば誰にもバレたくないし。 つてそりや当然か。

なんてことを考えたのち、俺は部屋を出た。
これはなんの匂いかな？ 階段を下りながら、俺は鼻をくんくんさせる。……分からん。

朝食の材料はスリイナが自宅から持つてくるんだ。だから、家の冷蔵庫の中身を把握していくもどんな朝食が出てくるかは分からない。でもま、それがまた面白いんだけどな。

だつて驚くなれ、こないだは朝からキャジアさんが出てきたんだぞ。どこの高級ホテルだ！ つて思わず突つ込んだものだ。
でさ、俺がそう突つ込んだら、スリイナの奴なんて言つたと思つ?
『こんなの高級じやないよ?』

だとさー！

生まれも育ちも違うつていつのはまさにこれだ！ と痛感した出来事だつたぜ……つ！

ちょっと苛立ちながらリビングの手前までやつてきた俺は、さて

さて今日はどんな食材を持つてきやがったのかなあつと思ひながらリビングを覗いて

「…………は？」

俺はリビングに入ることをやめ、廊下で深呼吸を開始する。

あいつ……またやつてくれたよ……。とんでもないもん持つてきやがつたよ。写真とかでしか見たことのないもん持つてきやがつたよお！

いやいやちよい待て……あんなもん一体どこで作ったんだ？

スリイナはいつも我が家の狭苦しいキッチンで朝食を作るのだが、あれを作れるほどの機能、うちのキッチンにはなかつたと思う。ということはだ、スリイナの奴、……あれを自宅から持つてきたってことか？ フォシルニクス邸から一〇〇メートル近く離れた俺の家まで、スリイナはあれを持って歩いてきたことなのか。バカかあいつは！

それに俺つてば、朝はシンプルにいきたいんだよね。パンでいいんだよ、パンで。なのに、なのに……何あれ？ なんで朝つぱらから油で揚げたもんを食わなきゃいけないんだ。

イライラが増してきた。俺は文句を言つため、リビングに踏み込む。

「おい、スリイナ！」

「あ。フイー、おはよう

穏やかな目を緩めに緩めて、スリイナが挨拶してきた。……だがな、俺は挨拶どころじゃないんだぜえ！

「おはようじやねえ！ なんじやあこりやあ！」

俺は例のモノを指差しながら声を荒げ、スリイナを見据える。

俺たち兄妹よりも色素の薄い金髪、それを肩の辺りで切り揃えてウェーブをかけた髪形。雪のように白い顔はおつとりとしていて、見る者に癒しを振りまく。いまの俺は癒えないけどな。身体は平均よりは少し上ぐらいだと思つ。まあ、発展途上つてところだ。で、その発展途上の身体の上に高等部の制服を身に着けている。

そんなスリイナは俺の声にビクッとながら、

「……何って、北京ダックだよ？」

例のモノの正体を口にした。

そう、 そりなんだ！ こいつは北京ダックなるものを持ってきやがつたのだ。おかしいだろ？ 朝食に北京ダックつておかしいだろ？ 本場中國の人でも食わないと思うー

「……何って、北京ダックだよ？」

俺が内なる世界で突っ込みを繰り出しているあいだだらうと、現実世界では時が流れ続ける。

スリイナは、俺のそんな心中突っ込みを沈黙として受け取つたらしい（まあ当然だけど）。大事なことなので一度言いました風にもう一度北京さんを紹介してきた。

「あのな、そんのは見れば分かるわ。俺がなんじゃあこりやあ！ って言つた理由は、なぜにこれを朝食としてチョイスしたのかつてことだよ」

そこはぜひともお答え願いたい。北京ダックはどういう経緯で朝食にセレクトされたのか。個人的にとても気になる。

俺に尋ねられたスリイナは、若干申し訳なさげに言葉を紡ぎだす。

「あのね、昨日の余りなの……。ごめんなさい

「な……つ！ あ、余りだとお……」

俺はそれ以上言葉を続けられない。

なんだつて？ ペ、北京ダックが余るつてなんだ？ どういうことだ？ 一体どんな食卓だつたんだよ、昨日のフォシルニアクス家。……まあ、でも、余りなら仕方ないかもな。捨てるのはもつたいないし。

貧乏気質な俺は、余りという言葉に弱い。もつたいない精神が底から湧き上がってきた。

「スリイナ、謝るな。別にいいつて。こんなもの食えるつていうのは逆にありがたい。高級なことに変わりはないんだからな。余りで結構コケコツコーつてな」

そう、俺は最初ギヤーギヤーとわめいていたが、これは立派な高級料理。何を文句言う必要があるってんだって話だ。

「そう? ならよかつたあ……」

ライ麦畠のように穏やかな笑顔を浮かべるスリイナ。さてと、スリイナの顔に笑顔が戻ったことだし、さっそくいただきますをしようと思つてやめる。

リールが食卓にいないじゃないか! どこに行つたんだ……つてそういうえばさつき、リールの部屋のドアが閉まつてたような気が……。つてことはもしかして……まだ俺にパンツを見られたつて誤解してるのか? それで恥ずかしくて部屋に閉じこもつてることなのか……?

うん、まあ、多分そうだろうな。リールは大雑把に見えるけど、以外に纖細な子なんだ。……つたく、ホントにしうがない奴だな。けど、そういうところが可愛いんだよな。

「じゃあ俺、ちょっとくらリールのこと呼んでくるからな」

「うん、分かつた。でも冷めちゃうと美味しくなくなるからね」「あー……確かに、冷えた鶏肉っていうのはあんまり美味くなさそうだな。

「よし、分かつた。即行で戻つてくる」

俺は返事を返してリールの部屋へ向かう。

はてさて、どうやつてリールを部屋の外に出そうか? 怒鳴つて引きずり出すのは論外だし……じゃあ謝るか?

……んー、パンツを見ていないので謝らなければならぬってことに対してもし不満を覚えないでもないけど……でも、リールの顔をこのまま見られないのっていうは、もっと問題だな。

「うん、謝ろう。そうすれば全てスムーズに済むはずだ」方針を固めた俺は、田の前に迫つたリールの部屋のドアを見て、一度だけ深呼吸。

それから、俺はリールの部屋のドアを二回ノックした。

「おーい、リール。出てくれないか? 俺が悪かったよ。『め

んな。兄ちゃんに顔を見せてくれないか？ ちゃんと謝りたいんだ」「どこまでも優しいトーンで呼びかけると、

「……ほんと？」

ドアの向こうから、どんな楽器よりも素晴らしい音色が聞こえてきた。ああ、ウイーン少年合唱団よりも綺麗な声だ。俺は聞き惚れながら言葉を返す。

「……ホントだとも。大体、なんで俺がリールのパンツを見てニヤけなきゃいけないんだ？ リールのパンツなんて洗濯物で見放題だぞ？ どつぐの昔に耐性ついてるから、俺はいまさらニヤけたりしないぞ？」

「フイー兄ちゃんなんか死んじゃえればいいのに…」

「え？ いまなんて」

なんかリールの口から汚い言葉が出たような……。

「だーかーら！ フイー兄ちゃんなんか死・ん・じや・え・ば・い・い・の・に！」

「ぐうあ…………し、死んじゃえればいいのに、だと……？」

な、なんでリールは怒ってるんだ？ お、俺は何か間違ったことを言ったのか？

「り、リール？ 俺はほんとにニヤけてないんだぞ？ というより実を言えば、さつき兄ちゃんはリールのパンツを見てないんだ。ホントなんだ信じてくれ！」

「そ、そういうことじやないもん！ 私の洗濯物のパンツ、その、見てるって……も、もうホントに知らないもん！ フイー兄ちゃんの色情狂！」

し、色情狂……。俺、いまリールに色情狂って言われた？ け、けどなんか、あんまりダメージを感じなかつたぞ。……うん、リールにそういう扱いを受けるのも結構いいかも。あは、あははははつて、いやいやいやいやいやちつがう！ 早くリールの顔を見たいんだろ！ 俺はいま、何に目覚めようとしていた？ あ、危なかつた……。危うくダークサイドに墮ちるところだつたぜ。

……いや……まあ……もう墜ちてるんだけどな。

でも、いまはそれをさておくことにして、そろそろ本気で謝らな

いところはマズイな。

俺はリールの部屋のドアに向かつて誠意を込めて頭を下げる。

「リール。本当に悪かつた。女の子なんだからパンツ見られるのはイヤに決まってるもんな。なのに、俺はなんにも分かつてやれなくて、むしろ傷つけることばかり言っちゃって……まあ、その、とにかく謝るよ。ごめんな、ホントに「めんな。俺が全部悪かつた！」

かなり真剣な調子で、俺は謝罪を述べた。

と、目の前のドアがギィ……と音を立ててほんの少しだけ開いた。俺は腰を直角に曲げる形となっているので、リールがどんな顔をしているのかは分からぬ。けど

「フイー兄ちゃん」

さっきまでの怒った口調じゃなかつた。いつもの無垢で可愛いリールの声だつた。俺はホッと一息ついてから、「なんだ？」と頭を下げたまま尋ね返した。

「あのね……」

言いながら、リールは部屋のドアを最大まで開く。

依然として俺は床を見たままだが、リールの足が俺に近づいてくるのが見える。……何されるんだろ？ もしかして頭なでなで？ いやいや、なんでそんなことされるんだよ！

こんな状況にも拘わらず、セルフノリ突っ込みをしている俺。

対しリールは、そんな俺を戒めるかのように勢いよく部屋から飛び出してきて

「えいっ！」

なんとも可愛らしいかけ声とともに俺の両肩を押してきた。

押された俺は、唐突過ぎたために身構えることもできず、そのまま後ろにひっくり返つてしまつ。まるで、凄腕の武術の使い手にわけも分からず倒されたかのような感覚に陥つてしまつた。

「えへへっ、早く朝ご飯食べよ~」

リールは、それで許したからねと言わんばかりのしてやつたり顔で俺を見下ろしてくれる。

……やっぱり、リールはそういう笑顔が一番だ　って、ああっ！

「ん？　フリー兄ちゃんどうしたの？」

「い、いや！　なんでも！　それよりもあれだよあれ！　今日の朝食は冷めないうちに食べた方が美味いってスリイナが言ってたぞ？」

だからほり、リールは早く行きなさい」

「……変なフリー兄ちゃん。でもいいや！　朝ご飯！　朝ご飯！」

いつもの元気な声を発しながら、リールはスタスターと階段を下りていった。

「つたく、リールは最後の最後で甘いなあ……」

俺はこらえていた苦笑を表に出した。

だつてリールの奴、最後の最後、仰向け状態の俺の眼前に立つたんだぜ？　どうなつたかは察しがつくだろ？

そう、今度こそ俺は、おもいつきりリールのパンツを見てしまつたわけだ。

ちなみに白でした。

というより白しか持つてません！

毎日洗濯機回して、毎日洗濯物干してる俺が言うんだから間違いない！

リールのパンツを叩撃してから一分後、俺は食卓にいた。無論、朝食のためだ。

食卓は一度に四人までが使用可能な、まあ、つまりは至つて普通の四角いテーブルだ。席は俺とリールが並んで座つて、スリイナは俺の対面。

この通り、俺たちはもう完全に席へと着いている。けど、まだ北京ダックさんを口にしてはいない。

スリイナによる、北京ダックさんの正しい食い方講座が開かれているからだ。

なんでも、北京ダックさんは皮だけを食べるらしい。そいだ皮とネギとタレを薄い生地みたいな奴にくるんで食べるんだとか。オサレだことオサレだこと。庶民には無縁の食べ方だな。

「説明はこんなところかな。さあ、もう食べてみていいよ」

北京ダックさん講座が終わつたようなので、俺はさっそくただいてみることに。

えーと、この薄皮の生地に……ダックさんの皮と千切りされたネギ、それとタレを乗つけて……あーん。

俺は完成系を口の中へ運んでみた。

「……あ、美味しい」

フィーニット・ストルス、一五歳。食の階段を一段上がる。「うむ、北京ダックさんとはこれからも末永くおつき合いしていきたい！」
そう思えるほどに、北京ダックさんは美味かった。

リールも「おいしい！」と言つている。

俺たち兄妹の反応に、スリイナは胸を撫で下ろしていた。

そのあと俺は三つ、北京ダックさんを口にした。そして朝食が終了したわけだが、俺は食卓の中央に君臨する裸のダックさんを見つめていた。

「フイー、どうしたの？」

ダックさんを見据える俺に対し、スリイナが小首を傾げながら尋ねてきた。

「いやせ、この身包みをはがされたダックさんはどうなるのかなあつて思つてな」

ダックさんは、まだ美味そなお肉部分が残りに残つてゐる。「うーん、まあ……食べられるけど、普通は、もう食べない……かな。何かに加工しないと味ないしね。これは捨てようと思つんだけど……ダメかな？」

「え？ もつたいたつ！ 味なくつたつてタレにつければいいじゃんか！」

あまりにも悲惨過ぎるダックさんの末路に、俺のもつたない精神が騒ぎ出した。

「じゃあこま食べる？」

「あ、いや、それは……」

俺のもつたない精神はどこへやら。正直、もうダックさんいらない。俺って、朝はそんなに腹が減らない方だからな。これが夜なら喜んで食つたかも知れないと。

でもだからといって、これを夜食つのかと聞かると、それもちよつとあれだな……。

だつてさ、この状態のまま保存してたら……なんとなくだけど、悪くなりそうじゃないか？ 冷蔵庫に入れてたとしても、ダックさんは身がむき出しだからさ。なんとなく食べる気が起きないっていうか……ね？ 分かるでしょ？

だから、ダックさんの末路は……

「……スリイナに託す」

「分かつた。じゃあ私、一回家に戻るね」

スリイナはダックさんの皿を両手で持つて、リビングを出て行つた。

さよなら、ダックさん……っ……

ダックさんに哀悼の意を捧げ、それから俺は自分の部屋へ向かった。制服に着替えるためだ。

俺はマジシャンもびっくりするほどの速さで着替えをした。

嘘だけど。本当は一、三分かけてゆっくりと着替えました。

そのあとは勉強道具をカバンに詰めて、あーあ学校ヤダめんどいって思いながら再びリビングへ。

どうやら、まだスリイナは来ていないようだ。けど、もういつも登校時間になつたので、俺は毎朝の日課をしてから外へ出ることにした。そうすればスリイナもちよどよく来るんじゃないかなと思う。

で、その日課とはなんぞやと言えば、父さんと母さんの遺影に挨拶をすることだ。

「リール！」

父さんと母さんへの挨拶はリールと一緒に行う。もう何ヶ月と続いている、俺たちの日課中の日課。欠かせない朝の行事といったところだ。

リールもこの時間になると呼ばれることが分かつてゐるんだろうな。すぐに俺の下へと駆けてきた。

そうして、俺たち兄妹は並んで父さんと母さんに黙祷を捧げる。

俺は軽く目を閉じた。

……父さん、母さん。人殺しなんかしてしまつてホントにごめんなさい。でも、リールのためなんだ。リールに何不自由ない生活をさせてやるためにんだ。……って言つても怒るよな……。いや、それはそうだよ。俺は人殺しなんだから。怒られない方がおかしいんだから。でも、でもさ……罪なんかあとでいくらでも償うから……だからいまだけは、いまだけはこのまま……見守つてて欲しい。せて、リールが大人になるまでは……このままでいさせて欲しい。父さん、母さん……毎回毎回こんなわがまま言つてホントにごめん。でも絶対に、絶対にいつか償うから、だからいまだけは許してくれ……。

二つもと同じことを思ったのち、俺はゆっくりと田を開く。

「……行くか

「……うん」

静かなやり取りを行ったのち、俺とリールは外に出た。すると予想通り、ちょうどよくスリイナが俺の家の前に到着したところだった。

俺たち三人は、いつも通りに学校へと出発する。

今日はよく晴れた田だ。雲なんて一つたりともな　　あつた。ごめんあつたわ。一つだけあつたわ。なんかダックの形した雲あつたわ。

俺は何気なく、その雲に向かつて十字を切る。……アーメン。でもまあ、それでも快晴なことに変わりはない。実にすがすがしい。

いつもと同じ通学路を歩きながら空を見上げていた俺は、そう思つた。

それから、俺は空に向けていた顔を自分の左右へ向けた。左にはリールがいて、右にはスリイナがいる。

なんで小学生のリールが俺たちと一緒に登校しているのかと言えば、通常学校が同じ敷地内に存在しているからだ。

リールは初等部六年生。俺とスリイナは高等部一年生だ。

まあ、いわゆるエスカレーター式つて奴だ。生活が苦しかつたっていうのは、ここせいでもある。学費がバカみたいに高いんだよ。でも、人を殺すようになつてからはだいぶ楽になった。というよりも、殺しに手を出していなかつたら、俺たち兄妹はここに通えなくなつていたと思う。

だから俺は、人を殺したことを後悔してはいない。裏世界に手を出して良かつたと、まだ慣れないところもあるけど、大方そう思えるようになつてきてている。つと、またリールの隣でこんな汚いことを考えてしまった。ダメだダメだ。別の話題に別の話題つと。えーと、何かないかな……　あっ！　これでええやん！

「なあ、スリイナ」

「ん、何？」

「前々から気になつてたんだけどね……」

俺は新たな話題として、今までずーっと飯になつていたことをスリイナに尋ねてみることにした。俺は何年ぐらこのことを気にしていただろうか？　……んー、かれこれ一〇年近くは気にしていたかもしれないな。

で、その質問つていうのは、

「……なんでお前、歩きで通つてんの？」

「……那個ものだ。これは当然の疑問つて奴だ。だつてそつだろ？　スリイナはいいとこのお嬢さんなんだ。ごく当たり前のよう執事さんやらメイドさんやらがいるようなお屋敷に住んでる、いいとこのお嬢さんなんだ。娘のためだけの送迎車なんでものがあつたとしてもまつたくおかしくはないはずだ。スリイナの家には車がない、ってわけでもないんだ。むしろ逆で、スリイナの家のガレージには、ディーラーか！　と叫んで突つ込みを入れたくなるほど数多くの高級車がある。

それなのに、スリイナは車で通学しない。

俺はその理由を、前々から聞きたかった。

てなわけで、俺はスリイナの方に耳を傾けた。

「だ、だつてそれは……車に送り迎え頼んじゃつたら……」

俺の問いに答えるスリイナは、どこか言いにくそうにモジモジしている。顔もほのかに赤くなっている気がする。……なんだ？　恥ずかしい理由なのか？

「頼んじゃつたら、どうなるつていうんだ？」

気になつた俺は、促しをかけてみる。

けど、スリイナはうつむくだけで、その続きを言わなかつた。

隣でリールも話を聞いていたと思うので、俺はリールの方に顔を向けて「何でだと思つ？」と聞いてみたのだが、「なんとなく分かるけど教えない！」といったら子のような表情で言われてしま

つた。その表情が可愛かったのは言つまでもない。

ところで、送り迎えを頼んじゃつたら、それが一体なんだというのだろう？ そういう言ひ方をするつてことは、こうして毎朝歩いていくことに何かしらのメリットがあるということなのか？ でも、そのメリットをスリイナは恥ずかしくて言えない。

……恥ずかしいメリット？ 歩くことで得られるメリットで恥ずかしいもの？ それは一体なんだ？ ……んー、全然分からん。まずは、歩くことで得られるメリットだけを考えてみるか。それでそこから恥ずかしいメリットを抜き出してみれば、それがビンゴの可能性だつてある。

でもそれじゃあ、歩くことで得られるメリットってなんだ？ すがすがしさ？ 健康？ 体力作り？ つて あ！ 分かった！ あるじやん！ 歩いて得られるメリットで、だけど人に知られるのは少しだけ恥ずかしいこと。あれだよ、あれ。もうお分かりだろ？ え？ お分かりじゃない？ なーに、簡単なことさ！ それは「ダイエット！」 そうかそうか！ スリイナはダイエットのために歩いてたんだな！

俺は上から目線にものを言い、勝手にダイエットだと決めつけた。てか、それしかないだろ！ 人に言うのが恥ずかしいメリットって！

「ち、違うよ……私は……」

「何つ！ 違うのかよ！ ジャア一体なんだつてんだ！」

「あ、それはね……その……」

スリイナは以前モジモジ状態。

「なんださつきから……もしかしてトイレか？」

もしそうだとしたら、そのモジモジを恥ずかしさとして捉えた俺の推理は根底からくつがえされることになるな。

「ち、違うよ！」

どうやら違うらしい。じゃあ俺の推理は正しいはずだ。何か恥ずかしいことがあるからこそ、スリイナはモジモジしているというわけだ。しかしながら、最有力候補のダイエット選手が即刻退場して

しまつたからなあ……これは迷宮入りかねえ。スリイナはホントのことを話してくれそうにないしな。

それにかく言つ俺も、これ以上追求する気がなくなつてきたし、もう、この話はいいか。

「……まあ、違うくともなんでもいいけどさ、スリイナにはダイエットなんかこれっぽっちだつていらないからな？ 僕はそのままでいいと思うからさ」

もしかしたら本当にダイエットのためなのかもしれないのに、一応フォローを入れてみた。けど、いま言つたことは本心だ。スリイナはいまのままで十分に可愛い子だからな。

そもそも女子はみんなダイエットダイエット言つているが、僕はモデル体型が嫌いだ。普通でいいよ、普通で。なあ？ みんなもそう思わない？

「このままで……いい？」

スリイナが、俺の言葉を確認するかのように尋ね返してきた。それに対して、俺は一つ頷いてから返答する。

「ああ、そうともさ。スリイナはスリイナのままでいい。何も変わらないでいいんだ……」

俺は殺人鬼になつてしまつた。前とは比べ物にならないほどに変わってしまった。それはもう、普通には決して戻れないほど酷く変わつてしまつた。

だから、周りには何も変わらないで欲しい。俺を受け入れてくれるところだけは、何も変わらないで欲しい。

あくまで俺の、殺人鬼の願望だが、そんなクズの願いでも叶うといつのならば、周りだけは何も変えないでもらいたい。

そう考へると、さつきスリイナにした『……なんでお前、歩きで通つてんの？』っていう質問は……いう質問だったのかもしれないな。

だつてさ、俺は何も変わらないで欲しいんだ。それはつまり、一緒に登校するこの風景だつて変わらないで欲しいってことなんだか

らな。

つたく……数分前の俺め、何も考えずに余計な質問しやがつて。……ま、撤回すればいいんだよな、うん、さつきの質問は撤回するに限る。

「あの、それでさスリイナ。さつきの質問だけど、あれはなかつたことにしてくれ。俺はこのままがいいんだ。スリイナの一緒のこのままがな。だからさ……あの、これからも一緒に……」いつやって登校してくれ」

言いながら、俺はもの凄く恥ずかしい台詞だと気づいた。くそつ、絶対赤くなってるだこれ……。ああもう、ホントに恨むぞ！ 数分前の俺め！

俺はスリイナから顔を逸らそうとしたが、自分から頬みごとをしておいて顔を逸らすっていうのは凄く失礼なことだろうなと考え、なんとか逸らさず現状維持を続けている。

そんな恥ずかしそうな俺を見たスリイナは、何やら嬉しそうに微笑んだ。

「うん、いいよ。私だつてこのままがいいから……」

そう返答してくれたスリイナの顔は、心なしかまた赤くなっている気がする。

……きっと俺の恥ずかしい台詞のせいだ。こうこうのつて言われた方も恥ずかしいんだろうし……。あとさ、スリイナの台詞もちょっと恥ずかしい感じだったもんな。スリイナはいましがたの俺みたいな感情を味わっているのかもしない。

でも俺はさ、そう言われて正直嬉しかった。……けど、その言葉は殺人を犯してた俺にじやなくて、幼なじみとしての俺に言つてるんだろうけどな。

したがつて本来は、俺にその言葉を受け取る資格なんてないのかもしれない。

だけど、俺はこの場では……何気ない日常つていう一番大事な時だけは ずっと前の自分で居るつて決めている。殺人なんていう

非人間的な行いをしていない時の自分で居続けるつて決めてるんだ。
だから……凄い身勝手かもしれないけど、俺はスリイナの言葉を

受け取る権利行使させてもらつ。

そして、俺なんかにはもつたひない言葉を受け取つたのだから、
俺はスリイナに言わなければならぬ台詞がある。

「ありがとな……」

「ううん。どういたしまして……」

「おお……照れくさい……。俺は今度こそ我慢できず、スリイ
ナから顔を逸らした。

そうして、明るくもそこはかとなく暗い雰囲気となつてしまつた
ところで、

「ふんっ！」

リールが、面白くない！ といった感じの効果音を上げた。

おつと、そういうえばリールが仲間外れになつていたじゃないか。
これはいけない。

俺は急いでリールの方を向いて、

「リール。リールもずっとこのままでいてくれるか？ 特にリール
は俺にとつてたつた一人の家族だからな。もしリールがいなくなつ
たら……その時は兄ちゃん、泣くからな？」

リールの顔を見据えながら俺が真剣に告げると、リールは不機嫌
だつた表情を一変させて満面の笑みを浮かべた。か、可愛い……。

「フィー兄ちゃんホント！ 私がいなくなつたらフィー兄ちゃん泣
いちゃうの？ そんなに私のこと大事？」

何を言つてるんだこの子は！ そんなことは……そんなことはあ

「当然だろ！ 当然過ぎるぞ！ 当たり前のこととも大事だ！
だからリール、俺の前からいなくなつでくれるか？」

「うん！」

リールはニイと嬉しそうに笑つてくれた。……これは、俺が必要
とされている証として受け取つてもいいのだろうか？ どうなんだ

るつ……？ やすが元気つ受け取るのほ離子に乗り過へてもんじ
やなかるつか。

まあ、でもいいさ。リールが俺を必要だと思つてこようが思つて
なかろうが、そんなことまあまつ関係ない。なぜなら、俺のするべ
めことは向も変わらないからだ。

リールに向不自由ない生活を。
これが俺の生きる理由だから。

いつもとはだいぶ違った雰囲気での登校となってしまったが、何はともあれ、無事に学校へ到着した。

当たり前だが校舎が違うので、ここでリールとはお別れだ。

「いいか、リール。お前をイジメてくる奴とかがいたら、すぐ俺に言えよ。そいつをこらしめてやるからな。兄ちゃんはいつだってお前の味方だ」

幸い、いまのところリールにそんな兆候は見られない。けど、もしもリールがイジメなんてものに巻き込まれたら……俺は、そのいじめっ子をこらしめるどころじゃ済まないことだろう。

といった具合に結構物騒なことを考えていると、リールはまぶしい限りの可愛らしい笑顔を振りまいてきた。

「大丈夫だよ！ もう、フイー兄ちゃんは心配性なんだから。イジメなんでものと私は無縁だよ、無縁！ それどころか、私モテモテだもん！」

言い終わると、リールは踊るように校舎へと走っていた。

「も、モテモテだとお……？」

そ、それはそれで許すまじだなあオイ！ ボウズどもめえ！ リールに変なことしたら俺がハツ裂きにしてやるからなあ！ ……いや……でもまあ、あれか？

「イジメられるよりは……マシ、なのか？」

俺がそう呟いた時には、もうリールの姿は初等部の生徒たちの中に紛れ込んでしまつていて、完全に見えなくなつていった。

俺はそのことに若干の寂しさを覚えた。なんかさ、リールがどうかに行つてしまつたみたいだよ……。

しかしモテモテかあ……初耳だよ……。

俺は今世紀最大のため息と言つてもいいくらいのため息をついた。

「やっぱりお兄ちゃんとしてはつらいの？」

そのため息を見てか、スリイナが様子を窺うように尋ねてきた。
俺はもう一度盛大にため息をついたのち、うめくよに言葉を返す。

「……そりやそうに決まつてんだろ？が。もつちらになんてもんじやないな……。だつてあれだぞ？ スリイナに好きな奴がいるかどうか知らないけどさ、もしいるなら、そいつがハーレム状態つてことだぞ？ つらいよりもつらくないか？」

そう告げてみると、スリイナは悲しそうに顔をしかめる。

「……フィーがハーレム状態か……確かに嫌だね、そんなの……ん？」

「な、なんで俺がハーレムなんだ？ 俺は、お前の好きな奴がつて言つたんだぞ？」

「あ、その、えと、そ、そうだね。フィーじゃないね。『ごめん

……』

スリイナは慌てたように前言撤回すると、顔を赤く染めてうつむいた。

……つたく、恥ずかしい間違い方すんなよな。にしてもびっくりしたあ……。スリイナが俺のこと好きなのかと思つたじやんか……。ああ、なんかもう！ 俺も照れくさくなつてきただぞ！
「さ、先行くからなつ！」

俺は足早にスリイナから離れる。振り返りもせず校舎にまっじがら！

早くあいつとバカトークをして、この照れくさをなぐさなければ！

一人の男を頭に思い浮かべながら、競歩のように歩くこと一分。俺は教室に到着した。自分の席へと向かい、机の横についているフックにカバンを下げた。

えーと、それであいつは……何つ！ まだ来てないだと！

俺の探し人はまだ来ていらないらしい。くそつ……なんでこういう時に限つていしないんだよ。来なくともいいタイミングとかでは出で

くるくせに……。

ああこれじゃあスリイナが先に来ちゃうじやんかあ　なんて思つてるとほり、来ちゃつたよ……。

走つて俺を追いかけてきたらしく、スリイナは少し息をあげていた。ホントは席に着いて休みたいだろつに俺のところへ直進してきて、

「フイー、『めんね。変な』と言つちやつて……」

だとさ。やう言われた俺は一体どうすりやいいんだ？　別に俺、怒つてないのに。ただ単に照れくさくて逃げただけなのに。でも、そうやって説明すんのもまた恥ずかしいし。ああ、ホントにどうすりやいいんだ……。

と考えてるあいだ、現実から見れば俺は沈黙しているわけだ。そしてスリイナは、どうやらその沈黙を無視だと受け取つたらしい。

「あの、ほ、ホントにごめんね……」

震えた声音で言い残して、スリイナは廊下へ走り去つていった。ドラマみたいだ……つて客観的に見てる場合ぢゃないよな、これ。やっぱこれつて追いかけるべきなのか？　……べきだよな。

追いかけようと決意して俺は立ち上がる。足を廊下に向けて、教室の出口から駆け出そうとしたその時

「おいついーーー！　スリイナさんが泣いてたぞ？　お前何しゃがつた！」

ああもう！　なんちゅうタイミングなんだ！　俺の言つてたことが分かつたか？　こいつは　マイケルはこういう奴なんだ。

もう知らん！　こんな奴の身体描写はしてやらん！　……でも、ちょっとだけかわいそまだから、一つ特徴を言つてやることにする。えーと、こいつの特徴は……あー、特徴は……その、うん、口

い。

身体描写じゃないじゃんつて突つ込みは受けつけないぜ。マイケルは君たちの心でそれぞれの形に創造してくれ　つてこんなこと

言つてゐる場合、じゃねえええええ！

スリイナだ！俺はスリイナを追いかけないといけないんだ！

「あ、分かつたぞーつ！お前、我慢できず、にスリイナさんに手を

」

「出してないつ！」

俺がバスケット選手並みの追い抜きをかけようとするも、マイケルの素晴らしいディフェンスで廊下に抜けられない。

「じゃあ何したんだよ？ま、まさか！ここでスリイナさん

を罵倒して泣かせて、それで快感を得ようとしたのかつ！」

「どんなサディストだ！そもそも俺はニユートラルだ！」

「なんと！ フィーニット君はニユートラルらしいですよーつ！

なんて大胆なんでしょう！ ょつ！ このニユートラルッ！」

マイケルは教室中に聞こえるようにわざと声を張り上げた。……

バカか？

「お前な……ニユートラルって中間つて意味だからな？ そんな風

に言いふらされても、俺はまったくダメージを受けないからな？」

「何！ じゃあお前マゾか！ こんな羞恥プレイにも耐えるとは……

……末恐ろしい奴だ！」

「だからニユートラルだつて……」

もういいや……疲れた。

何この、廊下に行きたい奴とそれを必死に阻止しようとする変態の図。

それに俺、なんで廊下に行こうとしてたんだっけ？ ……ま、いいか。忘れるつてことは大したことじゃないんだろう。うん？いや、大したことだった気が……ど忘れつて奴かな？ いきなり考えてたことが消えてなくなつたよ。

廊下に行こうとして老化つて奴だね。

……ごめん、謝る。

にしても、なんで俺は廊下に行こうとしてたんだろうか？ ……いまのは狙つてないよ！

もういいやいいや！ なんで廊下に行こうとしたのか？ そんな理由は考えても出てこないな、うん。

それにあれば、時計だつてもうすぐHRって時間を指してゐしな。これから教室の外に行つたつて何もできやしない。だからスリイナも帰つてくるだろ つてそう！ スリイナ！ スリイナじやないか！ 僕はスリイナを追いかけようとしてたんじゃないか！ いやあ、モヤモヤが一気にスーとなくなつたぜ！

お、噂をすればなんとやらだ。スリイナが帰つてきた。まあ、時間には厳しい奴だからな。……さてと、謝罪と弁解をしに行くか。あいつが廊下に飛び出していつたのは、僕の沈黙のせいだったもんな。

俺はスリイナの席へ向かう。

机の真横に俺が立つと、スリイナはハツとした表情を浮かべながら俺の存在に気づいた。けど、顔をすぐに別方向へ逸らした。

……顔を逸らした行為には、どんな意味が込められていたんだろう……？

涙を流した目を見られたくなかったのか。それとも怒つてゐるのか。いや、どちらだうと関係ないな。だって 僕が泣かせたことに変わりはないんだからさ。

「……スリイナ、その、『めんな

俺が謝罪を述べると、スリイナは驚いたようにこちらを向いた。スリイナの穏やかな瞳は若干ながら赤みがかつていて、まだうつらと涙が残っていた。

顔を逸らした理由はどうやら前者 泣き顔を見られたくない、の方だつたようだ。

「……謝らないで。私がフリーに変なこと言つちゃったのが悪いんだから」

またスリイナは謝つてくる。いつもだ。どっちが悪いとかあんまり考えずに、スリイナはいつも勝手にとにかく謝つてくれる。それが悪いとは言わないけど、たまには謝らせろ！

「何言ってんだよ。今のは誰がどう見ても俺が悪い。ちょっと考えて」としてたとはいえ、俺はスリイナの言葉を無視したんだ。そのことに変わりはない。だから俺が悪い。ホントに『めんな』
「だ、だからフイーは謝らなくていいんだってば。私はもう気にしないからあ」

俺が頭を下げる、スリイナは焦つたように言葉を発してきた。
どうやらホントに怒っていないらしい。なら、お言葉に甘えて謝罪はここまでにしてくか。

俺が頭を上げると、スリイナは安堵したかのように胸へ手を押し当っていた。

「そこまでのことかよ……」

「そこまでのことだよ。悪くない人に謝られても困るだけだもん」「だから悪いのは俺だっ……」

そこまで言いかけ、俺は折れることにした。このままだと水かけ論になりそうだからな。

「この話はここまで。埒が明かないたらありやしない。もう悪いのはびつちもつてことでいいか?」

「まあ……それなりいよい。でも、ホントは全部私が悪いんだからね?」

「へいへい……もう勝手にそう思つてればいいわ」

俺が呆れて呟くと、スリイナは「やつたー」ともうわけの分からぬ反応を示していた。

けど、俺も俺で満足している。スリイナの笑顔を　癒しをくれる優しい微笑みを見ることができたんだからな。スリイナもリールと同じで、にこやかな方が似合つてゐるし……その方が可愛い。ま、口が裂けても言えないことだけど。

「じゃ、俺は席に戻るから」

「うん」

そう告げて、俺は自分の席に戻る。途中、マイケルが下卑た笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「どうだつた？ 怒つてたか？ フィーなんて死んじやえって言われたか？」

「言われてない。マイケル、お前の田は節穴か？ 見ろよスリイナの顔を。あの顔で死んじやえ、とか言つわけないだろ？」
「ここれからだと横顔しか見えないが、スリイナは確実に機嫌よさげだ。もの凄くニコニコしている。

「そうかそうか。それは変なことを聞いちまつたな。……いや、ただな、あの顔でフィーなんて死んじやえって言つプレイでもしてたんじやないかと思つてよお」

「どんなプレイだ！ あんなニコニコした顔で死んじやえって言つ奴があるか！ もしそうだとしたら、スリイナ生粹のサディスト過ぎるだろつ！」

あははっ！ フィーなんか死んじやえ！

と言つスリイナを想像してみた。

……怖つ！

「でもよお……あの顔でうだつたら、それはそれでアリだよなあ……」

えへへへへ、と笑い始めるマイケル。……気色悪い奴。

一刻も早く関わりを絶とうと考えて、俺はマイケルの席から秒速一メートルの速度で離れていく。

そうして俺が自分の席に着いたところで、担任の先生がやつてきた。
あーあ、また退屈な時間が始まるのか……。

唸らしてくれ。今日の午前の授業は内容が濃すぎたんだ。どのくらい濃かつたかと言うと、薄めないカルピスの原液ぐらい。これで理解してもらえると嬉しい限りだ。

「あああうううう」

俺は机に突つ伏して唸り続ける。

と、そんな俺の隣に突如ふわっとした雰囲気を持つ何者かがやつてきやう。俺の印づ印でこんなオーラを纏うる者は一人しかいない。

「フイー、お弁当食べよ?」

もう例のことぐスリイナである
俺は机と二三二チハしながら、
「今日はなんですかあ？」

くれているからな。

「余はサントシモだよ。」

……サンディッチ選手、中西田のローテで回ってるなあ。サンディッチはスリイナのレパートリーの中でエース格のようだ。あ、これは別にサンディッチに飽きたとかじやないぞ？ 美味いからいいんだ。

「どれどれ、サンディイッチの献上を許可する」

えへ！ ここで食べるの！ …… 屋上に行かない？

来た来た……天気がいいとすぐどこか別のところへ食いたがる。

別にこゝでいいんだぞ？

「そりそり、机があつた方がスリイナさんを食いやしそよな、それ
に最高の羞恥プレイだ！ なあ、フィーニット」

唐突に現れた変態の言葉。

マイケル、お前なあ

乱入してきた上に、その乱入方法がお下劣トークと来たもんだ。

俺は心底呆れる。

未だ机とコンニチハしたままの俺には見えないけど、きっとスリイナは顔を真っ赤にしていることだろう。お嬢様だからか知らないけど、スリイナはその手の話にまったく免疫がないんだよ。

「おいマイケル、お昼以降はお前と関わりたくないって、なんだ言つたら分かるんだ?」

マイケルは昼から徐々にギアが切り替わっていくんだ。夜は大人もドン引きするほどの話をするともっぱらの噂だ。

「そんなひどいこと言つなよ~。俺たち友達だろ?」

「朝だけな」

「あ、朝、だけ……?」

「ああそとも。朝だけだ」

ホントなら朝だつてつき合いたくない、といつのはさすがにかいそうなので言わないでおく。

それよりも、いまはこの工口魔人から早いとこ離れたいので、俺は机とサヨナラすることを決意。スリイナの言つとおりにしようとと思う。

「よしスリイナ。屋上に行こう」

やつぱり顔を紅潮させていたスリイナの手を取り、俺は屋上へ向かう。

「お、屋上で食つつもりだな!」

「当たり前だろ! お前のいるところでメシなんか食えるかつ!」

俺たちは手をつけないまま走り、そして屋上にやつてきた。おお、風が気持ちいい。

授業という呪術によつてかけられた呪いが、新鮮な空気によつて淨化されていくような感じた。日光が少々まぶしいが、それもまた心地よい。

まあ確かに、弁当を食つにまちようといいかもしれないな。

何より、誰もいないというのがいい。きょうび、屋上でランチ、なんて奴らはないのさ。普通に教室とか食堂で食つてるよ。

「あ、あ、あの…… フイー？」

依然として赤い顔したスリイナが、恥ずかしそうにおどじた口調で、俺に声をかけてきた。

……ああ。

俺はその問いかけだけで、スリイナが何を言いたかったのかをなんとなく察することができた。

「悪い悪い、手、握りっぱなしだつたな」

俺はスリイナの手を放す。いくら幼なじみでも、やっぱ手を握るなんてことされたら恥ずかしいよな。いまそつそつて意識したら、俺もちょっと恥ずかしくなってきたもん。

なんて考えていたのもつかの間。

どうやら手を握っていたことはあまり関係なかつたらしく、スリイナはまだおどおどとしている。

「なあ、どうしたんだ？」

具合でも悪くなつたのかと思い心配して尋ねると、スリイナは真っ赤な顔をよりいつそう赤くさせて、

「た、食べるの？」

そう聞いてきた。え？ なんでそんな質問で顔を赤くする必要があるんだ？ 昼飯食べるに決まつてんじゃん。工口野郎の前で昼飯なんか食えないからここまで来たつてのに。

「スリイナ、食べるに決まつてんだろ。さあ、早くしや。ここまで来ておいてお預けはナシだぞ」

早く昼飯を渡せ。その手に持つているものを渡すんだ。

「ほ、ほんとに食べるの？」

なんだ？ 失敗でもしたのか？ でもさつきは自信満々にサンドイッチだつて言つてたよなあ。そもそもサンドイッチを失敗つてなんだよ。どじその一次元のヒロインかつて話だ。

「しつこいや。食つたら食つ。だから早くしや。お前から差し出さないつて言うのなら、俺は力づくで奪つや」

サンドイッチをな！

「わ、分かつたから、力づくはやめてね……」

どうやらやつと分かつてくれたようだ。スリイナは右手に持ったサンドイッチの入った弁当箱を地面に置いた。

やつと昼飯だ。
俺は地面に座る。
しかし、なぜかスリイナが座ら
ない。

「ん? どうしたって何してんだあああああつー!」

スリイナはなぜか制服を脱ぎ始めていた。まだ九月上旬で制服が夏使用なので、もうカツターシャツがはだけて、せ、成長途中であらう谷間があ……じゃないや！

俺は慌てて目を逸らし、

「なんでも脱ぐんだよ!!」

「そつこうやくええええええええええええええ

えええええええつ！

なんかおかしこと思つてたら、なんぢゅう勘違いを！

俺が食事の問題食が立つ

「ルーカス...」

「いやまあ……ここにござる」

谷間を拝めましたから。

にしても……たゞ、それもこれで金額マイケルのせした、あい

学校側、マイケルに永久謹慎の通達でも出してくれないかなあ…

アレが一ひとつの事実すら残せば消してやあつての」。

でもまあ、それをやめにしたついで（まあ、やるなこむぎれ）まあせぬ

飯が先だ。俺は弁の方、もといスリイガの方を向く。

「ヤーメシメシ」

俺はあえて何もなかつたかのようにふるまう。

スリイナはそんな俺に合図せぬかのよつて、「「ひ、うさ」とひゅつとじきこちなく頷いた。

そうしてやつとこただり着いた、スリイナ手製のサンディッシュ。ハムとレタスだけを挟んだシンプルなものから、茹でタマゴをほぐした感じの奴を挟んでいるちょっと手の込んだものまで、色々な種類のサンディッシュが目の前に存在している。

俺はシンプルなハムレタスからいただくことにした。「いただきまーす」と常套句を発したのち、俺はハムレタスにかぶりつく。あ、やっぱ美味しいな……。

しみじみとそう思う中で、俺はある別のことも考えていた。なぜスリイナは俺の前で服を脱いだのかってことだ。むつき俺は勘違いってことで納得したけど、やっぱおかしいよな。

だってスリイナは、その……お、俺に食われてもいいと思つたらしいんだぞ？　ど、どういうことなんだ？　朝、リールと別れた直後のスリイナの反応だと……スリイナは俺のことを好きじゃないはずなんだ。

なのに……なんで好きでもない奴の目の前で服を脱いだ？
しばらく思考を働かせていると、俺の中に、ある一つの単語が浮かび上がってきた。しかもそれは、いまさっきのスリイナを表現するのに最適な言葉だった。　てゆーかこれだ！　これしかないよー！
あまりにもジャストフィットするその言葉。心地いい感覚に襲われて心中で連呼しまくっていると　俺は思わず口を滑らせて、その単語を現実世界に音として繰り出しつけてしまった。

「痴女！」

「ひやー！」

可愛い擬音を発してスリイナが反応した。それからみると落ち込んでいくのが分かる。まるでアサガオが枯れていくさまを早回しで見ているようだ。　ってそんなこと言つてる場合じやないこだ。ふお、フォローしないと……。

「お、オープンなのは……悪いことじやないと想つた？　俺は

「ひやうう……」

どうやらフォローを間違つたらしい。
スリイナは完全に枯れ果ててしまった。

我らは若者。

枯れ果てようが朽ち果てようが、時間さえ経てば全てを忘れることができる。学生はやることが多いのだ。

そして、それはスリイナも例外ではなかつたようだ。放課後のいま現在、スリイナは毎のことなどすっかり忘れているようだつた。立ち直つてくれて何よりだ。

帰り支度をしながらスリイナを見ていて、俺はそう思った。

さて、話は変わるんだが、放課後というのは一日の中で一番ハッピーなことが起こる時間帯なのだが、それを皆さんはご存知だろうか？ ご存知ない場合、それは人生の九割を無駄にしていること請け合いだ。

そのイベントが起つるのはもう少し先。それまで俺は、初めて球場でメジャーの試合を見た少年のようなわくわく感を抱いていようと思つ。

帰り支度の済んだ俺は、スリイナのところへ向かつ。

「さ、帰ろうぜ！」

「フリー、嬉しそうだね」

スリイナは少しバカにしたような笑みを浮かべて俺を見てくる。でもいいんだ。だって実際、スリイナの言つとおり俺は嬉しいんだからな。隠す必要なんてない。やつと拷問から開放されるような気分と言えば分かるだろうか。ま、拷問とか受けたことないんだけどな。いや、受けた受けてないなんてこの際関係ない。いまの例え方は間違つてないだろうからな。これほど俺の気持ちを反映した言葉もないと思う。いや、もう現実が拷問そのものだといつても過言ではない。

俺とスリイナは校舎を出る。やつして、学校の校門付近で立ち止まる。

ここまで来ればもう言わなくたって分かるだろ？

一日で一番楽しいイベント。

拷問からの開放。

それらが意味することは、一人の少女との再会だ。待つこと五分。俺にとってこの五分は、今日過ぎした時間よりも長く感じられた。

「ああ、可愛い……」

俺は思わず呟く。でも本當なんだから仕方がない。初等部の校舎から出てくるどの子よりも可愛い。ああ、輝いている。あんな子が妹でホントによかった。と、ここまで言えばどんな奴でも、例えサルでも分かるだろう。

そう、俺が待っていたのはもちろん リールだ。

と、リールが俺の存在に気づいたらしくブンブンと手を振つてくる。ああ、幸せだ。たったこれだけで今日の疲労が全て吹つ飛び。リールがこちらに近づいてくるにつれて、俺の口元は緩んでいく。

「フィー兄ちゃん！」

俺の下に駆け寄ってきたリール。そんなリールに、俺はちょっと早いかもしれないが、この言葉をかけた。

「リール、おかえり」

「ただいまっ！」

口を二イと横に開き、白い歯を見せてくれる。

返事を返してもらうだけで俺は……俺は感動した！ これを言ってもらうためだけに学校に通つてると言つてもいい！

俺は身を悶えさせる。周りから『あ、またあの人だ……』みたいな視線で捉えられている気がするけど、そんなの知つたことかっ！ 可愛いものを見て悶えることの何が悪いってん……リールも引いていらっしゃる？

ふと目に入ったリールの顔は、引きつった笑みを携えていた。

……言つまでもなく、俺は悶えることをやめた。気を引き締めるために咳払いを一つ。

「うおつほんつ。や、帰ろうぜ……」

俺は勇気を振り絞つてリールに手を差し出してみた。

すると、リールは嫌がる素振りを一つも見せずに俺の手を握り返してくれた。……おお、なんて優しいんだろう。……っ！

リールの手は小さいが、生きていると感じさせる力強さがあり、しかしながら纖細さも兼ね備えている温かな手だ。

その温もりを感じ取りながら、俺は歩き出す。

「スリイナ姉ちゃんのサンドイッチ美味しかったよ！」

登校の時とまるつきり同じ道を通りながら帰る道中。リールの明るい声が話題を生み出した。

「ホントホント。いくらサンドイッチは作るのが簡単だつていってもさ、あの味を出せるスリイナの腕は本物だよな」

俺はリールの意見に乗っかる。

それを聞いたスリイナは嬉しそうな、けど自分を嘲るような笑みを浮かべながら、

「そう言つてもらえるのは嬉しいけど……でも、美味しいのはいい食材を使ってるからだと思つよ。同じ材料で作れば、フリーにもリールちゃんにだつて作れると思つなあ」

「いや、それは絶対に違つぞスリイナ」

「そうだよ。違うんだよスリイナ姉ちゃん」

兄妹揃つての反論に、スリイナは首を傾げていた。……まあ、兄妹揃つてと言つても、たぶんリールは俺の言葉をマネしただけなんだろうけどな。

なので、当然俺が続きを連ねていく。

「スリイナ、よく考えてみる。一流の料理人だつて食材は一流のものを使うだろ？ それと同じだ。いい食材使って美味しいもんが作れるんなら、それはスリイナの腕がいいってことだろ」

「んー、そなのかな？」

スリイナはどこか否定的に視線をさまよわせていた。

素直に喜べばいいんだよ、つたく。……もう一押しつてところだ

な。

「そりなんだよ。そもそも、いい食材を使つたら必ず料理が美味くなる、なんて保障はどこにもないだろ？ 下手な奴は高級食材だらうとダメにするだらうしな。だから、スリイナは料理が上手だってことなんだよ」

俺がそう告げると、スリイナは恥ずかしそうに笑つた。

「そうだね。フイーがそう言つのなら、そななんだろうね。でも私、それで満足はしない。もつともつと食材を上手に扱えるようになる。なんて言つのかな……食材の味を引き出すみたいな……ね？」

「おう、頑張つてくれ。お前なら引き出せるさ」

腕を上げてもらえるのは悪いことではないからな。

しかしああ、このあと出てくる話題は食い物ばかり。この年代なら恋愛の話なんかがあつてもいいような気がするんだけどな。

まさに色氣より食い氣つてか。

ま、いいんだけどな。この二人の恋愛話とか聞きたくないし。特にリールのは絶対に聞きたくないぞ！ ……つと、つい熱くなつてしまつた。

でも、妹の恋愛に口を出したくなるのはほどこの兄貴もそつだろ？ ……あまり賛同を得られそうにないな。だが、それは俺も分かつた上での所業だ。自分が気持ち悪いってことぐらいは分かつてる。けど、分かつっていても、それでも守りたくなるんだ。リールにはそれほどない……。

俺はスリイナと食い物の話をしているリールを一瞥する。

……それほど魅力があるんだからな。

はは……これがキモいつことなんだろうな。

なんて考えていると早いもので、もう我が家に到着した。

「じゃあスリイナ、また明日な」

「バイバイ！ スリイナ姉ちゃん！」

「うん。また明日ね」

スリイナは楚々と手を振り、俺たちの前から離れていく。

もう毎度のことなので、見えなくなるまで手を振り続けるなんてことはしない。ある程度離れたところでお互い切り上げる。

スリイナが「ひひに背を向けたところで、俺たちは家に入った。

「ただいま

「ただいま～っ」

俺とリールは同時に声を発した。中から父さんや母さんの返事が返ってくるわけじゃないけど、挨拶はきちんとしなさいこといつ家訓の下に育ってきたから、まあ、癖みたいなもんかな。

俺とリールはそれぞれ自分の部屋へ向かう。家に帰つて最初にすることは着替えだ。脱いだ制服はきちんとハンガーにかけてしわにならないうつにする。……いつないと母さん、うるさかったなあ……。

普通に生活していると、そんな風に父さんや母さんの言動を思い出すことがある。親つていうのは、それだけ子供の生活に欠かすことのできない存在つてことなんだろうな。別にいなくなつてから分かつたってわけじゃないけど、いなくなられてしまつて身に沁みたつていうのかな……。親の影響は大きいんだなつて改めて認識した感じだ。

そして再認識した感想だけど、やっぱり親は居た方がいい。俺たち子供の面倒を見てくれるありがたい存在だし、それに何より、俺にしてみれば……父さんと母さんさえ生きていてくれれば……殺しながら手を出す必要もなかつたっていうのに。

けど、ここで父さんと母さんにそういう思いを抱くのはお門違いも甚だしい。殺しあくまでも俺自身が決めた道だ。むしろ父さんと母さんは、俺がそんなことをしようとしていると知つたら、間違いない止めてくれるだろつ。無論、それは生きていればの話で、現実はそうじやない。生きていなからこそ、俺は裏の世界に墮ちたわけだ。絶望がうごめく世界にな。でも、俺の世界は裏だけじゃない輝かしい表もある。

表には父さんと母さんの残した形見がたくさんあって、その中で

も一番大きな形見は、自宅兼何でも屋である我が家だ。近所の人たちの役に立ちたいといつ志の下に始めた『ストルス雑務店』。

俺はその志を 父さんと母さんの思いを受け継いで、今日も『ストルス雑務店』を開業しようと思つ。ホントは受け継ぐ資格なんてないんだろ?うけど……。

というより、正直な話、無理に受け継ぐ必要はないんだ。だって、殺しの報酬だけでも普通に生きていくことはできるからな。

……するとここに疑問が湧いてくるよな?

なんで俺は『ストルス雑務店』を受け継いでるのか。

なんですか分かるか? 結構ちゃんとした理由があるんだぞ。はい、シンキングタイム終了ーーー! ってシンキングタイムなかつたじゃん! まあ別にいいよな? 答えを教えてやるんだからさ。

で、その答えっていうのは、隠すに隠れみのだ。
殺し屋で十分に儲かってるけど、かといって何もしないと座しまれるかもしれないだろ? 俺が殺し屋をしていることは当たり前だけど誰も知らない。けど、父さんと母さんがいなことは知られている。それゆえに、『ストルスさんとの坊主は何もしないでどうやって生活費をまかなつてるんだ?』ってご近所さんに怪しまれかかもしれないだろ?

だからこそ、俺は『ストルス雑務店』を営業するんだ。もちろん父さんと母さんに対する思いがないわけじゃないぞ? わつきも言つたけど、志はきちんと受け継いでいるつもりだ。半端な仕事はしない。

それを証拠にっていうか、最近は『ご近所さんからの依頼がだいぶ増えてきているんだ。俺の健気さがご近所さんに伝わってきたんだろ?うな。

でもあれだ、だからって殺しはやめない。依頼が増えてきたとい

つても、まだそこまで稼げるわけじゃないからな。せいぜい、ジヤパニーズお父さんの毎月の小遣いぐらいだ。

「さーて、今日も頑張りますか……」

動きやすいようジャージに着替えた俺は、一階の仕事場へ向かう。仕事場には色々な道具が置いてあって、まるでホームセンターの一角のような場所だ。

「どれどれ、今日の依頼は…………って今日はナシかよ」

留守中の依頼を承るために用意している、くじ引きに使うようなボックスを覗いて、俺は呟いた。……ま、こんな日もあるさね。

俺は売店風のカウンターに肘をつきながら、ぼけーっと依頼を待つことにした。

しかし、我が家の前を通る人々は、全員がただの通行人でしかない。

ああ、退屈だ……なんて思つていると

「フィー兄ちゃん！」

まるで計ったかのようなタイミングでリールがやつてきた。す、素晴らしい！　さすがリール、ナイスだ！

「フィー兄ちゃん、今日は依頼ないの？」

「ううなんだよ。だからとつもなく暇だ。リール、なんかないか？」

「なんかつて何？　遊び？」

「そう、遊びだ。……ここから離れるわけにはいかないから、ここでできる簡単な暇つぶしみたいな奴とか、かな」

そう言つ俺は実のところ、リールがいればそれでいい。見てろつていうなら何時間でも見ていられる。見てるだけでも十分に暇が潰せるつてもんだ。

けど、それじゃアリールがかわいそうだ。ただ黙つて見られてるだけなんて、天真爛漫のリールにはできないし、そもそもそんなのはリールじゃない。

「うーんとねえ……じゃあ、ハンパーティ・ダンパーティの早書き競争

なんてどうかな？」

「何それ！ 初等部で流行つてんのか！」

「そりだよ！ 私一番なんだよ！」

ほほう、たすがだ。そんなマニアックそうなゲームで一位を取れるとは……。

いや、でも待てよ……？

「それって絵のクオリティはどうなんだ？ 丸に手足つけただけ、みたいなのか？」

もしそうなら、運次第で誰でも一位なれそうだけど……。

「ううん。私はほんのちょっとだけ凝つてるよ。先生、私の絵を見て褒めてくれたもん。『うわ……っ！』って！」

引いてる？ 引いてるよな？ 先生明らかに引いてるよなっ！ ってことはリール……早書きなのに凄い次元の絵を描いてるってこと？

……見たい。

「よし！ それでいいぜ！ 兄ちゃんと勝負だ！」

「負けないよ～っ！」

というわけで、第一回・ハンブティ・ダンブティ早書き王座決定戦が始まった。

カウンターに置いてあつた紙とペンをリールに渡す。俺も同じもの用意し、さあ始めましょうとしたところでの

「じゃあ公式ルールの説明ね」

だとさ。俺は鼓膜が正常に機能していないんじゃないかと、我が耳を疑つたね。

だつて、公式ルールつて何？ 早く書くだけの遊びになんのルールがいるっていうんだ？ そもそも公式つて……どこが認可したんだ？

さすがに突つ込もうかと思つたが　俺は我慢した。

そりやそりや？ リールが一生懸命に説明をしてくれているんだ。これを邪魔しようなんて思う奴は鬼か悪魔だ。

で、一通りの説明が終わり、俺は聞いたルールを改めて反芻することにする。

まず　いや、まあつていうか、これ一つしか公式ルールとやらはなかつた。

「ハンパーティ？」「ダンパーティ！」のかけ合いでスタート。

どうだ？　凄くシンプルだろ？

ではでは、早速始めたいと思う。ちなみに、最初の「ハンパーティ？」は挑発の意が込められているらしく、チャンピオンが言つ台詞らしい。なので、自称一番だというコールがそれを言つことになつた。

それでは改めまして……

「ハンパーティ？」

「ダンパーティ！」

戦いの火蓋が切つて落とされた。

カカカカカカカカカカ　と、ペンの走る音のみが空間を支配する。

俺はまずだ円を書いた。そこに手と足を書き足し、最後に少しひアルな顔を書こうとしたところできたらあ！

リールがカチヤリとペンを置いた。

おいおい、嘘だろ？　リールの描くハンパーティさんは、先生が思わず引くほどのできらしい。俺のハンパーティさんなんて、どこぞのエセピカソが書いたような酷い状態だぞ？　それを上回るスピードで引くほどの絵なんて書き上げられるはずがな

「うわ……っ！」

ごめん。前言撤回。書けてます。引くほどの絵が書けてます。劇画タッチのハンパーティさんが紙の中で躍動しています。

これは……完敗だ。

「……リール、負けたよ……」

「ほんと? えつへん! 私、凄いでしょー!」

「ああ、凄いよ。もう凄すぎて神だよ」

そう言つてから、俺はもう一度リールの描いたハンパーティさんを眺める。

……凄すぎる。リール、将来は画家かな? もし画家になりたいって言つたら、俺は迷わず支援することだろ?。

「ああ楽しかった! ジュース! ジュース!」

しかし、秘められた才能を爆発させたリール本人は、絵に興味なんてないと言わんばかりに家の中へと戻ってしまった。きっと、俺を負かしたから満足したんだろうな。

とその時

「おーい、何でも屋の兄ちゃーん!」

数人の子供の声がこだましてきた。ちえ、またあれかよ。いい加減にしろよな、まつたく……。

俺はため息をつきながら、声のした方を向く。

すると、予想通りの面子がこちらに向かってきていた。全員がNとYの組み合わさった野球帽を被つていて、手にはバッドとグローブ。まあ言つまでもなく、近くの空き地で草野球をしているガキ集団だ。

ここのところ、一丁一回ぐらのペースでやつてきてくれるお得意さんだ。しかし、ここのお得意さんには正直なりたくない。だつてや、

「ボール取つてきて!」

こればっかり。しかも報酬だつて全然なんだぜ……。

「はい、A・ロッドのサイン入りボール

「はいはい、こんなショボいのいらな つて、えつ! 何で? いつもはアメ玉とかのくせに!」

俺は手渡されたサイン入りボールを食い入るよう見つめる。

「サインは俺が書いたんだつ!」

俺は思わずそのホリ川をはるか遠くへ投げてしまつた

「それを見たがキビもか目を大きく見開いて、
今度、試合でライバルのことは

卷之三

などと抜かしてきた。俺は当然断つた。……つて、あれ？　こいつら、いまのボールで野球すればよかつたんじゃないの？　……バ

力野郎で、それを指摘するのは無粋でもんだ世……

「それより、ほんとに依頼したいって言うなら、もうひとがせんとこ
が假面を脱がなければ仕事ダメだよ」とさりげなく。

お前らそこんと二分かつてんのか？」
「それで食つてるんだからな？」

……分かってたよ。兄ちゃんが絶対納得する報酬をあけるよ」

言いながら、リーダー格のガキはボケットから何かを取り出した。

る。

土地の権利書でも持ってきたか。それならなんでもしてやるぞ。

人殺しでもな。

なんて考えながら、俺はその紙を開く

卷之三

土地の権利書じゃなかつたのです。ハンブティさんでした。せこぎ
リールが書いた奴と同じレベルのハンプティさんでした。

これはレベルが同じつていうよりも、

「ハルが書いた奴じゃないか？」

新編 金瓶梅

「あれ？ リールちゃんから聞いてない？」

初等部で流行ってるんだ世?

「あ、いや、それほんに聞いたらば、さうぢやなくて、なんでも

だよ「9ト

「ああそれはね、今日、リールちゃんからもらつたんだ。それで、リールちゃんの兄ちゃんはリールちゃんのことが好きだつてリールちゃんが言つてたからこれあげればきっと依頼を……つて、に、兄ちゃん……？」

俺の放つた殺氣を感じたのだろうか。リーダー格のガキは言葉を途中でやめた。

実際に賢明な判断だ。

何が……何がリールちゃんじゃボケエエ　ツ！　前々から氣になつてたけど、今日は一段とリールちゃんリールちゃん連呼しそぎじゃアホがあつ！　しかもリールにもらつただとお？　こいつ何様だ？　リールにプレゼントをもらう？　笑わせるな！　一世紀早いわ！

……いやしかし、果たしてこのハンパーティさんを、リールがコイツに渡したプレゼントだと解釈してもいいのだろうか？

俺は躍動するハンパーティさんを眺める。

リールはこのハンパーティさんを量産することができる。といふことはだ、『あー、このハンパーティさん邪魔あ、チヨー邪魔あ。でも私が書いた奴だしい、捨てんのもつたいなくない？　あー誰か処分してくんないかなあ？　あ、そうだ。あの野球バカに渡しちゃえばいいじyan！　あいつなんてえ、私にとつては焼却炉みたいな存在だしい。キャハハハハハツ！』てな具合で、リールがコイツに渡した可能性だつてあるよな？　いや、一〇〇パーそうに決まつてるつ！　ふひひつ！　リールの中でお前の存在は焼却炉にすぎないんだよ！　いい気味だなあ！

「ハハハハハハハハハハハハハハーツ！」

「……に、兄ちゃん？」

くそつ！　心の声が漏れた……つ！

「な、な、に、ハハハハハツ、笑いでエクササイズつて奴さ。ヒーハーツ！」

「ふ、ふーん……」

ええいっ！

ハンプティさんを見るような目で俺を見るなーっ！

「ほ、ほらー さつさとボール取りに行くぞー もつタダでいいからー！」

ホントはタダなんてありえないんだが、この気まずい空間から脱出あるにほけいつあるしかなかつたんだ。

ああ、怖かった……。

なんていつもあの家にボール入るんだよ。なんだっけ？ 盆栽つて奴を毎回毎回ものの見事に砕けさせてるもんなあ。てかさ、あの人も盆栽の場所変えるとかさ、色々打つ手はあるじやんか。学習しろよな、つたく。

と心で愚痴りながら、俺は家に帰ろうとしているわけだ。というより、もう家の前だ。でも家にはまだ入らない。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターに腰かける。それから、夕闇が訪れた始めた空を見上げた。

また夜が来る。俺の本業の時間がまた近づいて来たんだ。そう考えると、少しばかりの悲しさと寂しさが俺を包み込んだ。けど、こんな感覚にも慣れたもんだ。

さてと、やりますか。この静かな仕事場じゃないと安心してできないことを。

話を誰かに聞かれるわけにはいかないからな。

俺は携帯を取り出して、ボイスチェンジャーを取りつける。何、仲介屋への電話つて奴さ。

話は一、三分ほどで終わった。

ターゲットの再確認くらいだからな。

これで表でやることは終わった。あとは家に入つて夕食だ。

夜はスリイナが作りに来てくれないから、夕食作りは必然的に俺がやることになる。別に面倒だとは思わない。たださ、俺のもの凄い下手下そな料理をリールに食わせるつてのが、ねえ……？ けどさ、リールが料理を作れるつてわけでもないからな。だから結局は、俺が作るしかないわけよ。

携帯からボイスチェンジャーを外したのち、俺は家に入った。

リビングへ向かうと、テーブルに教科書ノートを広げてリールが

宿題をしていた。

「あ、フィー兄ちゃんおかえり！」

リールはくくりとした目を細めてそう言った。

俺は嬉しく感じる反面、悲しくも思えてきた。

いつもだ。リールはいつも、父さんも母さんもいない家で――

人きりで待ってくれている。

ホントなら俺がそう言つてやりたい。俺がリールを迎えてやりたい。

「フィー兄ちゃん？ どうかしたの？ ぼーっとしてるよ？」

「あ、いや……なんでも」

まあ結局、俺がリールを迎えてやるなんてことは、夢のまた夢だ。だつてそつだ？ 俺がリールを迎えるつてことは、端的に言つて俺は一ートつてことだろ？

それはちょっと好ましくない展開だ。俺の夢は、つていうより生きる理由は、リールに何不自由ない生活をさせ続けること。だから二ートじやいかんのだ。

俺はただただひたすらに、馬車馬のように働けばいいんだ。

あ、そう考へると、やっぱりリールにはこの状態で居てもううのが一番いいのかもしれない。何せ帰つてくるたびに、俺はこうして癒されるわけだからな。それにあれだ、家にいてもううのが一番安心できるしな。

けれど、リールにしてみればやっぱり退屈なんだうつな。俺が雑務で外に出てる時はずっと一人なわけだし。……さつきのハンブティさん早書き対決の時とか、もの凄く楽しそうにしてたもんなん……

……よし、笑わせよう！

迎えてやれない代わりというか、とにかくリールを楽しませてやるうといふ衝動に駆られた俺は、

「マンショնも……ダイワハウチゴ」

この前テレビでやつてた世界の面白CM集の中で、特に印象に残つたCMの決め台詞を言つてみた。

- 1 -

リールが無表情になつた。

俺に大急ぎで袋を被る

川の笑い声が聞こえてきた

l.

あ、たたし、寝るときは勘弁してもらわないとな。窒息するかも、
しないか……いや……いまでも十分に……ち、窒息死できるな、
これ。……それに、いま思えば、リールの顔が……見れないや、な
いかい……。やつぱり袋、いますぐ」勘弁つ！

ールを破つた。

ありがたいことに、リールはそれにも笑ってくれた。

仕事の意図が理解されないまま、結局は「かねにかた」で済んでしまう。

さて、リールが笑顔になつてくれたといひで、夕食を作るとしますか。俺も腹減つてきたしな。きっとリールもお腹ペエペエのはずだ。

食作るからな」

「なんで謝るの？ 面白かったからいいよ！」でも、フィー兄ちゃんの言うとおりお腹は空いてるから、なるべく早くね。」「

「お、おう！ 分かつたぜ！」

俺はマツハに相当すると思われるスピードでキッチンに移動し冷蔵庫を覗く。 ハンバーグでいいか。 焼くだけだし。

というわけで一〇分後。

我が家の中にはハンバーグとつけ合せの「ローン」とポテト、それに加えてパンと「ローンポタージュ」といへ、どいまでも普通な雰囲気を持つ料理たちが乗つかっていた。

ちなみに、「ローンポタージュ」は粉末にお湯を注いだだけだ！

別に威張つて言うことじゃないな、じめん。

俺の対面に座っているリールはこれらを見て、

「美味しそう！」

だつてさ。こんな平凡な料理に対しても、リールは田舎を輝かせてくれる。

俺はホッとしたね。リールにそつと言つてもうえれば、これ以上ない喜びだからな。

「よし、じゃあ食つか

「うん！」

「いただきます」

「いただきま～すっ！」

俺はまず、メインであるハンバーグに手をつける。どうやらリールもハンバーグのようだ。俺たち兄妹はほぼ同じタイミングで、口にハンバーグを放り込んだ。

……んー、まあまあだな。もつちょっと焼いてよかつたかもしない。

そう思いながら、俺はリールの顔を窺う。俺の味覚なんかよりも、リールに合つたかどうかが重要なんだ。

「まあまあだね。やっぱリスリイナ姉ちゃんの方が美味しいよ

「さ、左様でござるか……」

「うう……毎度のことながら、結構な毒舌だぜ。

「……うー、じめんな。兄ちゃん、いつになつても料理上手くならなくて……」

「ううん、そんなのどうでもいいんだよ。私はフイー兄ちゃんと一緒に、こいつって食べられるだけで十分だもん」

「…………り、リールう…………」

俺は思わず感極まる。 やべ、涙出そう。

俺は必死に、必死にこらえてみた。……だが、残念ながらフイー・シトダムは決壊してしまった。

いま苦笑いした奴、あとでハツ裂きにしてやる。

「フイ、フイー兄ちゃん…………？」

急いで涙を拭つてみたが、どうやら見られててしまったようだ。ああ、恥ずかしい…………。でもや、こまのはしうがないよな？ 泣くなという方が無理つて話だ。

だつていまの言葉は、俺を必要としてくれてるつことだり？ 俺が一方的にリールを必要としているつことじやなくて、リールも俺を必要してくれてるつことだろ？

それは俺にとって 何よりも嬉しい最高の言葉だ。

今後の人生において、これ以上回る感動はないんじゃないかなと思つほどにな。

「リール、ありがとな…………」

墮ちて破綻している俺は、いまの言葉だけで十分すぎるほどに救われたよ。

楽しい時間はすぐに終わる。

それは誰にとっても例外ではないだろう。だから俺にも当てはまるんだ。

今日も俺は、リールが寝静まつたのを確認してから都会の方にやつてきた。ターゲットについては、どうしてもこいつらがいるものなんだ。

来るのが面倒なんだよなあ。片道一時間近くかかるからさ。でも、それに見合った報酬があるし、何より住んでる場所から離れてるつてのは結構重要なことだ。捕まるわけにはいかないからな。

さて、今日はどこから狙おうか。といつても、やはり上からになるわけなんだけだ。

俺はターゲットが泊まっているホテルの反対側のビルの屋上へ向かつた。

ああ、寒い。やっぱ屋上寒い。でも俺だって学習はしている。今日は長袖長ズボンで来たんだ。昨日よりはマシだ。でもまだ寒い。屋上は手ごわいなー。

とふざけてもいられない。今日は昨日のみたいに、決まった時間にターゲットが来るわけじゃない。ターゲットはもう反対側のホテルの一室にいるんだ。だからタイミングが命。窓の近くに来たところを一撃で仕留めなきゃいけない。

難易度は昨日より難しいと思う。

俺はギターケースを開けて、さっそく狙撃の用意を始める。

まず三脚を組み立てて、次に銃を組み立てて、この一つをドッキングさせて固定。それから、ターゲットの泊まっている部屋に銃口を向けて、最後にスコープの標準と倍率を合わせる。

これでとりあえずは準備完了。

あとはひたすらスコープを覗いて、ターゲットが窓際に来るのを

待つだけ。カーテンが閉まつてゐるから、ホントにタイミング命だ。

……ああ、緊張してきた。

ターゲットが来る、来ない、来る、来ない、来る、来ないと引き金に指をかけてはやめ、かけてはやめを繰り返していくと、スコープで捉えているカーテンに人影が映つた。

が、俺は引き金を引けなかつた。

……くつ、タイミングを取り損ねた。……けど、ターゲットの部屋の構造を思い返す限り、ターゲットはいま、ベッドからどこかに移動したみたいなんだ。つまり、ターゲットはもう一度絶対に、カーテンの前を通るはずだ。じゃないとベッドに戻れないからな。

だから、まだ大丈夫。次こそは 狙い撃つ。

神経を研ぎ澄ましてタイミングを計つていると、こんな時に限つて、アソツが、毎度毎度俺を混乱させるアソツがやってきやがつた……。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違つてると思わないのか？

こんなこと うるさい！ 邪魔すんな！ このタイミングで出でぐるな！

……うるさい、か？ この声をうるさい呼ばわりするのか？ お前を止めようとしているこの声をうるさい呼ばわりするのか？

俺もだいぶ堕ちたなあ。いいのか？ ……父さんと母さんが悲しむぞ？

……うるさい。リールのためだ……。

そのリールはどうだ？ 俺がこんなことをしていると知つたら…

……どうなるかな？ どう思うかな？ きっと嫌われるぞ？

そんなの知られなきやーい。巻き込まなければいい。俺はそんなへマはしない！

そうか、さすがは俺。でもこの世の中そう上手いこ
ろ！ 黙れ消え

瞬間 大気を切り裂く破裂音。

銃口からのるしのような煙が上がり、スコープを覗いていた俺の視界が真っ赤になった。

先ほどまでベージュっぽい色合いだったホテルのカーテンは、最初から真紅だったのではと思うほどに、それほどまでに鮮やかな赤に染まつた。

……俺はまた、人を殺した。あの出血量なら確実だ。もしかしたら首から上が消し飛んでるかもしない。

今回はカーテンのおかげで、吐き気は襲つてこなかつた。
だから早々に立ち去りつと思つ。俺にはつぶらえてる暇なんてないんだ。

俺は銃を、三脚を、たつたいま人を殺した奴とは思えない手際のよさで片付ける。

一分も経たずに片付け終わると、俺は非常階段を駆け下りる。
難易度が高かつた分、逃げるのは昨日よりもずいぶん楽だ。相手は一般人だったからな。黒服も何もいない。

そうして、何ごともなく地上にたどり着いた俺は昨日と
もと同じように都会の風景へと溶け込んだ。
もちろん、バンドの練習帰りのガキとして。

我が家に無事到着。

時間は昨日より早い。けど、高校生が帰つてくる時間とは思えないわけなんだがな。

玄関から静かに足を踏み入れると、我が家の落ち着いた匂い。これほど安心するものもない。

昨日と同じようにまず自分の部屋へ行き、ギタークースを隠す。

それから、リールの顔を拝みに行く。どれぞれ、癒しをもらおうかねえ。

ホップ抜き足、ステップ差し足、ジャンプ忍び足を駆使して俺はリールの部屋に近づく。ドアの前に到達し、俺は「さてさて、うへへ」と開けようとしてドアがちゅっとだけ開いていることに気づく。

「ん?」「

怪訝に思つていると、部屋の中から泣き声が聞こえてきた。

うわーんつていう大泣きじゃなくて、すすり泣くような、深夜に聞くにはちょっと怖い声が聞こえてきた。

しかしそれは当然、幽霊なんていう存在し得ないものの声じゃない。

紛れもなく、リールの声だ。

俺は部屋に入るべきかどうか悩んで、入ることにした。ひょいとだけ開いているドアを一回ノックして、

「……リール、どうした?」

しかし、そう声をかけても返事はなく、俺は勝手ながらドアを大きく開けて部屋の中へ。

すると、リールはベッドに座りながら泣いていた。

「どうした? 何があつたのか?」

俺はリールのすぐ近くまで寄ったのち、しゃがみながら優しくそう尋ねた。

「うう……えぐっ……ふい、フイー兄ちゃん……っ…」

ドサッと、リールが俺に抱きついてきた。

いつもの俺なら嬉しいなあと顔がほころぶのだろうが、いまはまたたくほころばなかつた。俺にだつてそういう心ぐらいは残つてる。

「ホントに、どうした……?」

そう尋ねるしかなかつた。赤ちゃんでもあやすかのよリールの背中をぽんぽんと優しく叩きながら、俺はそつ尋ねるしかなかつた。

「……あのね、さっきトイレに起きて……戻つてくる途中に、フィー兄ちゃん寝てるかなって思つて、部屋を覗いたらね、フィー兄ちゃんが居なくて……それから家中全部探したけど居なかつたの……それで……」

やつと紡いでくれた言葉を聞いて、俺は顔をしかめた。

俺のせいじゃないか……リールが泣いてるの、俺のせいじゃないかよ……何やってんだ、俺は……。リールを悲しませるのは、絶対のタブーなのに……。

早く安心させてやらないと……でもどうやつて?

人を殺しに行ってたんだ、ごめんな。

なんて正直に言えるわけがない。そうなれば当然、嘘をつくしかない。リールに嘘をつくのは……嫌だけど、でも……そうするしかない。

「……ごめんな。田が覚めたから、ちょっと散歩に行つてただけだから心配すんな。もう絶対に居なくならないからな」

言いながら、俺はリールの小さな背中をさする。体の震えが弱くなつたことから察するに、リールはだいぶ落ち着きを取り戻してきたみたいだ。

「……ほんと?」

「ホントにホント、絶対居なくならない。だから今日もひつひつ

な?」

「うん……」

満足したように頷くと、リールは自分でベッドに横たわつた。俺はリールの足元にあるタオルケットをかけてやつた。

「じゃあリール、おやすみ」

「あ、フィー兄ちゃん、待つて……」

部屋から出ようとした俺に、リールが声をかけてきた。

「ん、なんだ?」

「……あのねフィー兄ちゃん、今日……一緒に寝て……

「えつ?」

こきなり言われてびっくりした。同時に、飛び跳ねたいほどの嬉しさを覚えた。

で、でもなあ、嬉しいんだけど、ホントにもの凄く嬉しいんだけど……い、一緒にちょっとなあ……さすがに恥ずかしいよなあ。

「フイー兄ちゃん……ダメ？」

上目遣いはダメーッ！ 断れなくなつちやうよお！ つて絶

対ダメだぞ俺！ 耐えろ！ 耐え抜くんだーっ！

「あ、あのさリール。俺つてば汗搔いたから、これからじゅうとシャワー浴びてくるんだけど、だからそのあれだ……どうせ、俺が来る前に寝てるだろ？」「…

リールの顔を見ると、いつでも寝れそうな顔をしていた。まぶたを必死に開けて抵抗している感じだ。

「ま、待ってるもん……」

はつきりいつてもう寝そつだ。……せつと、俺が目の前に現れて安心したんだろうな。

「リール、無理しちゃダメだぞ？ 寝れる時に寝ないと美人になれないぞ？」

「いいもん。美人になれなくとも……フイー兄ちゃんのこと、ずっと待ってる、もん……」

だとさ。しぶといですこと。まあ、リールの場合、いま寝なくたつて美人ルートは確定なんだけどな。

しかし、これはどうしたもんか。ちょっとまごつ……

あつ！ ひらめいたつ！

「リール！ 俺はここに自分のベッドを持つてくれる のは無理だから、まあ……床で寝るから、それならどうだ？ リールが明日の朝目覚めた時に俺がここにいればいいだり？ それとも、やっぱ一緒にじゃなきゃダメか？」

「……じゃ……それで、いい……」

お眠りになられました。

さてと、じゃあまずはシャワーを浴びてきますか。んで、そのあ

とに俺はかけ布団だけ持つてリールの部屋へ。

と、このあと俺は、その通りに動いたのち眠りについた。

なんか、最近では一番にぎやかな日だったかもしれないな、今日。

「ぐぬう……！」

わたくしめことハイニッシュの朝は、奇声を上げることから始まる。

奇声の理由は腹部の圧迫。

目を開けるまでもない。みなさんだつてお分かりでしょう？
だつてわたくしめは昨日、いや、寝たのは一時過ぎでしたから今日ですね。というわけで今日、わたくしめは自分の妹の部屋で寝たのですよ。ということは間違いようがないでしょう？
わたくしめのお腹の上にいる可愛らしい人物の名前。
それをみんなで一緒に呼びましょう。せ～のっ！

「リールう……」

寝起きだからでしょうか、心の中のようなテンションで声を張り上げることはできませんでした。
わたくしめは確かめるまでもない答えを確かめるために目を開けよつと思ひます。

さてさて、今日はどんな白いパンツを穿いているので……え
？ えつ？ ええ！
わたくしめの なんだこの口調！ もうこい疲れた！
俺の腹部にいる人物はリールじゃなかつた……

「……スリイナ、お前何してんの？」

えへへ、と笑う制服姿のスリイナ。

「えへへ、じゃねえよ。一回ビコてくれ。というよつ、なんでお前なんだ？」

「リールちゃんが一回やつてみればって言つから、つー……」

「つこじゅねえよ、つたく……。ビコつでこつもよつ重いなあつて

思つたんだよ」

そう言つと、スリイナは傷ついたような顔になり、俺からさつたと離れていった。

「お、重かつた……？」

スリイナが泣きそうな顔で問いかけてくる。

ああ……めんどい。なんで自業自得の奴を俺が慰めなければならんのだ。……でも確かに、重いつていうのはちょっとストレート過ぎて酷かつたか？……しゃーねえな、それなりの撤回しますよ、すればいいんでしょう。

「いや、重いつていうのはな、あくまでリールと比べての話だ。お前とリールじや背丈が違うんだからお前の方が重くて当たり前だろ？　それにあれだ、俺にしてみたらお前なんかまだまだ軽い方だったよ」

「はっ！　どうだこのフォロー、完璧だぜ！」

それを証拠に、スリイナは顔を素晴らしいにこやかに、それはもう美人の極みといつても差し支えないほどの笑顔を浮かべていた。がしかし

「ほんと？　軽い？　それってどのくらい？　キャビア何缶分？」
褒められたせいで調子に乗つたらしく、半ば暴走気味に質問してくれるスリイナ。キャビア何缶分なんぞ知るか！

俺はうざいと思ったが、無視するとヒートアップすること請け合ひなので、超面倒だと思いながらもそれらの質問に答えてやることにした。
ただし、一気にな。

俺は立ち上がり、スリイナに近寄つていいく。

スリイナは俺のそんな行動を怒つたと判断したらしく、急に「ごめんねごめんね」と謝り始めてきた。

けど俺はそれを無視！　お前が一度とそんな馬鹿げた質問をしてこないようにするために、俺は心を鬼にするぜ！

俺は一步一步、スリイナへ近づいていく。

スリイナが自分から壁際まで下がつていったので、簡単に追い詰

めることができた。

俺はスリイナの体に手を伸ばす。

スリイナが顔を真っ赤にしているが俺は気にならない。

俺は左手でスリイナの太ももの裏を持つ。 あ、柔らかい。 右手は背中に回す。 あ、これはブラのヒモですか？ そしてそのまま持ち上げる。あれだ、いわゆるゆお姫様抱っこって奴だ。

「いいか？ これがお前が軽いっていう証拠だ！ 分かつたら、もう一度と軽いかどうかなんてこと、俺に聞くなよ？」

「う、うん……」

うむうむ、分かったのなら降ろそう。

「それよりさ、朝食はできるんだろうな？ できるからこそ、俺の上に乗つかつてたんだろうな？」

もしできてないのにこんな遊びをしてたつていうのなら、俺はそのスカートをめくつてやる。

「できるよ。じゃあ下いこつか

スリイナはそう言つて、機嫌よさげに部屋から出て行つた。

……まったく、空氣を読めない子は嫌われるぞスリイナ。そこは『あ、ごめん。まだできないの……』だろ。そしたら俺が『んだと！ 覚悟はできてんだろうな！ それい！』と手を振り上げて、最後にスリイナが『きやつ！』だろうがよ……。

ま、別にいいんだけどな。スリイナの下着の色は大方予想がつく。ズバリ白だ。

なぜかって？ あんな純朴お嬢様が黒とかなわけないだろ？ それにさ、昨日スリイナの谷間を拝見した時、下着の色は白だつたんだ。だから白だーつ！

つて、俺は朝からなんちゅうことを考えてるんだ！ んー、これはもしかすると、マイケル症候群を発症したのかもしないな……。末期になると自らの服を引き裂いて全裸で街を闊歩し始めるといづ恐りしい病気だ。……『めんなさい、こんな病気ありません』。

なんて冗談はさておく。

リビングに向かうと、スリーナの言ひとおり、きちんと朝食が用意されていた。しかも驚くなれ、今日の朝食はなんと

フレンチトーストだった。

拍子抜けだ。

昨日よりもだいぶあつさりとした朝食は優雅に終了。色々準備したのち、父さんと母さんの遺影にいつてきますの挨拶をして、俺たちは学校に出発した。そして学校に到着すると、俺とリールは引き離される。運命とは残酷なものだ。

迎えた放課後である。

たいぶ時間飛んだなあとか、できれば思わないで欲しい。一年は三六五日もあるのだ。その中に何もない平穏な日がどれだけあると思つてゐるんだ？ 恐らく九割はそんな日だぞ。

で、今日はそういう日だつたんだ。お伝えすることなど何もない、平々凡々な日だつたんだよ。もつと言えば、今日は『ストルス雑務店』も定休日。ホントに何もない、のんびりとした日なのだ。

あつさりと残酷な運命から解き放たれた俺は、スリイナと一緒に校門の前でリールを待つていた。

「フィー、あのさあ……」

そんな中、スリイナが口を開いた。

「何だ？」

「明日は土曜日でしょ？」

「そうだな」

「だからね……その、今日、うちに来ない？」

「いいぞ。何もないしな」

「ほんとっ？」

「ああ、今日はホントに何もない日だからな。それにこここんどこれら忙しくてお前の家に全然行けてなかつたし。久々にお前の家が見たいつてもんだ」

心からそう思う。なんども言つているが、スリイナはお嬢様である。家だつてバカみたいにでかいんだ。確實に俺の家の一〇倍はあるだろうな。ちなみに、俺の家は可もなく不可もない普通の大きさの家だ。でもその一〇倍つて普通に凄いだろ？ んでもつて、そんな家に行きたくないわけがないだろ？

だから俺はあつさりオーケーしたんだ。きっとリールも行きたいと思うだらうしな。

「じゃあ私、迎えを呼ぶね」

スリイナは携帯を取り出して電話をかけ始めた。

これで歩かずに済む。別に家までそんなに離れてないけど、一〇分近く歩きたいか歩きたくないかでいつたら、そりや歩きたくないよな？

なんて考えていると、初等部の子供たちが校舎から出てきた。
実にいいタイミングだな。さてさて、リールはどこだーつ！

あ、いたーつ！

俺は恥ずかしげもなく手を振る。

リールも気づいて手を振り返してくれ……ん？ あれ？ 手を振り返してくる人数が明らかに多いんだけど？ 一、二、三、四……九人多い。九人……？

ああ、きっとあいつらだ。全員リールと比べて特徴が乏しいから分かりにくかったが 野球ボーアビもだ。

「よ。ここで一緒になるのは珍しいな」

近づいてきたガキどもに、俺は声をかけた。

「今日もボール入つたら取つてくださいよ？」

「はーい残念でしたあ！ 今日は何でも屋がお休みの日でーすつ！」

俺はしたり顔で事実を告げた。……大人気ないな、俺。

「え？ そうなの？」

「そうなんだよ。お前らが利用し始めたのは三週間ぐらい前からだつけか？ ま、知らなくて無理ないかもな。今日は一ヶ月に一度の定休日だ」

休み少なっ！ って思つたろ？ でも、学校に行きながら、俺たち兄妹が生活をやつていけるぐらい『ストルス雑務店』は稼いでると、スリイナを含めた近所の人たちに思わせるためには、このくらい働かないダメなんだよ。

なんでそんなことを思わせる必要があるのかつて言えば、前も言つたよな？ 殺し屋をやつてるつてことを隠すためだ。

大変つて言えば大変だけど、つらいってわけでもないし、哀れみ

はやめてくれよ？

「あーあ、今日は野球できないな……」

「玉拾いがないと野球できないって、お前らどんだけボールなくす気なんだよっ！」

ガキどもは俺のそんな突つ込みを華麗にスルー。哀愁を漂わせながらトボトボと立ち去つていった。……そんなに野球したいなら部活入れよ。そうすればボールとか盆栽とか気にする必要もなくなつて存分にプレーできるだろうによ。つて、そういうふうだ、お前らなんで草野球で満足してんだよ！

声を大にして尋ねてみたかったが、そこまではあいつらに興味があるわけでもない。だから心中のみでの疑問とさせてもらつた。あしからずご了承してくれ。

まあ、そんなことより、「リール、スリイナの家に行くか？」スリイナが誘つてくれたんだけど？」

「」のことをリールに教えていなかつたじやないか。ま、返事は聞くまでもないけどな。

「うん！ 行く行く！」

な？ 行きたいに決まつてるんだよ。逆に行きたくない奴なんているのかね？

と考えていたその時

黒塗りの高級車 リムジンつて奴が校門前に止まつた。フォシルニクス家のお迎えが来たようだ。

運転席のドアが開き、紳士という言葉が似合つおじいさん執事登場。執事さんは俺たちの方まで回つてきて、わざわざドアを開けてくれた。凄いだろ？

「さ、スリイナお嬢様、お友達もどうぞ」

「フリーとリールちゃんからお先にどうぞ」

「いいのか？」

「いいからいいから！」

楽しそうに言つスリイナに背中を押されて、俺とリールはリムジンの中へ。

「広いつ！」

はしゃぐリール。別に俺もリールも乗ったのはこれが初めてじゃない。数回乗ったことがある。でも、それでもはしゃぐってこれは。だつて、俺もはしゃぎそうだもん。

もつてこいら辺の車と全然違う。リールの轟うどおり広い。これに
欠ける。普通に寝れるもんな。暮らそりうと思えば余裕で暮らせると
思つ。

そして、そんなミーキャンピングカーがついに発進した。目的地はフォシルニクス邸。車だつたら一、三分で着くだろう。だから別にやることはない。のんびりと、このつかの間の贅沢を味わうことにする。

むむ！ 残念ながら俺にはやることができた。この座席の感覚はまたいつかしつかりと味わえればそれでいい。いまはやらなければならぬことがあるつ！

それが何かと言えば、ズバリ！パンツを見ることだ。

俺の対面に座っているスリイナ。それを見て、朝の答え合わせをしなければならないという使命感に襲われた。みんなの者、期待に応えようぞ！

ちなみにいま、スリイナの足はしつかりと閉じられている。無意識下での自動防御といったところだろうか。さすがはお嬢様だ。だが　だがあしかしい！　こいつはお嬢様である前にちょっとアホなのだ。勉学の部分ではない。いわゆる天然つて奴だ。

「……………」

「アーティスト」

ほほーい！ やつぱり予想通りだ。早口の命令口調で言えば開く

と思つたせ！

ちなみに色の方も予想通りでした。え？ 何かつて？ だから白

だよ白っ！

「うう、酷いよフイー……」

スリイナは足を内股にしてスカートを押さえつけるように手を置いていた。

こうされてしまつては打つ手なし。完全防衛状態だ。ま、もう意味ないけどな。

「何が酷いんだよ。あんな命令で足開くスリイナだつてある意味酷いだろ」

まあ、それを狙つたわけなんだけだ。

「だつてえ……あんなの卑怯だよお……」「

……な、なんか、スリイナが可愛いぞ。なんだこの気持ちは……。ゾクゾクというか、胸の奥深くで何かが高ぶつている。ハツ！まさかSへの覚醒か！この状況を楽しく感じるのは、そういうことなのかあ！……で、でも俺は！俺は自称ニコートラルなんでそこんところじくうーつ！

「じゃあお前も俺にやり返せばいいだろ？確かにいまのは俺も悪かつたかもしれないからな」「

「ほらな？俺つてニコートラルだから、今度はマゾになつただろ？」「やり返す？それつてどういつ形でもいいの……？」

「いや、そりや限度つてもんをちゃんと設けてくれよ？あと、痛いのはヤダぞ？」

あら、これはマゾあるまじき発言だな。でもいいんだ。だつて俺はニコートラル。

「そんなことしないよ。でもそれ以外ならなんでもいい？」

「まあな……とりあえず体に害がなきやなんだつていいよ。ほら、今日は休みだけど、明日からは仕事を再開するんだからな

怪我して働けなくなるとホントに困るからな。

「そうだよね……じゃあ、害はないけど、でも強烈な仕返しを考えておくからね」「へいへい、せいぜい楽しみにしておきますよ

吐き捨てるようになに言つたのち、俺はリールを見た。

リールは縦長の座席に横たわってゴロゴロとしていた。なんて愛らしいんだ！ そして白のパンツが見えているじゃないか！ なんたる幸運だ！ ありがたやあありがたやあ！

「フィー……」

横から死んだ魚を見るような視線が突き刺さつてきた。

「な、何ドン引きしてんだよ！ いいだろ別に！ スリイナだつて目の前にパンツがあつたら見るだろ？ そうだ、俺の見せてやるよ。さつきのお返しだ」

「み、見せなくていいよお！ フィーのバカツ！」

怒っているからなのか、それとも恥ずかしいからなのか、とにかくスリイナは顔を真っ赤にしていた。

これ以上からかうのはちょっと危険と判断し、俺はお口にチャックを施した。

さあ、どうでしたでしょうか！ リムジンという限られた空間をどれだけ愉快なステージへ変えられるかにチャレンジした今回！ スカートの中身当て！

座席のふかふかを存分に堪能！

リムジンの楽しみ方は 人それぞれさつ！

とまあ、急にまとめに入つた理由は、リムジンがフォシルニクス邸に着いたからである。

リムジンがフォシル－クス邸に到着した。

やつぱり車はいいな。早いし便利だ。父さんが死んでからは車に乗れなくなつたからさ、痛いほど分かるよ。この時代は車がないとダメだつてことがな。

とか思つてゐると、執事さんがドアを開けてくれた。スリイナが最初に降りて、俺、リールの順だ。

降りればそこは、まるでホテルの入り口。しかも、スリイナが帰つてきたからだらうか、出迎えが結構いる。まさにVIPがホテルにやつてきた時のようなだ。

中に入ればエントランスホール。てか、受付がないだけでホテルだね、ここ。

ホント久々に來たので、俺は首を右往左往させてお屋敷の中を見回す。鹿の首のはぐ製とか、それっぽいモノがたくさん飾られている。

「やっぱ凄いなスリイナの家は……つてあれ？」

スリイナに声をかけようとして、スリイナがいなくなつていてることに気づく。

「スリイナ姉ちゃんはお着替えだつて」

どうやら、俺が色んなモノに目を奪われているうちに、現実では状況が変化していただしい。

「じゃあ、俺たちはどうすれば……」

精神と時の部屋から出た時に近い感覚に襲われた俺は、別の意味で右往左往。

「いらっしゃいわー」

そんな俺に助け舟の如く、メイドさんが素晴らしい笑顔とともに声をかけてくれた。

この家のメイドさんの格好は、紺と白を基調とした、いわゆるク

ラシックスタイル。しかしながら、それを着ているメイドさんが中々に可愛いお人だ。……俺のメイドさんになつてはくれないだろうか？

妄想にふける俺と兄のそんな妄想を知る由もないリールは、清楚で可憐なメイドさんのあとに続いて奥へと進んでいく。

そうして案内された場所は、前にも通されたことがある客間だった。客間なのにうちのリビングよりもはるかに広いという、庶民にとつては存在するだけで嫌味を覚えさせられる空間だ。

俺とリールは、その空間の中央付近に鎮座する高級そうなソファに腰かけるよう促される。お言葉に甘えてリールと一緒に座ると、計つたようなタイミングで紅茶が出てきた。

味はなんだらうかと考えながら、俺は一口飲む。

「な……っ！」

俺は雷に打たれた避雷針の気分になつた。

……れ、レモンティーだと！ なぜ俺の好みを知つている？ だ、だとすれば、リールのはミルクティーか！

俺はリールの持つティーカップを覗き込む。

レモンティー やん。……くそつ、サイコメトラーがいるんじやないかという妙な深読みしてしまつた俺がちょっと恥ずかしいじやないか……。

一人で頬を染めながら、俺は新たなる疑問を抱き始める。

……そういえば、これはインスタントなのか？ いや、この家にはインスタントなんてものの自体が存在しないだろ。いや、もしかしたらその思い込みを利用して、実はインスタントを……いや、逆にそこまでの深読みをさらに読んで、あえて高級なものをしているのではないか？ けどその逆も……。

と思考が力オスしかけたところに、

「フリー、どうしたの？」

スリイナの声が届いた。 ちょうどいい。インスタントなのか

そうでないのか、この際スリイナに聞いてしまえ。

「あのセイの…………」

連ねていくはずだつた俺の言葉は、序盤も序盤で止まつてしまつた。なんでかつて？ 端的に言つと……思わず目を奪われたんだ。制服じやないスリイナを見たのがかなり久々ということもあったからか……いや、例え毎日私服姿を見ていたとしても、これには目を奪われたことだろう。

スリイナの格好は白の長袖Tシャツに黒のベスト、下はデニムのホットパンツ。ニーソンとかは穿いてなくて、生足が全開である。俺がじーっと見ていたせいが、スリイナの顔が赤くなる。

「へ、変かな？」

もじもじとした態度でそう聞かれたので、俺は考えてみる。

変かどうか……。別に変ではない。でもスリイナっぽくないと言えばスリイナっぽくない。スリイナは大人しいから、こういう服のイメージがまるでなかつた。だつて最後に見たスリイナの私服つて、白のワンピースだぞ？ それは遠い記憶でもない。ほんの一、二週間前のことだ。

イメージとかけ離れた姿を見せられてどう答えればいいか迷つた俺は、思わず最初に見た時の印象を口走つてしまつた。

「エロい」

そう言つた瞬間、俺のつま先に激痛が走る。リールによるゼロ距離かかと落としを食らつたからだ。俺はあまりの痛さに悶える。……ごめん、リール。でもこればかりはそう思つちやうつて。

悶えながらも、俺はしつかりとスリイナを捉え続ける。

エロい発言のせいか、スリイナの顔は赤に支配されていた。けど着替え直しに行くでもなく、隠すでもなく、ただその場に立つている。顔をよく見れば、恥ずかしさの中に嬉しさが混じつてるように見えなくもない。

……やはりスリイナは痴女なのだろうか？ その悩ましい太ももを俺に見せつけ、自分は密かに高揚感を抱いているところことなのだろうか？

そこまで考えて、俺は頭を振る。

ないない、ありえない。長年見てきたけど、スリイナはそんな奴じゃない。嬉しさが混じってるみたいに見えたのは俺の見間違いだろうな。

それよりもまず、エロい発言を撤回しないと。何しろリールが大層ご立腹みたいだし。

あとはまあ、スリイナの服装に対するちゃんとした感想も入れてやらないとな。せっかくオシャレしたみたいだしさ。

「ごめんな。エロいは違うよな。エロいじゃなくて、意外だったよ。俺はもっと地味めの服で来るのかと思ってたからさ……でもそれが、その、いきなり大胆なので来たもんだから正直びっくりして……けど別に変ではないし、俺はその格好のお前……好きだけど」

「……好き？」

言葉のチョイスを誤つてしまつた！ 最後は『いいと思つけど』でシメるべきだった！ は、早く好き発言を取り消さないと！ 「す、好きつていうのはさ、その格好が似合つてるって意味だ！ へ、変な勘違いすんなよなつ！」

あれ？ こんな感じの台詞つて、普通、女の方が使うんじゃないのか？ ……ま、いいか。

「……フィーフたら、照れちゃつて可愛い……」

「う、うつせえ！ 照れてなんてねえよ！ スリイナこそ、自分の照れを棚に上げて何言つてやがる！ 照れたお前だって可愛いぞ！」

「えつ」

ぎやああああああああああああああああああああああああ！ 俺いまもの凄い変なこと言つたよなあ！ 勢いに任せ過ぎて、もの凄い変なこと言つちまつたよなあーつ！

……ああ、隠れる場所があるのなら、例え肥溜めの中でも構わないぜ……。心底そんな気分だ……。

その後、場は雑談タイムとなつたのだが、俺とスリイナは初めて

のお見合いみたいな雰囲気になってしまって、ほとんど会話ができなかつた。

リールがいなかつたら氣まずさで死んでいたかもしない。

もしかして……あの氣まずい空間こそが、スリイナの言ってた仕返しだつたのか？

いや、まあ、そう考へるにはあまりにもできすぎだとは思つけど……。

でも仮に……もしかつたのならば、確かにこれ以上ない強烈な仕返しだつたぜ。

あ、そういういえばレモンティーの正体聞いてない！

フォシルニクス邸からの帰り道、俺はそのことを思い出した
なんてな、嘘だ。

……回りくどいことじごめんなさい。ちなみにレモンティーは
絞つたりして作ったそうです。インスタントじゃなかつたです。
「おっほん」では気を取り直して。

俺たち兄妹はまだスリイナの家だ。まだっていうか、今日は家に
帰らない。

泊まつてけだそうだ。

さつきまでの妙な雰囲気はなくなつたし、明日の仕事は午後から
だからということもあって、俺は了承した。リールもその方がよさ
そうだったからな。

それでいまは夕食中なんだが、やっぱ凄いね。何がつて料理に決
まってんだけど、もうあれだね、レストラン、最高級のレストラン。
夕食がコースで出てくるつて凄くない？

まあ……だからつて、雰囲気まで最高級レストランつてわけじや
ないんだけどな。

「あはははははっ！ フィーニット君！ 婦に入りなさい、婦に！」
こう言つたのは、縦長テーブルの先端　お誕生日席つて言つ
かな？ そこに座つているスリイナの親父さんだ。

親父といつてもまだ若い。四〇手前ぐらいだつた気がする。交友
のあつた父さんの話によれば、一代でこの家を築き上げた凄い人ら
しい。でも性格がちょっとおかしい。

ホント、親父さんは人々に会つても変わらないな……。ま、気に
しない気にしない。

「も、もう、お父さんつたら……」

と、いまの親父さんの発言を受けて頬を染める、俺の右隣のスリ

イナ。なんかお前、最近頬染めっぱなしになつたと強く否定しろよ。

「でもスリイナはフイーネット君のことが好きなんだろ？ んー？」

「ほら言ってみなさい、ほらー。」

なんだこいつ、最低だな。スリイナは俺のことなんて好きじゃないに決まつてんだろ。

「…………」

「スリイナ！ なんか言え！ 勝手に肯定されんぞー。」

「そうかそうか！ やつぱりな！」

「ほら見たことか！ ここには俺がビシッと言つてやらないとー。」

「親父さん、俺は婿になんか入りませんからねー。」

「ん？ そうか……じゃあしおづがないな……」

「なんだ、意外とあつさり……」

「うん、しようがない。スリイナ、お嫁に行きなさい」「んでだよつ！ なぜそつなるつ！」

「親父さん、俺は婿には行かないし、お嫁も要りません！ 大体なんでそんなに俺とスリイナをくつつけたがるんですか！」「親として当然だろ？」

「当然じゃないだろ！ そこは普通、手放したくない！ だろ！」

「俺だつてリールをお嫁になんてやりたくないし。」

「…………やっぱおかしいや、この人。新しいタイプの親バカとでもいうのか……。」

で、スリイナはスリイナでまだ赤くなつてうつむいてるし。……いや、もしかしたら落ち込んでるのかもしれないな。俺と結婚とか言わてるんだし。幼なじみと結婚なんて冗談じゃないもんな。

「スリイナ、気にすんな。俺と結婚なんかしなくていいんだから」

「冗談でも言つよう明るく、けど親父さんに聞かれると面倒そつだから小さく声をかけた。

スリイナが慌ててなんか言おつとしてたけど、別にどうでもいい。たぶん、いや絶対に俺を気遣う言葉が、例えば『私は嫌じゃないよ』

とかいつ言葉が飛んでくるはずだからな。もつ聞かなくたつて分かる。

「ん？ フィーニット君、スリイナなんて声をかけたんだい？ もしや、『あんな親父から言われなくても俺たち結婚するもんな』つ』つて」

「違う！」

「じゃあなんだろうな？ そのあのスリイナの慌てふりからすると……『子供は一〇人がいいな~つ』とか」

「ちげえよ！」

「一〇人は大変だ。スリイナ、頑張りなさい！」

無視！ 無視ですか！ 片手で小さくガツツポーズ作んなつ！

「……はい」

はいじやねえええええ！ 親父さんが何言つてるか分かつてんのか！ ああもう限界だ！ キレていいいはず！ 俺はキレていいいはずだ！

「いいに加減しろよ、アンタ」

「こら！ 言葉遣いがだんだんひどくなつてきてるよ。もつと年上を敬いなさい。まったく、これだから最近の若者は……」

「す、すいません……」

出鼻をくじかれてしまつた。なんだよ急に……。てか、敬われたいのならもつとしつかりしてくれよ……。

「うんうん、分かればいいんだ。それより、一〇人はちょっと多いんじゃないかな？ 五人じゃダメかな？ まあ、孫がいっぽいっていうのは悪くはないんだけどね」

……もういい。もう無視無視。相手にしちゃダメだ。

俺は心を晴らすため、リールと会話することにした。首を左に向ける。

まあ可愛い！ でも心なしか不機嫌な気がする。……今まで相手をしていなかつたからかな？ それなら、いまからたゞふり相手をしてやるからな。

「リール、この

「ふんっ！」

だぞ？

「ほ、ほんの親父いいい！　いや、ダメダメだ！　これを相手にしちゃダメなんだ。また親父ペースになる。いまはとにかく、リールの機嫌をどうにかしないと……。

「リール、俺はどこにも行かないで、ずっとリールのそばにいるからな。結婚だつてしないし、お前を一人になんかしないからな」
そう言つと、リールはこちらに顔を向けてくれた。といつても、様子を窺うような感じで、ちゃんと見てくれてるわけじゃないけど。でも、これはあと一押しで機嫌を取り戻してくれるはずだ。さて、どんな言葉をかけようか。俺がそう模索していると、

「 うかうか、やつぱりリールちゃんもフイーーー！シト船の！」とが
好きなのか。あはははは、モテモテだね？ フイーーー！」

リールが親父さんの台詞を遮る。そして、こちらにチラッとだけ向けていた顔を薄く染めたのち、さつきよりもひねりにひねってそっぽを向いた。一周回って俺の方を向きそうなレベルの逸らし具合だ。

ああ……せつかぐじに向かせたの!!……お、親父の野郎が
いらっしゃりと嘆つから、コールの奴、恥ずかしがりやせつたじやんよ
お…………。

はあ……なんで俺ばっかりこんな氣まずい目に遭わなきゃいけないんだよ……。神様、ちょっとばかし理不尽だぞ。

……まあ、俺なんかにはこのへりこの罰を貰うことや、イーブン
つひとことなんだろうけどな。

騒がしい食事を終えて、リールがどうにか機嫌を取り戻してくれたところで、俺たちは風呂に入ることにした。

もちろん混浴などではない。そもそも、この家には広い風呂が数ヶ所あるんだ。そんな狭苦しいことをする必要はない。……そりや、女の子と狭苦しいことするのは大歓迎だけど、それは倫理に反するつてもんだ。 つて、人殺しの俺が何言つてんだか。

まあいや。それで、俺はそのうちの一ヶ所の風呂に一人で来ている。

脱衣所がもの凄く広い。それはもうスパリゾートかつてぐらいにな。ロッカーもあるし。まあ、使用人たちが多いからなんだろうけどさ。

そんな広い空間で服を脱ぐ。フルになつたところで、俺は風呂場へ続く扉を開ける。

お！ そうそう！ こ家の風呂はこいつのだつたつけな！
眼前に広がる光景を見て、俺のテンションは上がりに上がる。
大浴場と呼んでもいいほどの広さ。そこに低い塀みたいなモノが存在している。

その低い塀みたいなモノには、シャワーがついている。塀の左側に五個、右側にも五個、両側合わせて一〇個という配置。

それとまったく同じ塀がもう一列あるから、シャワーは合計一〇個。つまり、ここで一〇人が体を洗えるってことだよな……。

啞然としながら奥に目を向けると、その一〇人が余裕で入れそうなほどにでかい湯船があった。

この浴場は確かに日本の銭湯というものをモチーフにしていると言っていた。日本すげえ。いや、これを作るほどの財力を持つあの親父が凄いのか？

ま、どうでもいいや。しかし、ここを貸しきり状態で使えるつ

て凄いことだよな。

俺は早速、体を洗う。　　お、このボディシャンプーいい匂い。
やつぱこうじうのも高いのかな？…………って、男のこんなシーン見
せられてもねえ？

快く割愛させていただきます。俺も分かつてるさ！

というわけで、頭も体も洗い終えた俺は、広い湯船に浸かること
に。

「うい～……」

こんな声も出ると、だつてホモサピエンスだもの。
さてと……風呂から出たら何をしようか？

リールとしゃべつて、リールと戯れて、リールと寝るか。いや、
寝るのはダメか。

なんて考えていた時だった。

ガララッ！　と脱衣所と風呂場を隔てている引き戸が開く音。

……だ、誰か入ってきた？…………でも一体誰が？　もしや使用者
さん？　いや、使用者さんには連絡とか入つてそうだよな。お嬢様
たちがお風呂に入りますよつて感じにな。それに例えそんな連絡が
なかつたとしてもだ、俺は脱衣所の入り口に使用中の札を置いてお
いたし……まあ、仮に札の存在に気づかずとも、脱衣所には俺の脱
い服がある。誰かが入つてるっていうのは分かるはずだ……。

だからというかなんというか……使用者たちの可能性は限り
なくゼロだと思う。だって、そんなおっちょこちよいな使用者さん
なんて、この現実世界にはいないと思うし。そもそも使用者さんだ
としたら、一人で入つてくるのはおかしいだろ。使用者さんの身分
つていうのはさ、風呂に一人きりで入れるほど高いもんじゃないだ
ろうじ。まとめてというか、複数人で入るもんだと思う。

でだ、それじゃあいま入つてきたのは一体誰なんだって話ね。

使用者さんを除くと、その数は限られてくる。さらにその中でも、
人が風呂に入つているのにも気づかずに入つてくるアホと言えば…

スリイナ？

あ、ありえる……。奴の天然ぶりならば、俺がどこの風呂に入つたかを把握していなき恐れがある。さらにあの天然ならば、札を置こうがそれに気づかない可能性が十分にある。さらにさらにあの天然ならば、俺の服を見たところで『ここで洗濯するのかな?』とか思わないかもしれない。ちなみにその服といつのは制服だが、ここには制服を洗うことができるクリーニングルームがあつたはずだ。つまり、あらゆる天然が重なり合ひ、奴は、スリイナはここにいるということになる。

といつても、まだ仮説だ。

ここからはその人物が見えない。入つてきた時は塀が邪魔で見えなかつたし、ソイツはそのあとすぐに体を洗い始めたからな。俺はまだ目視できていなわけなんだ。

なので、俺はソイツが誰なのかを確かめるべく、音もなく湯船から出る。俺はすぐさま身をかがめ、それからほふく前進の体勢になつて少しだけ進み、ソイツが体を洗つている列を覗き見た。

「ぶつ！」

思わず噴き出す。やつべ！ 俺は急いで顔を引っ込める。

ふう、どうやらバレなかつたようだ。 てかそれよりあの、ホントにスリイナだつたんだけど。……ヤバかつたよ。無防備だつたよ、うへへ じゃないじゃない！

俺はブンブンと頭を振つて煩惱を追い払う。

一刻も早くここを出よう。じゃないと俺の理性がなくなりそうだ。別にそれは、スリイナに興味がある、とかじゃないんだからな！ 目の前に、健全な男子の目の前にあんなものがあつたらダメなんだよつ！ もう見るからに柔肌でございましたーつ！ あくまで横からのアングルだつたので何も見ることができなかつたのが悔しいよおーつ！

つてああもう！ 思い出しちゃダメえーつ！

「」からはダビデ像でも考えながら行動することにする。

……ああ、冷静になれてきた。ダビデを考えることによつて、

萎えに萎えてきたぞ。

そうして、なんとか沈静化に成功したところで、脱出ミッションを開始する。

俺はいま、奥の湯船の前にほふく前進の状態で待機している。一方のスリイナは、俺に近い方の壜の内側で体を洗っている。つまり、スリイナのいる列の外側をほふくで移動すれば、入り口の近くまでは行くことが可能というわけだ。しかし、スリイナの座っている位置が入り口側のため、そこから先に進むのは行くことは不可能。强行突破なんてしようもんなら、全裸と全裸でこんなにちはすること請け合いで。

ということです、壜の外側を通り入り口付近まで移動しようと思つ。

……風呂場の床を這うつていつのは、あまり気持ちいいもんじやないな……。

なんてことを考えながらも、俺はなんとか移動完了。

しかし、問題はここからだ。

体を洗い終えたスリイナはどうする？ もちろん立ち上がる」とだろう。

それが大問題だ。なぜなら、立ち上がられてしまつと壜なんてあつてないようなモノへと変貌してしまつからだ。

くそつ！ ヤバイぞ、これはピンチだ……つていうのは「冗談だ」。一応乗り切る方法はある。スリイナが湯船に向かつて歩き始めるまで、壜にぴつたりとくつついていればいいんだ。日本の言葉で言う、灯台テモクラシーって奴だ。身近なことには気づきにくいつて意味だよな。

と、スリイナの使用しているシャワーの音が止まつた。……よし、決行だ。

いま考えたとおり、俺は壜にぴつたりと張りつく。

「 つ！」

冷たつ！ 大理石つてことを忘れてたぜ……つ！

危うく声を発しそうになつたが、俺はグッとこられた。

冷たさが体になじんでいく中、ピチャピチャといつ足音が俺の耳に入る。どうやら灯台モクラシーは成功のようだ。

さて、ここからはもたもたしていられない。スリイナが湯船に向かつて歩いているいまこそが、脱出するための最大のチャンスだ。

俺は塀への張りつきを解除し、クラウチングスタートのような状態になる。

そして、そのまま四つんばいで歩いていく。なんで立ち上がるなりのかつて言えば、まあ……氣分だ！

入り口まであと五メートル。

よし、スリイナも気づいていない。いいぞいいぞ。

この時、俺はスリイナの綺麗な後ろ姿を見ていたが、ダビデ像と相殺しあつた結果、普通に見ることができた。うむ、いい尻だ。あと四メートル。

ここには、ついさっきまでスリイナが体を洗っていた辺りだ。シャンプーの残りに気をつけない うわーっ！

バチン！ と体を打ちつけた音が浴場中に響き渡つた。

俺は玉を強打してしまい、ただただ悶える。

そうしながら思つ。

夢、ここに漬える。

俺は入り口の方に向けている顔を、恐る恐るスリイナの方へと向けた。

玉を打ちつけた痛さによつて出てきた涙で、俺の視界はほとんど何も見えない。それでも、スリイナがあわあわしていることだけは分かつた。

そこで、俺の意識は急激に落ちていく。

これ、ヤバインじゃないかな 玉が……。

「…………んあ…………」

「どうやら、意識が戻つたらしいな。

お、玉が痛くない。俺は安堵に包まれる。

それから、意識を体全体に移動させて、俺は自分が横になつていることに気づく。ベッドがふかふかだから、ここはまだスリイナの家のようなだ。

つてことは、そんなに時間は経つてないわけだ。せいぜい夜が更けたぐらいか？

どれ、目を開けるとしますか。

「あ、フリー兄ちゃん起きた！」

リールが起きてる……？　じゃあ朝か？　次の日になつちまつたのか？

「…………フリー、大丈夫？」

俺と目を合わせないようにしながら、スリイナが聞いてきた。
「なんで目を合わせてくれないんだよ。あれは俺じやなくてスリイナが悪いって、ああ……そうか。あれってスリイナは、俺が風呂に入つてることをまったく知らなかつたわけだもんな。

だからスリイナは、俺のことを『覗き』とでも思つてるのかもしない。

ちゃんと弁解しないと。

でもまず、弁解するよりも先に聞きたいことがある。

「いまはいつだ？」

これが凄く気になる。自分の中の時間は完全に狂つてしまつたからな。

「…………フリーが倒れてから、一時間くらい経つたかな？」

依然として目を合わせてくれないまま、スリイナが告げた。
「あ、そんなもんなの？」

気になることがなくなつてスッキリした俺は、今度こそ弁解を始める。

「あのむ、スリイナ。……俺はあれ、別に覗きをしたわけじゃないんだぞ……？」「

「分かつてゐるよ。あそこはフイーに割り当てられてたお風呂場で、あれば間違つて入つた私が悪いんでしょ？」

「えつ、知つてんの？」

「じゃ、じゃあなんで田を呑わせてくれないのでしょ？？」

「それは、だつて……」

「だつて？」

俺が促すと、スリイナは俺からもつと顔を背けた。なんだなんだ？「服、着てないから……」

「え？ 誰が？」

「……フイーが」

俺は慌てて自分の体を見やる。

「ちょ！ なんだこれえ！」

俺はどじそいの部族よろしく全裸だった。もちろん、あそこはきちんと隠してあつた。ただし、タオルが乗つかつているだけという、なんとも危険な状態だつたが。

風呂あがりの俺など珍しくもなんともないリールならば普通の態度でいられるだろう。しかし、スリイナはこんなもの見ていられるわけがない。目を逸らしていたのはこれが原因で間違いないだろう。と考えたところで、俺はふと思つ。

確かに、起きている本人の前でなら、こんなもんはまともに見られない。

けれどどうだろう？

裸同然で寝ている美少女が田の前に居たとして、それから田を背けるなんてことができるだらうか？ たぶん、いや絶対にできないよな？

起きてるのなら背けるだらうけど、寝てたらガン見だよな。

俺は、それをいまの状況に当てはめてみる。勘違いして欲しくないのは、俺は別に自分のことを美少年とか言ってるわけじゃないぞ？

裸の女がいれば、例え美少女じゃなくたって、なんだかんだで見ちゃうだろ？ それと同じぞ。

だから、俺はリールに聞いてみた。

「なあ、俺が気絶してる時、スリイナはどうしてた？」

「フリー兄ちゃんのことをね、じーっと見てたよ」

「ほほ～う」

俺は下卑た笑顔でスリイナを見る。

スリイナは「見てないよ見てないよ」と言しながらも見る赤くなつていく。

ホントにからかいがいのある奴だ。へへへ、もっとからかつてやる。

俺の中のサドの血が田覚め始める。

「そういうえば、俺つて風呂場で倒れたよな？ その時、俺とスリイナは一人きりだったわけだよなあ。お前どうした？」

「す、すぐ人に呼びに行つたよ」

「ほんとか～？ お前、俺を仰向けにしたりしてないよな～？」

「し、してないよ！」

「ほんとに？」

「ほんとだよ！」

俺の目を見据えて言つてくるスリイナ。その目にまづすら涙が浮かんでいた。

「……やれやれ、ここまでだな。

「『めんごめん、悪かったよ』

言いながら、俺はスリイナの頭をポンポンと一回叩く。

スリイナはそれに対して、「えへへ……」と照れたような、それでいて嬉しそうに笑つてくれた

と同時に、

「ふんっ！」

つまんない！ とでも言ひかのように可愛い鳴き声が聞こえたきたので、俺はリールの方を向く。

「リールにも心配かけたな。ごめんごめん」

スリイナにしたこととまつたく同じことを、俺はリールにしてやつた。

リールもこれだけで「えへへ」と楽しげに笑ってくれて、この場は和やかな雰囲気に落ち着いた。

それはそれで大変よろしい。大変よろしいのだけれど、

「そろそろ服をくれよ……」

ボソツと呟くと、スリイナがスタスターと部屋の外へ駆けていった。一分ほどして戻つてくると、その手に握られていたのは学校の制服ではなく、執事さんの制服だった。

クリーニングしてくれているらしく、その代わりだそうだ。スリ

イナは一人っ子だから、男モノの服なんて持つてないだろうしな。

俺は一人をいつたん部屋の外へ追い出し、執事さんの制服を着用してみた。

うん、似合わない。とっても似合わないよね。五〇年後も似合わないと思う。

「フリー、まだあ？」

スリイナのおつとりとした呼びかけ。リールの「早く早くうー」という催促も聞こえてくる。

正直あんまり見せたくないけど、二人を呼び戻さないわけにもいかないしな。

「いいぞ……」

告げた瞬間に扉が開き、まず入ってきたリールが、

「わあー！ フリー兄ちゃんかっこいい！」

だそうだ。リールにそう言われるのは素直に嬉しい。けど、リールの目が節穴になってしまったではないかと、俺は心配してしまった。

一方、続けて入ってきたスリイナは、俺をジーッと観察していた。見方によつては呆然とも受け取れる。

ほら見たことか。やつぱ変なんだよ。わざとリールの言葉は、お世辞なんだろ？

「ねえ、フイー……」

ほら来るぜ……。毎日毎日本物の執事を見続けているお嬢様直々の辛口チョックがな。

「私の専属として雇つてもいいかな？」

なんでやねん。甘口過ぎるやん。

「冗談はそれぐらいにしてよ」と言葉を返すと戻ったが、スリイナの目は本気だった。俺は言葉を発する前に口を開いた。

……一体どういうことだ？ この似合わない格好がスリイナのお眼鏡にかなつたのだろうか？ それともこの格好、実はイケてるのだろうか？ 節穴はリールじゃなくて俺なのか？

「ねえフィー、ダメ？」

色々思考していると、スリイナが再度尋ねてくる。……まずはそれに対しての返事をしておくか。

「はつきりいつてダメだ」

「なんで？」

「だつてそれつても、よつはスリイナの面倒を見るつてことだろ？」「簡単に言えばそうだけど……イヤ？ お給料は高くするけど？」

「やだよ、めんどいし」

給料の問題じゃないな。ホントに面倒そうだし、何より幼なじみと主従関係とかちょっと冗談じゃない。……俺はこのままがいいんだ。上も下もない、このままがな。

「め、めんどい……」

スリイナは俺の言葉にショックを受けたらしく、その場にへなへな~としゃがみ込んでしまった。

それを見て、ちょっとかわいそつかな……と思つた俺は、今日の夜限定でスリイナの執事もどきになつてやつた。

「ぐふっー。」

一つ目機体の名前のような奇声を上げて、俺は意識を覚醒させた。ホント、俺は朝、普通には起きれないようだ。

さてさて、今日は一体誰が俺の腹部を圧迫しているんだろうか？ ここんところ、このことを考えるのが朝の初めにすることになつてきているな。ま、いいんだけどな。そこそこ楽しいから。

どれ、推理の時間だ。

まず、ここはスリイナの家だ。なら、考えられる選択肢は三つだ。

一、普通にリール。

二、スリイナの家なんだからスリイナ。

三、ここでしか会えない迷惑親父。

さあ、どれだろう。

ま、重さから考えてリールの線は消滅だな。この重さだと……スリイナか？ でもスリイナよりも少し重いような気も……よし、スリイナは消そう。

じゃあ親父さん？ いや、疑問符はいらないはずだ。だって、もう親父さんしかいないじゃん！

そう結論づけた俺は、静かに肺を膨らませていきました。

「どけ親父いーっ！」

腹部を圧迫されながらも力強く叫んだ。

するとびっくりしたようで、親父さんと思われる人物は俺の上からすぐさま除いた。

さあ、するまでもないけど答え合わせだ。俺は目を開ける。

「……は？」

俺は思わず、意味が分からぬときには使ひ常套句を口にした。

答えがあもいっきり違ったからだ。親父さんでないのはもちろんのこと、リールでもスリイナでもなかつた。

じゃあ誰だと思う？

俺は目を開けた時、やられた！って思った。まさかこんなパター
ンもあるとはなあって関心した。ま、もったいぶらずに答えを発
表します。

答え

「おはよひざやります、ファーニッシュ様」

メイドさん、でした。

「こんなお遊びに付き合つてもらつてすいません」

他の仕事だつてあるだろ？ここんなく、だらないことにつき合つて
くれたメイドさんに対し、俺はお詫びを申し上げた。

「いえいえ、謝らないでください。楽しかつたですよ」

どんな人にも不快感を与えないだろ？完璧な笑みを浮かべながら、
メイドさんは丁寧に言葉を紡いでくれた。

「ホントにそうですか？」

「はい、とても。童心を思い出しました」

「でも、メイドさんの童心つて最近ことですよね？」

まだ確實に若い人だ。俺たちの何個か上ぐらいにしか見えない。

「まあ、お上手ですね」

「いや、それほどでも……」

後頭部を搔き搔きする俺を見て、メイドさんはクスッと笑つた。

「それでは仕事がありますので、私はこれで」

そう言つたのち、メイドさんは部屋を出て行つた。すると入れ違

うように、リールとスリイナと親父さんが部屋へと入つてきた。

「まったくなんなんだフィーニット君は？ うちのメイドにまで手

を出して。スリイナとリールちゃんは大切じゃないのかい？」

「何言つてんですか……。仕組んだのは三人でしょ？」

「ちえ、バレてた……」

リールが悔しそうにしていた。でもねえ、さすがにこれはねえ？

「まあまあリールちゃん、悔しがらないで。スリイナ、リールちゃ
んを朝食の席まで連れてつてあげなさい。食べれば悔しさなんてな

くなるや」

親父さんの言葉に、リールは「朝食食べるー！」と悔しそうだ。へやー。ほんと色気より食い気だな。ま、そこがいいんだが。あれなら自分、彼氏とかの心配はいらないだらうからな。

リールは上機嫌になつたご様子で、スリイナに連れられていった。どれどれ、俺も朝食を食べに行こう。そう思いながらベッドから降りて立ち上がると、

「ホントに……スリイナと結婚しないのかい？」

親父さんがいささか真剣に訊ねてきた。けど、真剣だからって返事は変わらない。

またか……と思ひながら、俺は返答する。

「しません。大体なんで俺なんですか？」

昨日から気になつっていたことをぶつけてみた。さて、どんな返事が返つてくるだろうか。

親父さんは散々「うーん……」と唸つたのち、

「そうだね……生き様が気に入ったから、かな。それにスリイナは君のこと……いやなんでもない。……これは本人が言わないとね」なんだ？ 最後が「こによ」として聞こえなかつたぞ。
ま、いいか。親父さんの理由は聞けたんだし。

でも、俺の生き様つて……。

父さんと母さんが死んで、妹を養うために殺しに手を……。いや、親父さんがこのことを知つてるわけがない。てか、知つてたら娘をやろうなんて考えるわけがない。通報してるはずだ。

俺は表向きには、何でも屋を営んで必死に頑張つてる少年で通つてゐる。

ま、こつちの生き様になら……そんな健気な少年にだつたら、娘をやろうって考へるかもしねいな。

……でもな親父さん。俺は全然健気なんかじやないんだ。

ただの人殺しなんだ。

朝食を食べ終わったあと、気がつくと俺たちは昼近くまで雑談してしまっていた。

なんて現代っ子らしくない過ごし方なんだ。俺たちは別にゲームをするわけでもなく、ただただしゃべっていた。

俺たちは、保育園に子供を送つていった際にたまたま仲のいい母親と出会いつてしまいそのままファミレスとかに寄つて昼近くまでついしゃべってしまった主婦か！

あらあらもうこんな時間。

この台詞を現実に使うタイミングが来るとは思わなかつたぜ。

てなわけで、

「あらあらもうこんな時間」

気持ちワル！ せめて自分風にアレンジすればよかつた！
しかし、リールもスリイナもその気持ち悪さよりも、自分たちがこんなに話していたことに対する驚きの方が強じようだ。

なので、俺の台詞には誰も突つ込みを入れなかつた。ふう、助かつた。

「じゃ、スリイナ。俺ら帰るわ

「え？ お昼食べていかないの？」

「ああ、いらん。いま思い出したんだけど、消費期限が迫つてきてる奴があつた気がするんだ。捨てるのもつたないしな。それを昼飯にしようと思う

確かにひき肉だつた気がする。野菜と一緒に炒めよつかな……。

「そつか。確かに無駄にするのはちょっとね。それにそういうのって、全部フリーが働いて得たお金で買つてるんだよね？」

「当たり前だろ」

他に誰かいいるか？ もしそんな慈悲深い方がおられたのなら、俺は人殺しになつていなかつただろうよ。

「じゃあそれを無駄にしないためにも帰つた方がいいかもね
「そうだ。だから今日は帰るよ。またなスリイナ」

「うん。またね」

「ううして、俺とリールはスリイナの家をあとにした。

スリイナの家から俺の家までは、ほんの一〇〇メートル程度。
徒歩にして一分から二分。

もう我が家に到着。

俺は家に入る前に、今日の依頼を確認するためにボックスの中身
を確かめる。 お、結構入ってんな。

俺はガサゴソと、それこそホントにくじ引きを引くかのように依
頼の書かれた用紙を中から取り出していく。……えーと何々、ボー
ル取り。……あいつら、野球できないとか言ってたけど結局やつた
んだな。そんで毎度の如く、あの家にボールを入れたわけだ。ま、
気が向いたら取つてやるよ。

……次は、えーと、蜂の巣駆除。 うわ来た！ 父さんが一番
イヤだつて言つてた仕事だ！ 俺つて初めてだけど大丈夫なのか
？ ……いや、でもあれだ、結局はなんでも初めてから始まるわけ
だからな。殺しだつてそうだつた。これを礎にしないとな
んで、次は一つと……宛名のない茶封筒？ なんだこれ？

俺は接着部分をビリリと破り、中を覗き見る。

三つ折りになつた普通の便箋が入つていたので、俺は取り出し広
げて読んでみて

「…………」

ただただ絶句した。

手紙の内容を紹介したいと思つ。

敬愛なるファニー・ナット・ストルス様へ
あなたのご活躍はお聞きしていますよ。なんでも、今までに殺した人数は一七人だそ

うで。いやはや、その若さでそれだけの人を殺しているのというのは大した精神力だ。

私には人を殺す度胸なんてものはないですからね。感服しますよ。そして、こうしてお手紙を書かせてもらつた理由は、その度胸を私のために使っていただきたいからです。

つまりは殺しの依頼をしたいのです。

その実力をぜひともお借りしたい。

早速ですが、このあとにお書きする人物を殺していただきたい。

スリイナ・フォシルニクス

報酬などに関しましては、ターゲットを殺したことを見認めたのち、改めてこちらより連絡させていただきます。

俺の頭はひたすらに真っ白だった。

敬愛なるフイーネット・ストルス様へ
あなたの「活躍はお聞きしていますよ。なんでも、今までに殺した人数は一七人だそ
うで。いやはや、その若さでそれだけの人を殺しているのというの
は大した精神力だ。

私には人を殺す度胸なんてものはないですからね。感服しますよ。
そして、こうしてお手紙を書かせてもらつた理由は、その度胸を
私のために使つていただきたいからです。

つまりは殺しの依頼をしたいのです。
その実力をぜひともお借りしたい。

早速ですが、このあとにお書きする人物を殺していただきたい。

スリイナ・フォシルニクス

報酬などに関しましては、ターゲットを殺したことと確認したの
ち、改めてこちらより連絡させていただきます。

そんな内容の手紙を見て絶句していた俺は、考える。

どういうことだ……？ スリイナを殺せ？ は？ なんでそんなことを……。てか、なんだこいつは……。俺は殺しの依頼を仲介人から紹介してもらつてるんだぞ。なのになんでこここの住所がバレてる？ 住所だけじゃない。名前も、殺した人数まで。しかもスリイナがターゲットってなんだよ！ 報酬は殺したあとに連絡？ ふざけんな！ 普通、殺す前に話し合つだろうが！ なんだこの手紙は！ 無視だ！ 連絡先もないなんてふざけすぎだ！

そうか、これはイタズラだ。

それなら合点がい　かないか……。なんでイタズラなのにこんな詳しい情報知つてんだよって話だな。

……じゃあホントなのか……？　スリイナを殺すのも？　全部？
ホント？　いやホントなわけがない。無視だ無視。でも、無視したらどうなるんだ？　この手紙の主に通報されるかもしれない。そしたらリールとはお別れ……いや、でも……無視だ。いやでも……ダメだ……一回考えるのやめよ……頑いてえ。

いまの今まで一緒だった奴のことを殺せとかいわれても、そんなの無理に決まってる。

俺はそんなに強くない。

ゾンビのような遅い足取りで、俺は家へ入った。

「フィー兄ちゃん、大丈夫、……」

俺はそれほど顔色が悪かったのか、リールが心配そうな表情で寄ってきた。

ダメだ。リールを心配させるよりじゃダメだ。俺は表情を無理やり笑顔に変えて、

「大丈夫だから心配すんな。待ってる。いまメシ作るからな」
けど、その笑顔があまりに無理やりすぎたのか、リールはかえつて心配そうになり、

「……フィー兄ちゃんは寝てて。私、自分でできることは自分でできるから」

「でも……」

俺は言葉を発しようとしたが、「いいからいいから」とリールに遮られる。おまけに力いっぱい背中を押され、俺は部屋まで強制連行された。

「寝ないとダメだからね」

リールは俺をベッドに押し倒したのち、部屋から出て行った。

ああ……これはちょっと、ホントにヤバイのかもな、俺。だって、リールを見てもまったく癒されなかつたんだ。そんなの俺じゃない。

なんだこの脱力感。いつもは依頼を頼まれたりしてもこんな風にはならない。むしろやる気があつたりするぐらいだ。

……思うに、名前がバレてる、住所もバレてる、殺した人数まで知られてる……そして ターゲットがスリイナ。

これらの要因にだいぶこたえたんだろうな、俺。

けど、なんかだいぶ客観的に見れるようになってきたんじゃないのか？ 俺。

よし、だつたらもう少し考えてみよう。

連絡先がないのはどうこうことだ？ やっぱり単純に知られたくないからか。

それに報酬の話し合いが後回しのはどういうつもりだ？ まだ金がないのか。だつたら依頼してくんないって話だ。そんな報酬の折り目もつけられない奴に構ってる暇はないんだ。

依頼の仕方が下手くそっていうか、意味が分からん。

……もしかして俺を脅してるのか？ スリイナを殺したくなればいうこと聞け！ みたいな？ いや、でもだつたらこんなことしなくても十分だよな。住所まで分かつて、おまけに殺し屋やってるつてことも分かつてるんなら、通報するぞ、とか言つて俺を直接脅せばいい。脅す材料が大量にあるんだから、わざわざスリイナを巻き込む意味はない。

……つてことは、どういうこと？ ああ分からん！ 目的が分からん！ 分からんつていうより、考えられる目的の数が多すぎて見当がつけられん！ ああ、どうすればいい？ ああっ！ さっきからこればっかりだな俺は！ でもしちゃうがないよな。どうすればいい、つて言いたいもんは言いたいんだ。

……ああ、どうすればいい？

……いつそのこと無視するつてのはどうだらう？ そうすればあっちからもう一回ぐらい接触があるかもしない。

うん、そうだ、そうしよう！ おお、なんかそう考えたら急に気が楽になってきたな！ よし起きるか！

リールに復活をアピールしないとな。

超短時間で復活を果たした俺は、階段をドタバタと駆け下りてリビングへ向かう。

「よっ！ もう大丈夫だ！」

俺は、さつきの俺より一〇〇倍は生氣があると思つ表情で声を発した。

「あ、ほんとだ！ いつものフイー兄ちゃんだ！ よかつたあ！」

リールの顔を見て、さらに元気が出てきた。

あんなことを忘れるためにはメシだメシ！ メシを作るぞ！

そうして張り切つて作ったひき肉と野菜の炒め物は、大変に美味

であった。

昼食ののち、時間は少し進んで夕暮れ。

素晴らしい色合いの空の下、俺はただただ謝っていた。

「ほんとすいませんでした！」

俺は頭を下げる。

「なんど言えれば分かるんだ！ ここで野球するなって叫んでおるだろ！」

浴衣とこう日本の衣服を着ているハゲ散らかしたおじさんガ怒鳴つてくる。近所のガキどものあいだでは、サンダーさんというあだ名で呼ばれている。

「すいませんすいません！」

とにかく謝るしかない。だって何でも屋だもの。いまは謝り倒すのが仕事だもの。それに今日の仕事はこれで終わりだし。グッと我慢だ。

はあ、今日やったことといえば、まず蜂の巣駆除。大変だったんだぞ。もうブンブンブン出てきやがつてさ。あの真っ白な防御スーツなかつたら死んでたね。だって、相手の蜂つていうのがズメバチだつたんだぞ？ 傑作だろ？ ま、最後は殺虫剤つていう聖なる力でそいつらを皆殺しにしたんだけどな。巣の入り口にスプレーを当てて、こづ、プシューってね！

「おい！ 人の話を聞いておるのか！」

「ちゃんと聞いてました！ 蜂のこと考えててすいません！」

「どっちだ！ いまワシがなんて言つていたかを言つてみろー！」

マジっすか？ やべえよ。なんて言つてたんだ？ えーと……

「今年のメジャーは熱いよなあ！ ですか？」

「なんで野球するなつて怒つてる時にメジャーの話が出てくるんじやボケエエエ！」

「すいませんすいません！」

違つたようだ。

このあと、俺はこの間違いのせいで『人の話といつものはだな!』という題名のお説教を一時間近く食らうハメになつた。

しかも、結局ボール返してくれなかつたし。

だから俺は、サンダーさんの家の隣の空き地で一時間近く待つていたガキどもにも謝るハメになつて、今日は最悪な形での仕事終了ということになつた。

ちなみにだが、今日は殺しの仕事はない。そんな毎度毎度殺してゐわけじゃない。あの忌々しい手紙にもあつたが、俺は殺し屋の仕事を始めてから一七人しか殺していない。

いや、『しか』じゃないな。『も』だな。普通の人は一人だつて殺さないもんな。

で、話を戻すけど、俺は一七人も殺してるわけだ。でも、この一七人を一七日連続で殺すとか、そんな無茶をしてるわけじゃない。この前がたまたま一日連続だつただけだ。俺も一日連續とか初めてだつたし。

俺が殺しを始めたのが九ヶ月近く前。多くても月に一人程度なんだ。

だから今月はもう、殺しの依頼なんてないはずだ。

あの手紙が……イタズラならな。

あーあ、あの手紙のこと考へないようにして一生懸命仕事してたけど、結局こうやって思い出しちまう。

でも俺は、とりあえず無視するつて決めた。何かしらのコンタクトがあつたりすれば話は変わるかもしれないが、いまはもう徹底的に無視だ。

そんなこと考へながら歩いてると、もう家だ。

ここから先に入るんなら、この考へは完璧に忘れないとな。リールには悟られちゃダメだ。不安を覚えさせたり、心配をかけちゃダメなんだ。

昼に見た、あの悲しそうなリールの顔に、もうさせちゃダメなん

だ。

「…………よしひ」

もう忘れた。考えない。俺は玄関のドアに手をかけて、ガチャつと開けた。

するとバタバタと音を立てて、可愛い可愛いお出迎えがやつてきた。

「フイー兄ちゃんおかえりーっ！」

「ただいま。いい子にしてたか？」

俺はサラサラヘアーの頭をなでてやる。

「そんな子供じゃないもん！」

口ではそう言つものの、実際は猫のよつよぢやれてくるコール。とてつもない癒しをくれる。そして、俺はその癒しを感じることができている。

ビューハヤンと忘れられているようだ。昼間と違うのは確実だ。「……よし、じゃあメシにすつか。すぐ作るからな」なでののを中断して、俺はリビングへ向かつ。……中断した時のリールの顔、可愛かつたなあ。

さて、何を作ろうか？ 確か野菜がまだ余つてたよな……また炒め物か？ いやそれはないなあ……。

「ねえ！ フイー兄ちゃん！」

献立を必死に思案していると、リールがいいことを思いついたと言わんばかりの表情を浮かべて声を張り上げた。

「なんだ？ リクエストがあるんならなんでも言ってみる」

「あのね、別に時間かかつてもいいから……久しぶりにフイー兄ちゃんが作るシチュー、食べたいな

「シチューか……」

俺の作れる料理の中で、一番高い完成度を誇るのがシチューだ。リールの口ぶりから察するに、味が恋しくなってきた、といったところだろうか。

時間がかかるから敬遠しがちだけど、リールがそう言つなら否定

する道理はないってもんだ。

野菜も一氣になくなるしな。

「分かった。じゃあシチューにしよう」

そうして約三時間かけて作ったシチューは、普通に美味かつた。リアルも美味しいと言つてくれたし、作ったかいがあつたつてもんだ。

さてさて、ちょっと早いけど、もう寝ようかな……。

今日はちょっと疲れた。思い出したくないからちょっととしか触れないけど、あの手紙のせいだ。どう考へてもあれしかない。くつ、内容が頭に思い浮かんでくる。

……じゃ、そういうことで俺は夢の中に逃避させてもう。平和な日常を願いながらな。

あの手紙が来てから今日で八日目。手紙のことにについて何かあつたかと聞かれると、なかつたと答えられる。

そう、俺たちは無事に一週間以上過ごすことができているんだ。今日だつてもう放課後。これから何か起ころとは思えない。

やつぱりいたずらだつたんだよ、あんな手紙。

そう思いながら、俺はスリイナと一緒に、いつものよつに校門でリールを待つている。

当たり前すぎて、言わなくとも分かつてると思うけど、俺はスリイナに手紙を見せてないし、そのことを言つてもいい。自分が狙われてるなんてことを知つたら、例え冗談でもショックを受けるだろうしな。

それに、あの手紙には一応真実も含まれてるわけだし。俺が何人殺したとかってさ。自分のことを知られないために、俺はあの手紙を誰にも見せちゃいないし、教えてもい。ギターケースと一緒に場所に隠してあるよ。

ほんとは切り刻んで捨ててしまえばいいのかもしれないけど、何となく持つてることにした。

と、戯言はここまでだ。

リールが来たからな。俺は大きく手を振る。

そんな俺に気づいたらしいリールも、大きく手を振り返してくれる。いいね、平和だ。

「フイー兄ちゃん、ただいまーっ！」

「おかえり、リール。今日はどうだつた？」

『今日ははどうだつた?』という、話題を一番簡単に生み出すことができる言葉を使い、俺は場を盛り上げていこうと頑張つてみる。

「えつとね、今日は普通だつたよーっ！」

わー、広げられなーい。

しかし、そこをどうにかしてこそ、話し上手への道は拓かれるのだ。

「普通つていつても何かはあつただろ？ 例えば……ほらー、ハンパーティはどうなつた？ 大流行してたんだけ？」

「ハンパーティ？ そんなのもう古いよ。フィー兄ちゃん遅れてるね！」

何！ ハンパーティはもう古いのか！ くそあ！ 僕が授業中に暇だからつて練習してたあの時間はなんだつたんだあ！ せつかくスピーディーはともかくリアルに書けるようになつたつていうのに！ だが、この怒りをリールにぶつけるのは間違つてる。間違い過ぎている。

ああ……子供の流行は進むのが早いなあ……。

「じゃあ、いまは一体何が流行つてるんだ？」

「いまはね、スカートめぐりが流行つてるんだよ」

「は？」

ちょっと何言つてるか分かんないですけど？

「スカートめぐりはスカートめぐりだよ。私もめぐられつちやつた」

「…………」

「ちょっとフィー！ 黙つてヒターンしないで！」

「放せスリイナ！ 男には、いや、兄にはやらなきゃいけない時があるんだ！」

妹のパンツを見られて、これが兄として黙つていられるかつてんだ！ 初等部の野郎どもオ……どうしてくれようかア。そうだなあ……まず閃光手榴弾で視界を奪つてから……。

と大量虐殺犯になろうとしている俺の気持ちを読んだのか、リールは、

「フィー兄ちゃん。女の子同士でだよ」

そう言つてきた。……ふむ、女の子同士でか……いやしかしなあ、男の俺はそれに納得できない。俺はきびすを返して言葉を発する。

「いや、でもなリール。男といつものほ、そつやつて女子がじゅれてるところをじゅべ、チラッと見ているものなんだ。だからきっと、お前のパンツは誰かしらに田撃されないと俺は思つた」

だよな？ 女子のじゅれあいつて目に入るよな？

「え？ そうなの？」

「はい……残念ですが……」

俺は、病気の進行状況が末期であると通告する医者のよひに言つた。

「……そつかあ。じゃあまた新しい流行考なきや。恥ずかしいもんね」

リールはあいに手を当てて、んーんーと唸り始めた。

「なんかその言い方だと、リールが全部流行らせてもみたいに聞こえるな」

「ん？ そうだよ。ハンパーティもスカートめくつも、全部私が流行らせたんだよ」

「な……っ…」

「、じゅりが話題の展開にすり苦労しているところのこ、リール

には流行を発信させるほどの力があるだとおー」

嫉妬心が湧き上がつてくるな。……でも、こことは素直にリールの情報操作能力を褒めるべきか？

……うん、褒めるべきだ。

「リールは凄いなあ！ ……といひで、スカートめくつせぢうやつて流行らせたんだ？」

男としては興味がある。

「えつとね、遊びで友達のスカートを私がめくつてたら、それが勝手に流行つていったんだよ」

なるほど。タネは分からんがそれで流行るのか。どれどれ

「白か！」

スリーナのスカートをめくつてみた。いやあ、パンツ見るのつて、いま思うと凄い簡単だよな。

「ちょ、ちょっとフイー！ なな、何してるの……っ！」

「いや、スカートめぐりがこれで流行るら」

「ちょっと君、指導室行こうか？」

突如、俺は後ろから両肩をがつちりと掴まれた。……え？

いまだきのロボットよりも力ク力クした動作で振り返ると そ
こには怖いと評判の生活指導の女教師がいた。

「え、あ、ちょっといまのは違うんで」

「何が違うか！ 見たぞ！ 君がスカートをめくるといふを！ さ
あ来なさい！」

俺は両肩に激痛を覚えながら引きずられる。

「す、スリイナ！ リール！ 助けてえーっ！」

そう叫ぶが、スリイナはスカートを押さえながら涙目。俺を助け
る気はなさそうだ。

リールに至っては…………俺を見て笑っていた。

俺は抵抗する力すらなくなり、生活指導の女史の毒牙にかかるこ
ととなる。

……ああ、酷い目にあつた。

少しばかり、生活指導室で行われたことを暴露したいと思つ。まず、俺は着ていた制服を着替えさせられた。ズボンをスカートに、だ。

そんでも、あとはただひたすらに生活指導の女史が『どうだ？ スカートをめぐられるのはイヤだろー!』と言しながら俺のスカートをめくつてくるという新手のSMプレイ。

それを一時間。

これつて訴えたら勝てるかな？ 勝てるよな？ 確実に勝訴だよね？

……でもさ、ちょっと楽しかったんだ。だから訴えはしない。

街灯の灯りと月のみが照らす薄暗い道を歩きながら、俺は何かに目覚めたことを確信した。

それより、今日は仕事ができなかつたな。

まあ、そんなに影響はないだろ?ナビ。一応、そう思つだけの自信が俺にはある。

だつて、自慢じゃないが、俺つていつもめちゃくちゃ頑張つてんだぞ？ あつちに行つてこつちに行つて、もう色々奔走してさあ。

だから、近所での評判はかなりよくなつてるんだ。ほら、そ

れを証拠にスリイナの親父さんが、俺にスリイナを嫁にうんぬんつて言つてただろ？ 生き様が気に入つたとかなんとかつてさ。

今日できなかつた仕事は明日にでも回せばいい。今日どうしてもやつて欲しかつた用事に関しても、謝ればきっと許してくれると想つ。う。

そのくらいの評価こな、なつてると想つ。

表の俺はな。

とかなんとか考へてゐるうちに家に到着。

さて、ボックスの中身を取り出しておかないとな。お、今日もまた結構入つ……マジかよ……。

俺は不安と絶望に襲われた。

なんでかは察してくれていると思うが……あれが……あの手紙がまた来てたんだよ。

宛名のない茶封筒がな。

のどに詰まるんじやないかと思うほどの量のつばを飲み込み、それから俺は接着部分を破つた。中を覗くと、また三つ折りの便箋が入つていた。

俺は取り出して広げ、仕事場の電気もつけずに月明かりを頼つて黙読。

……内容はこうだつた。

敬愛なるフイーネット・ストルス様へ

あれからだいぶ経ちましたが、いつこうにターゲットを殺そうとしてくれない。

これはどういうことでしょうか？

まさか、友達だから殺せないと、そんな生温いことを思つてい るわけじやないでしようね？ そんなことは認めませんよ？

なぜならあなたは、人を殺した。それも大勢。

それがどういうことが分かつていますか？ 分かりませんか？

いや、分かつていますよね？

人を殺すということ、それは、誰かの大切な人を奪うということです。

あなたが殺してきた人たちにだつて家族はいます。友人もいたで しょう。恋人もいたかもしません。

それなのに、あなたは自分の大切な知人がターゲットになつた途

端、人殺しをやめてしまつのですか？

それはおかしな話でしょ？

まったく筋が通つていません。自分を棚に上げ過ぎです。

残念ながら、あなたの踏み入れた世界はそんなに優しいものではありません。

仮にこの依頼を受け入れてくれないというのならば、別にそれで構いません。

けれどその場合、私は別の殺し屋にスリイナ・フォシルニクスを仕留めさせます。

それと、ここで勘違いしないでいただきたいことがあります。もしかするとあなたは、この依頼を、自分に対する嫌がらせ、という風に捉えてはいませんか？ もしそう思つている場合、それは完全な間違い、あなたの勘違いです。スリイナ・フォシルニクスを殺すことには、きちんとした意味があります。きちんとした目的がつてのことです。

ですので、こちらとしても早く動いてもらいたい。

もしかしたら連絡が取れないことに不安を覚えていたのではないかと思いましてので、今回は連絡先を載せておきました。

分からぬことがあればご連絡ください。

× × × × × × × ×

「ちつ……」

気付けば、俺は恵々しげに舌打ちをしていた。

敬愛なるフイーネット・ストルス様へ
あれからだいぶ経ちましたが、いつこうにターゲットを殺そうと
してくれない。

どういうことでしょうか？

まさか、友達だから殺せないと、そんな生温いことを思つてい
るわけじゃないでしょうね？ そんなことは認めませんよ？
なぜならあなたは、人を殺した。それも大勢。
それはどういうことですか？

分かりませんか？ いえ、分かりますよね？

人を殺す。それは、誰かの大切な人を奪つたということです。
あなたが殺してきた人たちにだつて家族はいます。友人もいたで
しょう。恋人もいたかもしません。

それなのに、あなたは自分の大切な知人がターゲットになつた途
端、人殺しをやめてしまうのですか？

それはおかしな話でしょう？

まったく筋が通つていません。自分を棚に上げ過ぎです。残念な
がら、あなたの踏み入れた世界はそんなに優しいものではありませ
ん。

仮にこの依頼を受け入れてくれないというのならば、別にそれで
も構いません。

けれどその場合、私は別の者にターゲットを仕留めさせます。

それと、ここで勘違いしないでいただきたいことがあります。も
しかするとあなたは、この依頼を自分に対する嫌がらせと捉えては
いませんか？ もしそう思つている場合、それは完全な間違い、あ
なたの勘違いです。

スリイナ・フォシルークスを殺すことには意味があります。きち
んとした目的あってのことです。

ですでの、こちらとしても早く動いてもらいたい。

もしかしたら連絡が取れないことに不安を覚えていたのではないか

と思いましたので、今回は連絡先を載せておきました。

分からぬことがあればご連絡ください。

× × × × × × × ×

「ちつ……」

気付けば、俺は忌々しげに舌打ちをしていた。

内容から察するに、この依頼は、どうやら本物らしい……。

俺もスリイナも相当調べ上げられてるな……。友人関係とかまで

知られてるんだからな。

くそつ……しかも中身が正論過ぎて反吐が出るな。

人を殺す＝誰かの大切な人を奪う？

まったくもつてその通りだ。

そして俺は、前々からそれを理解していた。

俺は理解した上で、人を殺していた。

ターゲットだつて誰かにとつては大切な人なんだと、それを承知した上で、俺は人を殺していたんだ。

……そんなの知るかつて感じでな。

でも俺は、その感情をスリイナに向けられるだろうか？

『幼なじみ？ そんなの知るか！』 って感じにスリイナを殺せるだらうか？

はつきり言って、無理だと思つ。

だつて、スリイナは俺の大切な……何かだから。

手紙に書いてある『自分を棚に上げ過ぎ』 っていうのは、そういうことだろう。

散々人を刺し殺して撃ち殺してきたくせに、俺はスリイナがター

ゲットになつた途端、迷い始める。

「くそっ！ なんでスリイナを狙うんだよ。」

確かにスリイナはお嬢様だし、狙われる理由としては……まあ、それで十分？ なのかもしれない。

そういうや、手紙には『きちんとした目的がある』って書いてあつたけど、一体どんな目的なんだよ。

……あ、そうだ、連絡してみよう。その目的って奴がなんなのかを知るために。あと、どんな奴が依頼相手なのかも知つておきたいしな。

よし、一度連絡するぞ。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターの引き出しからボイスチャージャーを取り出す。携帯に取りつけ、手紙に載つている番号に電話をかける。

呼び出し音が数回鳴り、プツッと音がしたあとに、

『はい、もしもし』

ボイスチャージャーで変えられた、不快極まりない声が俺の耳に入ってきた。

「……アンタが依頼人か？」

「ひらも低く変えた声で応対する。

『おや、もしかしてフィーニット・ストルスかい？』

愉快そうな口調。依頼人特有の上から目線な感じがにじみ出いでてホントに不愉快だ。

「……そうだ」

『これはこれは。話せてとても嬉しいよ』

「そりゃどうも』

『それで用件はなんだろう？』「ひらは忙しいんだけビ

『じゃあさつさと黙つてやるよ！ なんでスリイナを狙うんだ！』

『……そんなことか。でもおかしいな？ この番号にかけてくるつことは、君、手紙読んだんだよね？ 理由ならそれに』

「あんなもんで納得できるか！ なんだ目的つて！ 言つてみろー』

『目的を聞いて君はどうする?』

電話の主は即答してきて、

「そ、それは……」

俺は言葉が詰まつた。……確かに、俺はそれを聞いてどうするつもりなんだ……?

『あはははは、理由も考えてないのかい? ジャあ逆に訊ねよう! 君は納得した理由を言えば、それで迷いなく、スリイナ・フォシルニクスを殺してくれるのかい?』

「それは……」

『イヤかい? それでも構わないよ別に。でも、スリイナ・フォシリニクスは必ず死ぬよ。手紙呼んだんだよね? なら分かつてはすだ。私は新たな殺し屋を雇う。ただそれだけ』

『そうだ……俺が拒否しても意味はないんだ。スリイナは俺に代わる新たな殺し屋に、どのみち殺される。

……だったら、俺が殺すか? デウセ殺されるのなら、俺が……。『んー、黙つてちやよく分からないな。それとも、もう交渉決裂ってことでいいのかな? ジャあ新しい殺し屋に依頼することにするよ。じゃ、切……』

「待てっ! 一つだけ聞かせろ!」

『ん、なんだい?』

『その、スリイナを殺す計画は……もう、止められないのか? 変えられないのか?』

『残念ながら無理。私の計画は、彼女を殺すことと円滑に進んでいくように組まれている。その変更はいまさらできないよ』

……じゃ、じゃあ、どう足搔いてもスリイナは……。

「ほ、ホント!……ホントに無理なのか!」

『しつこじよ。無理つたら無理だ。もういい? 決裂つてことで切るよ?』

「ま、待て! 分かった!」

『ん?』

スリーナが殺される未来、それがもう、回避不可能だつてい
うのなら、だつたら俺が……俺が……俺が、俺が、俺が、
俺が俺が俺が俺が俺が

「俺が、スリイナを……殺す」

『へえ～。どういつた心変わりだい？』

「他の奴に殺されるぐらいなら、せめて、せめて俺の手で

『お、おのれー！ おおうー！ 私のおかげの氣持がねえ

つてくれたようだね。のために君を選んだんだよ?』

「そ、な、の、か、?」

「……うたよ、スリイナ・フオシル二クスの周辺を調べてたら、君
という殺し屋が出てきて、それなら君に殺してもらおうと思つてね
『そつか……じゃあ感謝する。俺の……俺の手で、スリイナを殺せ
るんだからな』

「そうなんよが！ たしかにそくだけと今田が明日はでアリしてくれるかな？ そうしてもうえると大変助かるんだけど？」

二〇一〇年六月

『じゃあ交渉成立だ。それじゃ、あとはよろしくね』
そこで電話は切れた。あとには、ツー、ツー、ツーと一定のリズムが残っているだけ。

1

……俺は、間違つてないよな？ 放つておいても殺されるのなら
……それなら俺が手を下す。これは間違つてないよな？

ああ、間違つてないさ。

お前、じつはいち側なのか？

そういうやうだな。

ま、間違つてないことを証明するための話でも聞いてくれよ。これが例えば、まったく人なんか殺したことありませんって奴への依頼なら、警察に相談すべきだ。いや、そもそも殺し屋でもない奴にこんな依頼は来ない。つまり、この依頼は俺が殺し屋だからこそ来た。そりゃう?

ああ。

で、考へてもみる。俺はもう一七人も殺してゐるんだ。なら、これから何人殺そうとそんなに変わらないだろ?

ああ。

なら、どうせ殺される奴を、どうせ殺されるらしい自分の友達を どうせ殺されるらしいスリイナを、俺の手で殺す。これは俺のみに与えられた特権だとは思わないか? 俺が殺し屋だからこそ、この依頼が舞い込んだ! そして殺し屋だからこそ、何人も人を殺しているからこそ、いまさら何人殺したかなんて気にする必要はない! さらにはどのみち殺されるというオプションつき。だからためらいも、いつもよりは少なくて済むんじゃないか?

そうかもな……。

かも、じゃない。そんなんだよ。友達の最期を見とれるんだいい仕事だろ? 他人に殺されたのなら納得できなくとも、これら自分の望む殺し方ができる。あいつを、スリイナを楽に死なせてやろうぜ。他の殺し屋なら銃や刃物で殺すかもしれない。けど、俺たちなら友達だからギリギリまで近づけるだろ? 飲み物に睡眠薬でも大量に入れて飲ませてやれ。そして首を絞めろ。そうすれば痛みも何も感じないさ。ほら、間違つてない。苦しんで死ぬはずの友を楽に殺してやる。これほど立派な理由はないぜ?

…… そう、だな。

なんだ? まだ迷つてゐるのか? いい加減決めろよ。どうせ殺されるんだつていつてるだろ? いいのか? 他の奴に残忍な殺され方されても?

ダメだ……俺が楽に……。

「 だろ？ だつたらもう迷うな。殺すんだ。スリイナを。

ああ……。

「 楽な方法で。苦しみのない方法で。何より、俺の手でな。

ああ、そうだな……。

「 どうだ？ だいぶ気は楽になつたか？

ああ、だいぶな。

「 ジャ、まず家に入ろうぜ。リールを安心させてやらないとな。
だな。外は結構暗かつたんだもんな。

俺は携帯からボイスエンジヤーを外し、それから家に入る。

「 ただいま」

「 呟いてリビングへ向かう。

すると、リールは机に突つ伏して寝ていた。

寝ているのを起こすのはかわいそうだが、腹も減つてゐるだろうし、
俺は起こすことにして。

「 リール、リール、帰つたぞ」

俺はリールの肩に手を置いて、体を揺すつてやつた。

「 あ……フイー兄ちゃん。おかげり……」

目を『じご』しこすりながら、リールが口を開いた。

「 ただいま。すぐ夕食作るからな」

「 ……うん」

その後、俺は夕食作りを開始した。脳のほとんどを、どうせつて
スリイナを殺そつかと考へることに使いながら。

そのため、夕食は凄く適当に作ったのだが、なぜかそれなりに美
味しかつた。

ただ、一口目以外は味を感じなかつた気がしたけど。

夕食後。自分の部屋に戻った俺は、夕食を作っている時に考えていた、スリイナの殺し方を反芻し始める。

睡眠薬で眠らせて、首を絞める。

電話のあとにもこのアイデアが出たけど、やっぱりこれが一番楽に死なせられる方法だと俺は思う。だから、殺し方に關してはこれでいいだろう。

問題は、いつどこで殺すか、だ。

電話の主は今日が明日に殺せと言っていた。時間に直せばあと二〇時間もない。

……殺すなら朝よりも昼よりも、やっぱり夜だ。じゃあいまから殺しにいくか？ でもどうやって？ どうやってスリイナの家に入る？ いや、入るのは簡単だ。きっと表から行けば普通に入れてくれるだろう。

けど、それじゃダメだ。そのあとにスリイナが死んでいたら、俺が真っ先に犯人候補に挙がってしまう。だから、決して誰にも気づかれずに、スリイナの部屋に侵入する必要がある。

……でもそんなこと、できるのか？ スリイナの家には警備があるんだぞ？ 隙をつくことなんてできるのか？

……たぶん無理だろうな。俺は忍者でもなければスペイでもない。凄い身体能力なんてありやしない。こいつ侵入なんてできるはずがない。じゃあどうする……？

……いや、そこまで悩む必要もないな。だって、俺は普通の殺し屋にはできない方法を実行することができるじゃないか。

スリイナに協力してもらうんだ。ターゲットに手伝つてもらおうなんて発想、思いついたとしても普通はできない。でも、俺にはできる。何も知らないスリイナを利用することが、俺にはできる。スリイナに警備を薄くできないかとか、もしくは誰にも気づかれ

ないうに入れてくれないかとか、そつやつて頼んでみればいいんだ。

そうと決まれば電話電話ひとつ。

俺は携帯を取り出し、スリイナの番号にかけようとして手を止めた。

「何やつてんだ、俺。……ホントにそれでいいのか？ スリイナが死んで、ホントにそれでいいのか？ いや、いいわけない、いいわけがない。……でも、足搔いても意味がない。どうせスリイナは殺されるんだ。だつたら俺が殺そう。そう決めただろ。だから、これでいいんだ。もう、何も余計ことは考えるな。殺す、殺すんだ。殺し屋としての仕事を全うするために。そして、スリイナを楽に死なせてやるために。

他の奴の手にかかる前に俺が、俺が楽に殺してやるんだ……。

俺は手の動きを再開させる。耳に携帯を当てれば、呼び出し音が聞こえた。……呼び出し音つて、こんなに寂しい音だつたか？

そう思つていると、プツッと音がして、

『もしもし、フイー』

いつものおつとりしたスリイナの声が聞こえてきた。

それを聞いて、なぜか俺は泣きそうになつた。……ダメだダメだ、平静を装うんだ。

「よ、よお、スリイナ……。いま、大丈夫か？」

『大丈夫だよ。それでフイー、どうしたの？ フイーから電話してくれるつていうのも珍しいよね』

楽しげに紡がれる言葉を聞くと、やはり顔の筋肉がぴくぴくと震えてくる。きっといま声を出せば、情けなく震えると思ひ。

『……』

だから言葉を発することができない。それどころか涙が出る始末だ。

くそつ……俺にはやつぱり、無理か……？ 殺せないのか……？ でも俺が殺さないと、スリイナは別の誰かに、容赦なく……殺さ

れる。それは……刃で切り裂かれるのかもしれない、銃で撃ち抜かれるのかもしれない、紐でぐびられるのかもしれない、拳で殴り飛ばされるのかもしれない、薬でのたうち回されるのかもしれない。とにかく、何かに苦しむことになるのは確実だなつ……。

……そり、だから、だからこそ、俺が楽に殺してやるんだ。

『フイー？ どうしたの？ 黙つちやつて？』

俺は袖で涙を拭い払う。……もう泣かない、迷わない。

「ああ、悪いな。それでさ、このあと……もうちよつと夜遅くに、会えたりするか？」

『フイー、泣いてるの？』

……妙に鋭いな。やつぱりずつと一緒にだからか、ちょっとした声の違いが分かるのかもな……。俺としては、もう大丈夫なつもりで声を出したんだけど……。

「ああ？ 泣いてるわけないだろ。で、どうなんだ？ 念えるのか？」

悟りられるわけにはいかないので、俺はやや強めな態度で接した。

『……あ、会えるけど。どうしたの急に？』

「……何、ちよつとな。それで会つに当たつて、少し頼みがあるんだけど……」

『何？』

「俺がお前の家に行くつてことは……誰にも言わないでくれ。あと、俺をこつそり、誰にも氣づかれないように中に入れて欲しい」

『え？ なんで？』

お前を殺すためだ、なんて言えるわけがなく、

「……なんでもだ。それより、ダメなのか？ 無理なのか？」

『んー、ダメでも無理でもないけど……ほんとにどうしたの？ フイー、なんか変だよ？』

「別に変じゃねえよ……」

『変だよ。なんで急に会おうなんて言ひ出すの？』

……しつこいな。

「とにかく会いたいからだよ……それ以外に理由なんかない……」

「あ……怒鳴つちまつたよ……。これじゃあ電話をブツッと切られ

て話がなかつたことになるかもしんないぞ……。

しかし、俺のそんな不安をよそにスリイナは、

『……分かつた。いいよ。じゃあね……一時頃にうちの裏に来て
くれる？ そのタイミングじゃないと誰にも気づかれずに入るのは
難しいから』

と、至つて普通に言葉を返してくれた。どことなく嬉しそうに聞
こえたのは気のせいだらうか？ ……いや、そんなのどうだつてい
い。とにかく中に入れることになつたんだから、それでいいんだ。

「分かつた……ありがとな

『ううん。じゃあ切るね』

「ああ

そうして電話は切れた。俺は携帯の液晶をぼんやりと眺める。

これでホントによかつたのか？ とまたそんな疑問を抱きながら
迷い始めてしまう。

だから俺は、頸椎がズれるんじゃないかと思えるほどおもひつ
きり首を振った。

迷いを振り払つたのに。

自分の思ひは正しいんだと、やう思ふに込むために。

俺はいま、最終準備を行つてゐる。といつてもする「こと」は一つしかなく、俺はその作業に真剣に取り組んでいるところだ。

その作業つていうのは、睡眠薬を水に溶かして、それを買つてきたミネラルウォーターのペットボトル容器に注射器で大量に注入、といつものだ。

このミネラルウォーターを飲めば、恐らく誰でも昏睡状態になると思う。

あとは……これをスリイナに飲ませて、それから首を絞めれば……樂に逝けるはずだ。

注入作業が終わり、俺は劇薬と化した水をカバンに詰め込む。時計を見れば午後一〇時五〇分。スリイナが言つてた時間まであと少しだ。

なので、俺は出発しようと思つ。

……ホントに、これでいいんだよな？

そんな自問に頷きながら、俺は部屋を出る。リールを起こさないよう細心の注意を払い、俺は階段を下りていく。

……俺は、間違つてないよな？

その問いにも、俺は自分で頷いた。

結局、俺は迷いを捨てられないでいる。だから、殺すための準備や行動することによって、気持ちを無理やり割り切らせていた。あと、さつきから自問しては頷いて自問しては頷いてを繰り返して、自分は正しいんだと思い込ませている。

……俺がやらなくても、スリイナはどのみち誰かに殺されるんだ。なら、俺の手で殺してやるんだ。せめて苦しまないよな。」「その通りだ……」

眩しながら、俺は外に出る。微風が俺の髪を揺らした。

雲に隠れたり出てきたりを繰り返している月に照らされた、誰も歩いていない住宅街の歩道。そこを一〇〇メートルほど歩くと、立派なお屋敷があった。

何百回、何千回と、数え切れないほど見てきたスリイナの家だ。しかし当然表には向かわず、スリイナが電話で言つていたとおりに裏へと回る。

するとそこには、寝巻きではなく白のワンピース姿のスリイナが立っていた。

……綺麗だな。

いつもはそんな風に思わないのに、いまはなぜかそう思う。

俺が見とれて突つ立つていると、スリイナは慌てたように近づいてきて、

「早く入つて。このチャンスしかないから」

少し焦つたように言った。

俺はそれに頷き、スリイナに続く形でお屋敷の中へ踏み入る。

なんでも、いまの時間は警備やらなんやらの交代時間らしく、少しのあいだだけ屋敷の周りが無防備になるらしい。住んでる人にしか分からぬ情報だな。

おかげで、なんなくスリイナの部屋に到着することに成功。スリイナの部屋はふわっとした甘い匂いがしてて、不思議と落ち着く感じだ。……そういえば、スリイナの部屋に入ったのはいつ以来だろ？

そんなことを考えていで、ふと本来の目的を思い出す。

何考えてんだ、俺は。これからスリイナを……田の前にいるスリイナを……い、殺すんだろ……。

俺はそう思考を働かせながら、スリイナに田を向ける。

「何？」と言わんばかりに可愛らしく小首を傾げるスリイナ。

その柔らかで穏やかな表情を見た瞬間 つうと、頬に涙が走った。絶対そんな表情を見せてはいけなかつたのに、勝手に涙が出てきた。

こきなり泣き始めた俺に、スリイナは困惑しているようだ。

「ど、どうしたの？ フィー？」

それでも、心配して声をかけてくれるスリイナ。

けど、やう声をかけられればかけられるほど、涙があふれてくる。止められないし、止まらない。

本人を目の前にして、俺の思いは揺れに揺れていた。

一体どうすればいいんだ……殺さないといけないのか？ どうすればスリイナのためになるんだ？ 放つておくのが一番か？ 俺が殺すのが一番か？ ……ああ、分からん……。

「フィー……どうしたの？ ほんとにどうしたの？ ねえ、フィーつてばあ……」

心優しいスリイナは、俺の涙を見てもらい泣きを始めた。

お、お前は泣くなよ……。俺は、お前を殺すか殺さないかで悩みに悩んでおかしくなつたあげくの果てに泣いてんだぞ？ お前が同情していい話題じゃないつーの。

ああくそつ……俺は、ここで何をすればいいんだよ……。

「どうすりゃあ……いい、んだよ……」

答えが返つてくるわけがないことなど承知した上で、俺は震える声で唸るように言った。

それにスリイナが反応したが、嗚咽交じりの言葉だつたこともあつてか、よく聞き取れなかつたらしい。ナビ、聞き取れなかつたらじこそこ、スリイナは俺に近寄つて来て、

「……フィー、何か困つたことでも、あつたの？ 私にできることなら、なんでもするよ?」

だとひ。

俺の目からは、やらに涙が出てきた。……なんでこんなにいい奴を、殺さなくちゃ いけないんだ？

自問するよつて言葉を思い浮かべると、アイツが言葉を返していく。

それはさ、俺が殺さないと、スリイナが他の奴に殺されるからだ。

さつきも言ったろ？ 僕が楽に殺してやるんだって。他の奴に任せたら、九九パーの確率で痛みを伴うぞ。

……なんだよな。

そりなんだよ。だから早く飲ませろ。俺のしていることは間違っちゃいない。スリイナだって知らない奴に殺されるよりだつたら、俺に殺された方がいいに決まってる。

……だよな。俺が手を下してやることこそが、スリイナへのせめてもの手向けなんだよな。

だから、さつきからそつだつて言つてんだろうが。ほら、分かつたら水を取り出せ。そんで飲ませや。

お、おう……。

俺は涙と鼻水を袖で拭い、クリアになつた視界でカバンを捉えた。そうして、中に入つているペットボトルを取り出す。

「……あのさ、俺はなんでもないんだ。ただな、さつきまで見てた映画のラストシーンがあまりに感動的でな。それで思い出し泣きをしてただけなんだ」

とんでもない大嘘。しかし、疑うことなど知らないスリイナは、「今度、その映画のこと詳しく教えてね……」と調子の狂つことを言い出す始末。

俺はそんな雰囲気に流されないように、手に持つペットボトルを見た。この水の意味を再確認して、俺は非情になりきる。

「あのさ、これスリイナにやるよ。泣いたし、のど渇いたろ？」

「フリーだつて号泣してたよ？ それにフリーが持ってきたんだから、フリーが先に飲むべきだよ」

ええい、その心遣いがこんな場面で厄介さを發揮するとは……。

「……いや、俺はいいんだ。スリイナが先に飲んでくれ。じゃないと、俺なんかと間接キスしたことなるぞ？」

「い、いいよつ！」

「なんでやねん！」

「あ、えと、その、ち、違うの！ あーのど渴いたなー。フリー

一、それもいらぬ?

スリイナは狼狽しながら、俺の手からペットボトルを奪つた。

ああくそつ、なんなんだよ……ホント、調子狂うわあ

いやまあでもへ、日本へ

「あ、あのセフィー。……じゃあこれ、ありがたく先に飲ませても

「お」

……おお」「そんなのを渡してお札をもらおるか。

けど……俺はお礼を言われてもいいよな？ だつてさ、スリイナ

は俺に殺されるんだぞ？ これから先に待ち受ける未来の中で

一番マジな死は方かであるんだぞ？

スリイナにどうしての「いい」とをしてやるんだから。

まほまほ。やあ、ここことだ。もうだよ。ここことだよ――

知らない奴は殺されるよ」たゞなら何儀サクシだN...
くい、あせが、あせがせり、あせがせぬやせぬやせぬ

卷之三

卷之三

スリルガはヘッドホンのイヤー
俺はそれを見て 笑つて。。。

でもそんな俺を、スリイナは不

『フリーが元気になつてくれてよかつた』とでも思つてゐんだろう

そして、スリイナはフタを念り取つたのぢ

をつける。

ペットボトルをはたき落とした。

それを見た俺は

……やっぱり、俺には無理だ。スリイナを殺せない。

床にミニネラルウォーターがトクトクとこぼれていたので、俺はそれを急いで拾う。

「ふい、フイー……？」

スリイナはただただ呆然とした感じで、俺の挙動不審さを見ていた。

「……ごめん。帰るわ」

そう告げたのち、俺は返事も待たずに入り口の部屋を出た。廊下に出た俺は、窓の外を見やる。眼前に広がる通りには、未だ警備がない様子。

なので、俺は窓枠に手をかけて、一気に外へと飛び出した。

こうして、誰にも気づかることなく、俺の殺人行為は未遂に終わった。

「あ……」

家に帰り、自分の部屋に閉じこもるつとした俺は見た。リールの部屋のドアがちょっとだけ開いている光景を。

そんな不自然なモノを見て俺は、最後に人を殺した日のことを思い出していた。

あの日、俺が仕事から帰つてくると、いまと同じようにドアがちょっとだけ開いていた。不審に思つて中を覗けば、トイレに起きたら俺がいなくて……とリールが泣いていた。

もしかしたら、いまもそうなつてゐんじゃないか？ 俺はそう考えて、リールの部屋まで駆ける。

「リール、ごめんな。いま帰つたぞ……って、いない……？」

部屋を覗いてもリールはいなかつた。……トイレかな？

ちょっと心配なつた俺は、一階にあるトイレへ向かう。しかし、トイレの電気は点いておらず、開けてみても誰もいない。……夜食でも食つてるのかな？

電気の点いていないリビングを見て、俺は望みの薄いことを考えていた。

一応リビングを覗いてみるも、冷蔵庫を漁るリールなんて、当たり前のようにな存在してはいなかつた。……あれ？ ジャアリールは？

あ、もしかして俺の部屋？

俺は階段をドタバタと駆け上がり、自分の部屋へ飛び込んだ。けど、やつぱりリールはいなかつた。

徐々に不安が襲いかかつてくる中、俺は自分の机の上に何かが置いてあることに気づいた。なんだろう？ と思いながら近づいて俺は目を見開く。

机に乗つっていたのは、ただのメモ帳の切れ端。だがそこに

『妹さんは預かつた』

シンプルにそんな文字が書かれていた。

俺の頭の中に、最悪のシナリオが思い浮かぶ。

くそつ！ アイツツツツ

！

俺は神速で携帯を取り出し、例の番号に電話をかけた。

『はい、も』

『どういうつもりだつ！ なんでリールに手を出したつ！』

『これはこれは。ボイスチェンジャーもつけずに随分とじ立腹のよ

う

『ふざけんなつ！ ちやんと答えるつー』

『はて？ なんのこと』

『ふざけんなつて言つてんだろうがつ！ リールはどこだあつ！』

『……やれやれ、「ふざけんな」といつその言葉、そつくりそのまま君に返させてもらひつよ』

『どうしうことだ！』

『だつて君、なんでスリイナ・フォシルニクスを殺さなかつたの？』

『…………つ！』

『はは、驚いたかい？ 私は君を監視してゐるんだよ。まあ、こんな無駄話はさておいて。君はなんで彼女を殺さなかつたのかな？』

『…………それは…………』

『それは『友達だから』かい？ はつ、笑わせないでくれ。君はそういうことを言つてはいけない立場の人間なんだ。そうだろう？

人殺し』

『う、うるさいいつ！ だからつてなんでリールを巻き込んだつ！ リールは何も関係ないだろつ！』

『そう、関係ない。そして、だから巻き込んだ。私は気が変わった。どうしても君に、スリイナ・フォシルニクスを殺して欲しくなつた』

『…………だから、リールが人質か？』

『「」答。返して欲しいだろ？ だつたら彼女を殺してくれ。タイ

ムリミットは、そうだねえ……明日の午後——頃なんてどうかな？ ちょうど一日つてところだね。それまでにスリイナ・フォシル二

クスを殺すんだ。さもないと……』

「……さ、さもないと？」

『妹さん 死ぬよ』

「や……やめろっ……やめてくれっ やめてくれえっ！ 頼む！ なんでもする！ なんでもするから、だから、それだけは絶対にやめてくれえーっ！」

『あはははははっ！ 妹さんを人質に取るだけで、君、そこまでパニックになるのかい？』

「頼むよ……リールだけは……リールだけはやめてくれ！ お願ひだから……』

『まあまあ、少し冷静になりなよ。だからさ、スリイナ・フォシル二クスを殺せばいいんだって。ね？ 簡単でしょ？』

「……あ、ああ、そうだったな。そ、そうすればリールは……』

『元気な姿で君のところに返そう。約束するよ』

「……ぜ、絶対だぞ！ 絶対にだぞっ！」

『ああ絶対だ。約束しよう。じゃ、そういうことで頼んだよ そこで電話は一方的に切られた。

「…………くそ つ！」

リールを巻き込んでしまった。

絶対やつてはいけないことを。

この世界に……裏世界に入る時に決めたルールを、破つてしまつた。

でも、まだ助けられる。スリイナを殺せばいいんだ。それでリールは助かるんだ。

けど、スリイナを殺す、のか……。

もういい！ スリイナはどうせ殺されてしまう運命なんだ！

その役が俺に決まつただけだ！

俺は……あいつのためなら……妹のためなら……コールのためなら

ら

“こまでも墮ちるつて決めただろう！

殺す。俺はスリイナを殺す。もう殺す。決めた。絶対に殺す。

……だけど、今日はもう無理だな。

スリイナの家の警備は万全になつただろうからな。……さて、じ
やあどうする？ どう殺す？

……いや、俺はバカか。ははは、よく考える。スリイナは明日の
朝にのこないと俺の家にやつてくるじゃないか。

朝食を作りにな。

……でも、せつせあんなことがあつたから来ないかもしれない…

…いや、スリイナは優しい。だから明日だつて絶対に来る。

そして、のこのことやつてきたスリイナを殺せば……リールが返
つてくる…

ふつ、ふふふ、ふはは、あははははははははははは
ははははははははははははははははははははは
ははははははははははははははははははははは

完璧！ 完璧だ！

さてさて、今日は寝ようか。

のんびりしてたつて、相手は自分からやつてくるんだからな！

ひはははははは！

「ぐつ……」

俺は腹部に圧迫を感じた。

「朝か？ つたぐ、たまには普通に起こして欲しいもんだ。もう

う、リールはしじうがな……。

そこで俺は現実を思い出した。

「リールはいない。さらわれたんだった。

じゃあ、この圧迫はスリイナか？

予想を立ててから、俺は目を開ける。

「フィー、おはよ

案の定、スリイナだった。穏やかな目を細めて俺を見つめるその姿は、昨日のことなどまるで気にしていないかのようなふるまいだ。

「……」

俺はそれを見て思う。

殺す、と。

昨日の夜に決意したあの感情は、時間が経つとなぜか静まる怒りのように消えてしまつてはいなかつた。

リールは……リールはスリイナを殺さないと殺されてしまつ。だから卑いとこ、スリイナを殺さないと……。

「フィー、そういうえばリールちゃんは？」

「え？ あ、それは……」

さりわれた、なんて事実を言つわけにいかないし、えつと……

「……友達の家に泊まりに行つてんだよ。珍しいだろ？」

「あー、だから昨日私に泣きついて来たんじゃないの？ 映画とか、ほんとは嘘だつたりして？」

「べ、別に嘘じゃ……」

「いいのいいの。気にしないで。そういう時に私を頼ってくれるつて嬉しいから……なんてね。朝食はもうできるから、冷めちゃわ

なこちに下りてきてね

そう言い残して、スリイナは部屋から出て行つた。

……ああ、調子狂うな。これから殺すつてのこ……っ！

俺は頭を振り乱して、甘い考えを振り払う。

非情になれ、非情になりきるんだ。

電話の野郎はどうしても俺にスリイナを始末させたいらしい。だからリールを人質に取つた。もうスリイナを殺すことは回避できまいことになつたんだ。

もし仮に、ほんともしもの話だけど……俺がリールを見捨ててスリイナを殺さなかつたとして、あの電話野郎はどうしてくれる？ スリイナを殺す計画を止めるか？

いいや、答えはどう考へても 止めないだ。

あいつは、俺への嫌がらせでこんなことをしているんじゃなくて目的があつてやつていると、手紙に書いていたし、電話で本人も言つていた。

ということはだ、リールを見捨ててスリイナの命を助けたところで、スリイナの命の危機は去つていかないといふことだ。それどころか、むしろ俺ごと始末されるかも知れない。

そうなつたら、俺とリールは無駄死にだ。

けど、そんな悲惨な未来を、スリイナを殺すことで確実に回避できるんだ。

なら、スリイナを殺すべきだ。どのみち殺される命一つで、それだけでリールが救えるというのなら、ためらつ必要がまったくない。リールのためを思えば、そんなの安い取引じゃないか。

俺はいま考えていたことを何度も何度も反芻して、自分に言い聞かせる。

自分を正当化するために。 いや、正当化じゃない。これが最初から正しい。これが正解なんだ。

……よし、覚悟は決めた。

あとは、どう殺すかだ。

リビングに行けば、朝食……か。なら、睡眠薬を使う手が一番か。やつぱり、なるべく楽に殺してやりたい。

いや、でも待て！ いまここで殺すのはダメだ……。このあとは学校がある。スリイナを殺してしまえば、当然スリイナは学校に行けない。すると、学校からスリイナの家に連絡がいくだろ？ 娘さんが来てませんよ、ってな。

そして、その連絡こそが最大の問題だ。

連絡を受けたスリイナの家の者にしてみれば、スリイナが朝、俺の家へと元気に出発したことを確認しているはず。すると当然、何か知っているんじゃないかと疑われるるのは、この俺だ。

だからまず、学校には行かせないといけない。スリイナの家に連絡が入るのだけは避けないといけないからな。

したがって、ひとまずは大人しく朝食……だ。

俺は複雑な思いを抱えたまま、スリイナの待つリビングへ向かう。

「あ、やつと来た。遅いよ」

「…………ごめん」

俺は食卓の椅子に腰かけて、対面のスリイナを見る。

いつもと変わらないおつとりとした表情。今日自分が殺されるなんてこれっぽっちも考えてもいらないだろう柔軟な微笑み。そんな穏やかな顔の下に、俺は目線を移す。

そこには細い首がある。おもいつきり絞めれば、それだけで殺せる急所がある。人なんて脆いモノだ。簡単に、それはもう、いつも簡単に殺せる。

殺そうと思えばいつだって殺せる……。

でもいまはダメだ……。

……じゃあ逆にいつならいいんだ？ タイムロミットは今日の午後一時頃。もう十数時間しかない。……一体どのタイミングで殺す？

このあとは学校。けど学校なんかで殺せるわけがない。

そしたらあつという間に夕方だ。帰り道に殺すか？ いや、無

理だ。俺たちの帰る方向には、いつもそれなりの数の生徒が歩いている。道を逸らしてもダメだろうな。ここ辺は都会じゃないにしても、そこそこ大きな街はある。それに、この一帯は住宅街。人殺しなんてできるわけがない。もしスリイナに叫ばれでもしたら、俺はそこでおしまいだ。ということで帰り道も無理。

じゃあどうすんだ？　あとはもう家に帰るだけだぞ？　そんなことされたら、絶対にスリイナを殺せなくなる。屋敷の周りには警備がいるし、夕方っていう時間帯だと使用人たちだつて大勢いるはず……って、あれ？　そうだ。スリイナは家に入れさえすれば、絶対に殺せなくなる。……だからあれじゃないか？　スリイナの身は安全なんじやないか？　例え、俺が殺すことを放棄して新しい殺し屋がやってきたとしても、なんとかなるんじや……って、ならない！　何を考えてんだ俺は！　リールが人質に取られてるんだぞ！　スリイナを殺すことを放棄したら、リールが殺されるんだぞ！　放棄とか、何わけの分からないことを考えてんだ俺は！　ホントにバカだな！　殺さないと殺されるって何回言い聞かせれば分かるんだよ！　無駄な希望は捨てろ！　もうスリイナは殺すしかないんだよつ！

はあ……話を戻そう……。

帰り道で殺せなかつたらスリイナにはもう手が出せない、つてところまでだつたな。

それでだ、その話から俺は一つの結論に思い至つた。
その結論がどんなモノかと言えば

やつぱり、いまが絶好のチャンスなんじやないか？　つてことだ。

きつとそうだ。ここを逃したらもう殺せない。いや、正確に言えば殺せないわけではない。けど、誰かに見られる可能性がある。そしたら俺はおしまい。

だからこそ、誰の邪魔も入らない、いまがチャンスだ。……でも、

「……」で殺したらスリイナが学校に行けなくなる。連絡がいつてしま……いや、そんなのは俺が理由をでっち上げればいいじゃないか。どんな理由にするかはあとで考えればいい。もう迷ってる暇なんてない。じゃないとリールが……リールが、リールが、リールが、リールがリールがリールがリールがリールがリールがリールがリールがリールがリールが殺される！このチャンスを逃せば、その可能性はほぼ一〇〇パーセントになる！

だから殺さないと！スリイナをここで殺さないと！

俺は立ち上がりキッチンに向かう。包丁を手に持ったのち、くるりと振り返る。

「……フイー？ 何、やつてるの……？」

もう殺し方なんて構つてられない……じゃないとリールが、リールが死ぬ！

俺は一步一步……静かに歩みを進める。包丁を突き出しながら歩みを進める。

「フイー？ 何？ ねえ、何……？」

スリイナが席から立ち上がり、あとずさりを始めた。一方の俺は足を進め続ける。……止めない、止めちゃいけない。リールを助けないと。あの顔をもう一度間近で見たい。だから俺は止まらない、止まるわけにはいかない。

「…………うつ」

スリイナが壁に背中をぶつけた。……あははは、これはもうつな。

俺は足を止めず、恐怖をあおるようにゅうべつと距離を縮めていく。

「ねえ冗談はやめよう？ フイー？ ねえフイーってばあ……」
目に涙を浮かべて、スリイナが訴えてくる。

「冗談、か。もしそうだったら……どんなにいいことか。

俺はそう思いながら足を動かし続け、ついにスリイナの目の前ま

でたどり着いた。

スリイナは俺を見上げる。俺はスリイナを見下ろす。

スリイナの顔は完全に怯えていた。幼なじみに見せる表情じゃない。化け物を見るような目だ。怯えていて恐れていて畏怖しているような、そんな目だ。

けど、それを見ても俺は止まらない。

俺はスリイナの太ももの上に馬乗りになる。

「ねえ……フイー、どうしたの？ おかしいよ…………？」

そんな状態になつても、こんな俺を見ても、まだ心配してくれるのか……。

くつ……でも、殺さないと。

何も関係ないのに巻き込まれたリールのために。

俺がスリイナを……殺すつ！

俺は包丁を高く振り上げる。

さあ、あとは一思いに包丁を振り下ろせば
んあ？ なんだ？ なんで動かない？ ……動け、動け！ 動け
！ 動けえ！

そう命じるも、俺の右腕は誰かにがつちりと掴まれているかのように動かない。

くそっ！ なんで動かない！ 肩！ 腕！ 動けよ！ なんで動かないんだよ！ 動かさないとリールが、リールが殺されるんだぞ

……。
耐えられない現実を考えながら命令を下しても、俺の右腕は別生き物になつたが如く反応を示さなかつた。

……なんでだ？ リールより大切なものなんて、この世に存在しないはずなのに……なのに、どうして俺は、スリイナを殺せない……？ この機を逃せば、スリイナと二人きりのチャンスなんてもうないつていうのに！ どうして腕が動かないんだつ！

その時 僕の体が突然小刻みに震えだす。

最初、一体なんだ？ と思つたが、理由はすぐに嫌でも分かつた。

視界がいきなり定まらなくなり、そのあと頬を何かが伝った。

どうやら俺は泣いているらしい。小刻みに体が震え、力が抜けてくる。振りかざしていた腕も下がり、俺の手から包丁が抜け落ちる。力アンと震えるような金属音が鳴り響いた。

俺は……殺せないようだ。俺はスリイナを……リールを人質に取られてもなお殺せないようだ。

なんでだ？ ……一番大切なものを奪われてのに、なんで殺せないんだ？

涙を流しながらそう考えていると、スリイナがいきなり俺を抱き寄せた。

「ねえ……フィービーどうじちやつたの？ リールちゃんが泊まりに行つただけじゃ、こうはならないよね？ ……仕事がつらいの？ ……学校に行きながら働くのがつらいの？ それとも生きる環境がつらいの？ 何が一体ビーブしたの？ 話せることなら話してよ！ ねえフィーー！」

「……」いつは……スリイナはなんでこんなに優しいんだ？ 俺のいまやろうとしたこと、分かつてのはずだよな？ 殺そうとしたって、分かつてのはずだよな？ なのに、なんでまだ優しく……厳しく声をかけてくれるんだ？

俺はただただ泣いた……スリイナの腕の中で、声を上げて泣いた。しばし泣いていると、いつの間にか学校に行く時間が近づいてきたらしく、

「…………」フィーは疲れてるんだよ。だから、今日はゆっくり休んで。先生には私が言っておくから。ね？」

スリイナはいつも調子で俺に声をかけて、何ごともなかつたかのように家から出て行つた。

そのあとの俺は いつまでも泣いてた。

泣き終わつてからも何も考えられず、俺はスリイナを襲おうとした位置から一步も動かすにひたすら生氣を失っていた。

ピピピピピ、ピピピピ。

「ん……？」

俺は携帯の着信音を聞いて、はつきりとした意識を取り戻した。
「な……っ！」

そして 部屋のあまりの暗さに愕然とした。

……な、何時だ！ いまは一体何時だ！ け、携帯！ 携帯のデイスプレイ！

メールが来たようなので、俺はその確認の意味も込めて携帯を取り出し やたらに愕然とした。

デイスプレイには午後一一時の表記。

携帯を開いて来たメールを確認すると、『タイムオーバー』という件名。

「う、嘘だろ……嘘だよなあ……」

最悪の状況を思い浮かべてしまつた俺は、つるたえながらメールを開く。

すると、そこには一枚の画像が添付されていて それを見た俺は崩れ落ちる。

この世で一番見たくなかったモノを見てしまつたから……。

田を閑じて倒れているリール。

何よりも見たくなかった画像を見てしまった……。

震える手で画面をスクロールさせると、下には文章が続いていた。

残念ですが、タイムオーバーです。

やはり殺せませんでしたか。

甘ちやんですね。そして、そのせいであなたは「」の世界一番大事なものを失つてしまつた。

してください。

ですので、これから監視を任せていた者に、あなたと、そしてス

リイナ・フォシルークスを始末させます。

どうせも、生きていっても仕方がないでしょう？

妹さんとお友達とともに、永遠に眠つてください。
では、来世で会いましょう。

会えたらですけど。

最悪の展開が羅列されたメール。

けど、いまの俺にはそんなこと、どうでもよかつた。

言葉にならない叫びとともに立ち上がったのち、俺は破壊の限りを尽くし始める。

壁を殴り、蹴飛ばし、穴を空け。

小物を窓ガラスに投げ付け、砕け散らせ。

テーブルを持ち上げ、床に叩き付け、ただの木材へと変化させ。そしてもう一度壁を殴ろうとしたところで　俺は、はたと我に返る。

「こんなことしてなんになるんだよ……！」

吐き捨てる同時に壁を蹴飛ばしたのち、俺は膝から崩れた。

「うああああ……リールう……」

俺が泣きじゃくってたばっかりに……巻き込むだけでなく、死なせてしまつた……。ごめん、ごめんなリール……。謝つたつて許されることじゃないけど、でもごめんな……。どう償えればいい？　どう償えれば、リールは俺を許してくれる？　死ねば、死ねば許してくれるか？　だとしたら、俺は喜んで死んでやるぞ。もうじき俺も殺されるらしいから、それを黙つて受け入れれば許してくれるか？　それにさ、おまけにスリイナも消されるんだ。これで寂しくないだろ？　あの世でも三人一緒だ……。

そう、三人一緒。

俺もスリイナもこれから殺されて、あの世に行くんだ。

あーあ……やっぱリスリイナほどのみち殺される運命だったわけだ。

なら、遠慮せずに殺せばよかつた。

そうすれば、俺とリールは生き残れたのに……。

大体なんで、俺はスリイナを殺せなかつたんだ……？

なんでだ？

リールを人質に取られてたのに、俺はなぜ、スリイナを殺せなかつた？

そんな風に考えて、俺は一つの答えを、結構簡単に、導き出した。

俺にとつてスリイナは、リールと同じぐらいに大切だった、ってことなのだろう。

ただ、なんでスリイナが大切なのがよく分からない。リールは家族で妹だから守りたいと思うのは当然だ。けど、スリイナにも似たような思いを抱いている理由が、俺には分からない。

でも、その結論に至った途端、俺は『このままじゃいけない！』と思えるようになってきていた。

リールは守れなかつたけど、スリイナだけは守らなければいけないんじやないかと。

そんな、一種の使命感みたいなものが、俺の中に湧き上がつてきていた。

リールと同じく大切だと思えるスリイナを守ることで、リールを守れなかつた代わりになるんじやないかと、俺はそう思つてゐるのかもしれない。

もちろん、そんなことしたところで、リールを死なせてしまった事実が消えるわけじやないことぐらい、俺は理解してゐる。けどこのまま無駄死にしたら、なんとなく、なんとなくだけど。

リールに怒鳴られそうな気がするんだ。

スリイナを守れなかつた上での無駄死に、つていうのは最低だろ？

だけどスリイナを守つた上での死、だつたらどうだらうか？
名譽ある死に方だし、これだつたらリールも許してくれるんじやないだらうか。

つまり そう、つまり 僕は、スリイナを庇つて死のうと思つう。

スリイナに迫るうとしている死を一度だけ、俺が肩代わりしようと思う。

そのあとスリイナは、殺されるかもしれないけど、それでも俺は、スリイナを一度だけ、死から守ろうと思う。

よくよく考えてみれば、スリイナだつてリールと同じぐらいにかわいそななんだ。

何も知らずに命を狙われていて、おまけに幼なじみから包丁を向けられたりしてさ。

ただ普通に暮らしてただけなのに巻き込まれた。

この点は、リールもスリイナも一緒なんだ。

つまり、リールが死んだのがスリイナのせいだって思うのは、間違いなんだ。

少なくとも、リールとスリイナは何も悪くない。

悪いのは、裏世界の住人であるこの俺だ。

俺が裏世界なんかに入つてさえいなければ、こんなことには巻き込まれなかつたんだからな。

その罪滅ぼしつていうのかなんていうのか……とにかく、そういうのも全部ひつくるめて、俺はスリイナを守つて死のうと思つ。都合がよすぎるか？

なんとでも言え！

俺はもう決めたんだ！

やられっぱなしも嫌だしな！

それじゃあ、考えことはここまでだ。

俺を監視していく奴が俺とスリイナを殺しに来るつてことは、その殺し屋はすぐ近くに居るつてことだ。

だから急がないと！

スリイナのところに急がないといけない！

いまは……午後一時五分。

そうか！ タイムリミットをこの時間帯に設定したのは、俺がスリイナを殺せなかつた時のことを見越していたからか！

スリイナの家の警備は午後一一時ごろだけ手薄になるとスリイナは言つていた。

つまり、スリイナを殺せなかつた俺に代わり、スリイナを殺すことなつた殺し屋が、少しでも、スリイナを殺しやすくなるために、午後一時、というタイムリミットは設定されていたのだ。

とか考へている間に無駄に一分経つちまつた！

くそつ、急がないとな！

そう考えたのち、俺は無我夢中で我が家を飛び出した。
誰になんと言われようと　スリイナを守るために。

スリイナの家に到着すると、やはり警備がいなかつた。しかし、中から悲鳴などが聞こえてくる様子はない。

まだ襲撃されてないのかもしれないぞ！ それなら！

俺は昨日スリイナに案内されたルートを通つて、スリイナの部屋へ向かう。

たどり着くと、俺はノックもせずにドアをおもいつきり開け放つた。

「スリイナ！ 無事か！」

「きゃあ！」

よかつた、無事みたいだ。

「いつたん静かに」

俺は顔の前に人差し指を持つてきながら、小声の最大出力で言葉を発した。

「ふい、フイー？ デウしたの？」

説明してる暇はない。もしかしたら、いまの俺みたいにもう侵入しているのかもしれないからな。いや、確実にしてるだろう。俺でさえ簡単に入れたんだぞ？ 監視もこなせるような熟練の殺し屋が侵入できないはずがない。

だから、俺はスリイナの腕を握つて、

「逃げるぞ」

何よりも優先しなければならない事項を告げた。

「え？ 逃げる？」

スリイナは困惑していたが、俺は構わず引っ張つた。

家の中に居ちゃダメだ。殺し屋と鉢合わせでもしたらそこで終わりだ。それよりだったら、どう考へても外に逃げるのが一番いいはず。当たり前だけど外の方が逃げやすいし、隠れる場所もたくさんある。

俺は侵入時と同じルートを通り、なんなくスリイナを外に連れ出した。

ホントに弱点すぎるんだろ、この時間帯つ！ って、そんな突っ込みはあとあとー、こまはとにかく逃げなくちゃなつ！

とか思っていたその時

「……ああ、お前がお前でいいんだよ。でも、お前がお前でいいんだよ。」

スリイナの家の中から、金切り声が聞こえてきた。
ぱりいたのが殺し屋つ！

「ええつ？ な、なんで

「イー？」

「説明は走りながらな！」とにかく逃げるぞ！ホントにヤバイから！

「ウラガタ」

可憐なじーにパジャマに身を包んだスリイナと一緒に、俺は夜の住

「ねえ、フイー？」それでフイーは向こうに来たの？　なんで逃げる
宅街を疾走し始める。向かう先は……とりあえず学校方面だ！

の？

「まああれだ、早い話がお前を狙つてる奴がいるんだ」

締められるところはオフラーと一緒に包んだ。 気力をなくされたら困るからな。

「ん……なんでフイーがそんなこと知ってるの?」

「え？ あー、んー、その、まあ……」

……説明する必要なし、正直に言えるような理由でもないしなあ。

「勘だ」

凄い勘たね！」

ふう、天然でよがつた。

「あ、そういえばリールちゃんは帰ってきた？ 今田一緒に帰ろうと思つて校門で待つてたけど、いつになつても来なかつたよ？」

……くつ、リールはもう……。いや、ここで悲しむな。スリイナに悟られたらダメなんだ。

「……ああ、帰ってきてる。家で……ぐつすり寝てるよ」

「そつか、それならよかつた。それでフイー、元気は出た?」

「……ん、ああ。……それでさ、朝、変なことしてごめんな……」

「ううん、気にしてないよ。……ちょっとだけ怖かっただけど、フイーは人なんか殺さないって信じてたから……」

人なんか殺さない……か。ホントにそうなら、ここで胸張れるのにな。

でも、スリイナは俺なんかのことを、そこまで信用してくれてることか……。

「……ありがとな。そうやって、その……信じてくれてさ」

「それは当然だよ。いまだつてこいつやつて助けてくれてるし、お礼を言つるのはこっちの方。ありがとね、フイー」

俺の方を向いて微笑んでくれたスリイナの表情は、夜の暗さなんかに負けないぐらい明るいものだつた。

……なんか照れくさい。そんな風に思つてる場合じゃないのに。

そう、ホントにそんなことを思つてる場合じゃないんだ。

「スリイナ、話はまたあとでな。いまはとにかく必死に逃げるんだ。そうしないと……もしかしたら……殺されるかもしれないぞ?」

言おうかどうか迷つたあげく、結局俺は言つてしまつた。もしかしたらその方がやる気もアップするんじゃないかな? という望みを込めて。

俺は恐る恐るスリイナの顔を見やる。すると、残念ながら怯えた表情になつていた。

あー、やっぱ言わなきやよかつた。とか悲観してる場合じゃない。フォローしないと。

「あなたのスリイナ、でも大丈夫だ。安心しろ。俺が命に代えても、絶対逃がしてやるから。な?」

そう声をかけたのち、俺はプライスレスなスマイルをスリイナに

見せつけた。

「うん、ありがと」

スリイナは俺に、笑みを浮かべて返してくれた。

癒しをくれる、優しい笑みだ。……頼むから、ずっとその顔でいてくれよ。

いまはそれが原動力なんだからな。

あ、そういうや……スリイナの家の方はどうなった?

考えながら、俺は振り返った。

「ん……？」

何やら黒い人影がこちらに向かってきていることに気づく。……

あいつか? あいつが殺し屋なのか?

直後、人影は一瞬だけ街灯に照らされた。そして俺には、その姿がよーく見えた。

そいつが黒い理由は、夜の闇のせいじゃなかつた。着ている服が実際に真っ黒だつたんだ。まさに殺し屋といった格好。

けど、いまは武器を持っていないみたいだったの、俺はほんの少しだけ息を漏らした。

だが、安心なんてまだできない。相手はそこら辺の不良とはわけが違う。

本物の殺し屋だ。俺とは違つて、身体能力が高そうなタイプだった。

「スリイナ! スピード上げてくれ!」

「う、うん」

スリイナ、そろそろバテてきたか? どこまで逃げられるか。でも、逃げ切れなくなつたら、俺が身代わりになつてスリイナを逃がす。命に代えても逃がす。

そう、それでいい。そう決めたんだからな。

それからしばらくは走りに走つた。どんなもんだ、と思ったところでふと振り返つてみると、差は確実に縮まつてゐるようだつた。目測で五〇メートルといったところだらうか。

ヤバイな…… じつや。ホント早いとこ、入り組んでるよつたな場所に入らないと。

で、ここり込んで入り組んでる場所はどこやねんって言つたら…… やつぱり学校だ。小中高の校舎やらなんやらで、あそこは入ったことのない人間なら必ず迷うはずだからな。

学校までは…… 周りの景色から察するにあと少し。

「スリイナ！ とりあえず学校まで頑張れ！」

「…………う、うん」

ヤバイな。スリイナ、運動は苦手だからなあ……。とりあえず学校の敷地に入れれば、俺が命をかけて時間を稼いでやれるのに。そうすればきっと、逃げ切れる可能性は上がるはずだ。

俺は殺し屋との距離を確かめるためにもう一度振り向く。

ああ確実に縮まってる。もう四〇メートルってところだな……。殺し屋のあまりの速さに、顔をしかめながら正面に戻すと、我らが学び舎が見えてきていた。

おお、走ると案外早く着くもんだなあ。

俺は感心しながら顔をほころばせた。これなら、なんとかスリイナを逃がすことだけはできそุดからな。

そうして一分ほど走つて、俺とスリイナは校門を突破した。

次に待ち受けるのは、左側の初等部・中等部ルートと右側の高等部ルート。真ん中の巨大グラウンドルートもあるが、そこは隠れる場所も何もないからバスだ。

うーん…… 校舎が二棟もある左側ルートの方がいいな…… よし！

「スリイナ！ 初等部の方に つておい！ スリイナ！ 歩くな！」

「もう無理…… フィーは、先に、逃げて……」

「つたくもつ！」

俺は弱気なことを言つているスリイナをお姫様抱っこした。

「……お、重いでしょ？ 降ろしていいよ。まだ走れるから」

「重くない！ いいから黙つて体力を回復させてろ！ 絶対逃がし

てやるからな！」

が、人を抱えて逃げられるほど、殺し屋は甘くなかった。
歩くよつに走る俺の背中に、冷たい何かが突きつけられた。

「止まれ」

腹に響いてくるかの如く重くて低い威圧ある声が、真後ろから聞こえた。

俺はスリイナを急いで降ろし、

「逃げる！ 早く逃げる！ ここは俺があ……っ！」

俺は背中をおもじつくり蹴飛ばされた。

「フィー！」

スリイナは走り出そうとしていた足を止めて、俺に向かつて声を上げた。

「止まるな！ 早く逃げる！ 俺はいいから……お前は、スリイナは生きろっ！」

「やだつ！ フィーを置いていくなんてできない！」

「わがまま言つな！」のままじゃ……このままじゃ殺されるんだぞ！ いいから逃げろっ！ ホントに死ぬぞ！」

「いいよ！ フィーとだつたらここで死んでも構わない！ だから私は逃げない！」

「そんな……そんなこと、言つなよ……」

それじゃあ……俺が必死にここまで連れてきた意味がないじゃないかよ……。

とそこ

パチパチと、殺し屋がどこかわざとらしい小さな拍手をした。

「美しい、実に美しい。この仕事をしていて、まさか本当にそういう現場に会えるとは思わなかつた……。だがな」

殺し屋はそこで言葉を区切ると、右手に持つたハンドガンの引き金に指をかけ、それから銃口をこちらに向けてきた。

「 続きはあの世でやれ

俺は撃たれると思い、反射的に口をつむった。

けど、まだ撃たれなかつた。

俺がおつかなびっくり目を開けると、殺し屋は思い出したように「そうそう」「う」と呟いた。

「主に、お前がなぜあの依頼を遂行できなかつたのか。その理由を聞いてこいと言われている。まあ言え。殺すのはそれからだ」

あの依頼……つていうのは、もちろん今回のスリイナ暗殺のことだろう。

……でも、なんでこいつの主がそんなことを知りたがるんだ？
主つていうと、あの電話野郎のことなんだろうけど……それはまず、いいか。

それより理由ねえ……それはまあ、スリイナが大切だからなんだけど……実は、それよりもさらに詳細な理由つていうのが、俺の中につたりする。それに気づいたのは、別にいまじやない。今日でも昨日でもない。ずっと前に気づいてたんだ。

なんでスリイナのことが大切なのか。それはずっと前から分かつてたんだ。でも俺は、今までそれを否定していた。

……だって、すげえ恥ずかしいことだからな。
でも、もういいや。

どうせ死ぬんだから、最期……スリイナに聞いてもらおう。

「……いいぜ、教えてやるよ」

俺はおもむろに立ち上がり、殺し屋の正面に立つ。

それから、大きく息を吸つて吐く、吸つて吐くを数回繰り返した。

「ふう……」

俺がスリイナを殺せなかつた理由。

あんなに泣いて、ためらつて、結局殺せなかつた理由。

俺はもう一度大きく息を吸つて吐き、それからスリイナを指差して大声で言つてやつた。

「俺はこいつが！　スリイナ・フォシル＝クスが大好きだからだー！」

「へ？」とスリイナの声が聞こえた気がした。

ああくそつ！　死ぬ前でも死ぬほど恥ずかしいなこれ！

ああ早く！　殺し屋さん！　早く一思いに撃つてくれ！

すると、そんな願いが通じたのか殺し屋さんは

「そうか。主も納得だろ？　な。じゃあ……」

殺し屋は銃の引き金を

「じゃあ……またな」

殺し屋は銃の引き金を引かなかつた。引かないぜ！　とか、き
びすを返して来た道を戻ろうとさえしている。

なんでやねん！

「ちょい待ちいや！　なんであんた帰んねんっ！」

俺が呼びかけると、殺し屋はさも当然とばかりに言葉を切り出す。
「なんでつて、納得のいく答えをもらつたから帰るんだよ。じゃあ
な小僧。その娘のこと大切にしろよ」

はつ？　えつ？　ちょ、ちょっと何これつ？　ドッキリ？　ドッ
キリなのか？　じゃああれば？　プラカードみたいなの持つてる人
は？　　つて、ちょっと待てえい！

俺は殺し屋さんにダッシュで近づいていき、いま一番聞きたいこ
とを訊ねる。

「あ、あの、リールは？」

「ああ、あのお嬢ちゃんなん。いま頃はお前の家でぐっすり眠つてゐ
と思つぞ」

「ど、どちらの意味で？」

「普通の意味でだよ」

ははははは、と笑いながら殺し屋は立ち去つていぐ。

俺はそれを、ただただ呆然と立ち去しながら見ていた。

……何これ？　はつ、マジで意味分からんしね。

「……なあ、スリイナ。お前何か知つて……あつー！」

ちょい待て！ 何がなんだかホントにわけが分からんんだが……」

「一つだけ、もの凄いトンデモな事実を、俺は覚えているぞ……。

「あ、あの、ああああの恥ずかしい台詞があ……ぬおおおお

おおおつ！ 死ねる！ 恥ずかしすぎて死ねる！ 閃絶死できる！

「……ねえ、フィー？」

どこの民族よろしく垂直ジャンプを繰り返している俺へと、スリイナがうつむき加減で近づいてきた。

「な、なんだよ！」

俺はすぐさまスリイナに背を向ける。くう……恥ずかしい。

「その……わつき言つてたのって……ほんと？」

「う、嘘に決まってんだろう！ ああ言えばもしかしたら納得して帰つてくれるかなあつて思つただけだ！ お、お前のことなんか好きじゃねえし！」

「シンデレカ！ 俺、シンデレカ！」

「えへへ、そういうことでいいよ」

「やうじり」とでいいとかじやねえし！ ホントに好きじやねえもん！」

「べ、別にそこまで否定しなくても……」

スリイナの元気が急激になくなつた。俺は慌てて振り返る。

「その、好きではないけど、だからって別に嫌いってわけじゃないぞ？ それにあれだ。どっちかつて聞かれれば、その……好きだしね」

「な

俺は恥ずかしい告白をしてから、初めてスリイナの顔をちゃんと見た。けどそれは一瞬だけで、台詞の最後の辺りは殺風景なグラウンドを見ていた。

「だつて、目え合わせんの無理だもん。」

俺が頬を搔き搔きしながら色々なところを見ていると スリイナが突然抱きついてきた。俺のちょうど胸辺りにあるスリイナの頭からは、とにかくいい匂いがしてくる。

リアルから得られる幸せに似たものを、俺はスリイナから感じた。

……でさ、こうこう時つて、俺はどつすればいいの？

俺は魔方陣でも描くかのように、虚空中に手をさまよわせている。

……この手でどうこう行動を取つたらいいのかが、まったく分から
ないんだ。

頭をなでるべきか？ それとも抱きしめるべきか？ はたまた
尻でもなでるか？

あ、いや、その……三番田はもちろん冗談だけどさ。
にしたつて一番田と二番田、どつちが正解だ……？

俺がホントに戸惑つてると、スリイナは俺の胸につづめていた
顔を突如上げた。

近つ！ そして可愛いつ！

俺はマッハにも劣らない速度で、中途半端に星が瞬く空を見上げ
た。

「す、スリイナ！ 急に上向くな！」

「あ、ごめん。ところで、その、あのね……フリーがああ言つてくれ
たことに對して、私、まだ返事してないから……だから、その、
い、言おうと思つて……」

「あの恥ずかしい発言を忘れてくださいお願いします……って言つ
たら忘れてくれないか？」

「……絶対に無理だと思つ」

「そげですか……」

「それより、そろそろ返事してもいい？」

「ほ、ホントに返事すんのか？」

「うん……」

……だ、抱きつかれてるわけだから、その、ある程度の予想はつ
いてるけども。で、ででもやっぱり、本人にちゃんと言われるまで
は……なんとも言えないよな。

心臓の鼓動を普段の四倍速ぐらいでお送りしながら、俺は黙つて
返事が来るのを待つことに。

すると、スリイナは俺を抱きしめる力をいつそう強くした。

そして

「私も大好き……」

だとわ。

俺はそのお礼というかなんといつか……をまよわせていた手に行動を促した。

魔方陣描くのはもうやめて、スリイナを抱きしめろってな。正直な話、スリイナを抱きしめるのはこれが初めてだった。幼い頃から一緒にだけでも、やっぱ抱きしめる機会なんてないからな。感想としては、とてもいい感触だ、とでも言つておこいつ。
それでだ、スリイナの返事を聞いた感想としては、めちゃくちゃ嬉しい。

けどや、嬉しいのはいいんだけど、なんか、根本的なことを忘れているよつな……。

あ！ 思い出した。

この一連の出来事つて結局なんなんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4206z/>

幼なじみと妹が居たとする。大切なのはどっち？

2011年12月31日18時49分発行